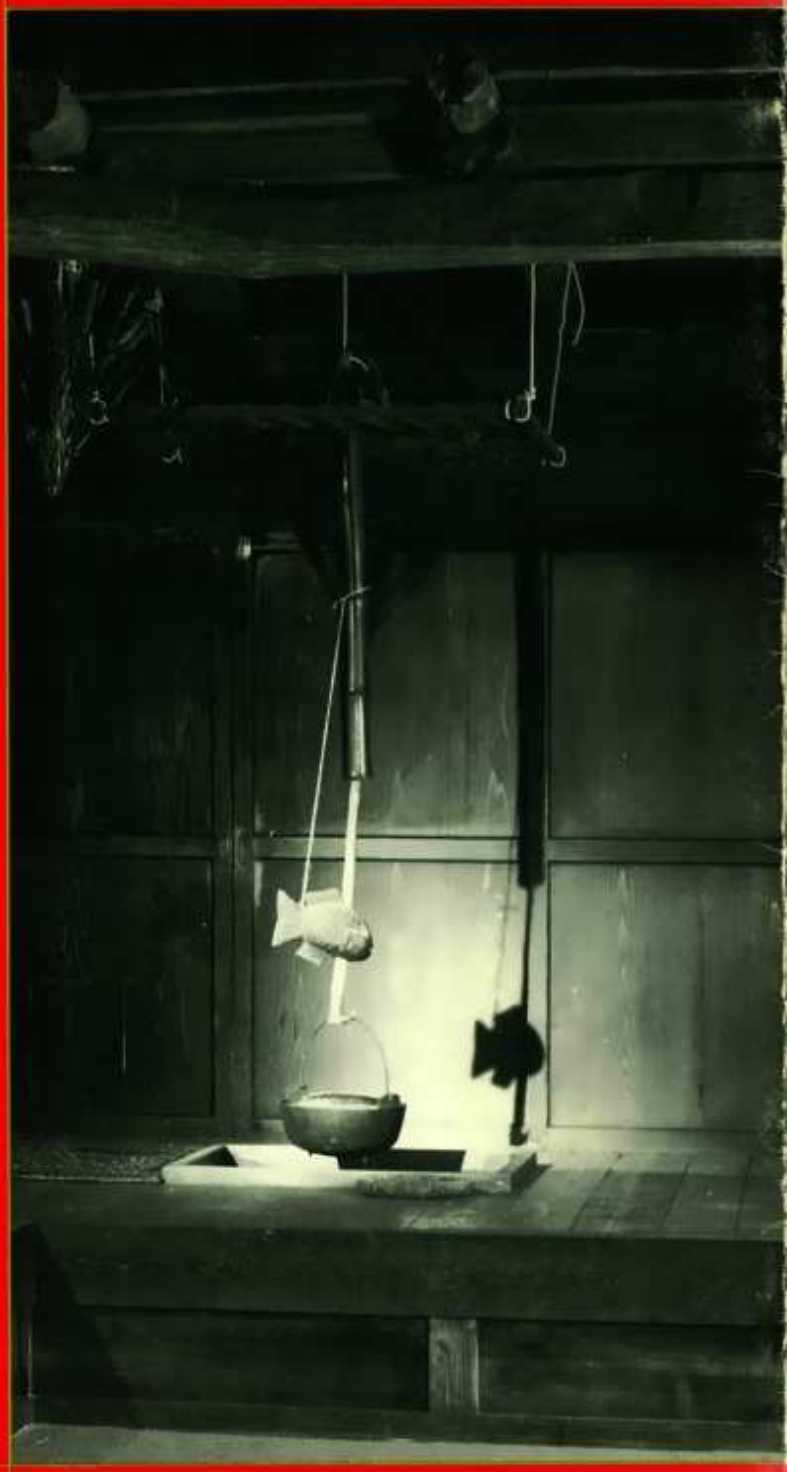
群馬の方言



表紙写真／群馬県立歴史博物館提供

群馬の方言　正誤表

ページ	行（箇　　所）	誤	正
口絵	片品村古仲「右上」	星野里可	星野里可子さん
5	16行目	（中村妙子担当）	（中林妙子担当）
11	最下行（13行目）	（特に……	（時に……
16	7行目（右）	向っている。いわゆる	向っている、いわゆる
18	分派図（左）	関東方言言彙	関東方言語彙
24	注（16）	「関東方言の語彙（『講	「関東方言語彙」（『講
33	6行目（中）	「産道泰」	「産泰道」
34	1行目	古墳が保存している。	古墳が遺存している。
61	下から5行目（左）	える。昭和期……	いる。昭和期……
63	15行目（中）	近世の城路城閣	近世の城跡城閣
65	下から9行目（4）	話中・尾で……	語中・尾で
106	右上	話し手A山本直哉	話し手A山本直義
131	9行目	「アニーアネー」の	「アニー・アンネー」の
152	下から11行目	/→Kasabaru/ガサバル	/kasabaru/→ガサバル

群馬の方言

群馬県教育委員会

前橋市富田町

話者と調査員(1)
左から森村伊勢雄氏、大沢忠男氏、中林調査員
星野次男氏、松本久作氏

富田町の風景
後の山は赤城山

話者と調査員(2)
後列左から大沢忠男氏、星野次男氏、町田一雄氏
中列左から本間芳枝さん、篠木主任調査員、中林調査員
前列左から森村伊勢雄氏、境野茂世さん、有間とくさん、吉田たきさん

三柱神社
祭礼には紙園の屋台でにぎわう

話者と調査員(3)
後列左より森村伊勢雄氏、中林調査員、福田　香さん
中列左より塩沢はるさん、森村氏の奥さん
前列左より有間とくさん、吉田たきさん、境野茂世さん

下仁田町土谷沢

土谷沢の家並み
中央の校舎は旧土谷沢分校

特産のこんにゃくいもの乾燥

話者と調査員
後列左から杉村調査員、赤岡悟氏、赤岡猪三郎氏、赤岡一正氏、中林調査員
前列左から赤岡量平氏、赤岡しなさん、赤岡あさのさん、赤岡ひなさん、篠木主任調査員

上青倉稚蚕共同飼育所

収録風景
岩崎正春氏(左)と赤岡悟氏

六合村世立

男性話者と調査員
前列左から山本武男氏、山本直義氏、山本栄氏
後列左から中條調査員、篠木主任調査員、山本由平氏、
中村幸子さん

県指定天然記念物 世立のしだれ栗
てんとうぐりの名で大切にされている

女性話者(1)
左から山本はんさん、山本きそさん、山本つうさん

世立の家並み
正面手前の峠に「ドンガラ松」と呼ぶ
部落全体の「門松」がある

女性話者(2)
左から山本とくさん、山本とわさん、山本なかさん

片品村古仲

古仲の家並み
民宿を経営する家がふえている

60年度調査
後列左から千明英雄氏、深見泰司氏、金子官一氏、星野関次氏、星野準一氏、萩原大次氏
前列左から中林調査員、星野ユキ子さん、星野タマノさん、篠木主任調査員、星野志んさん、星野里可子さん

58年度調査
後列左から千明英雄氏、萩原大次氏、篠木主任調査員、山口貴美子さん
前列左から星野冨氏、星野関次氏、星野栄三郎氏、星野タマノさん、星野ユキ子さん

武尊牧場
昔は尾瀬まで「駄賃ツケァ」として活躍した馬も今は少なくなった。

休憩時間（民宿「森前荘」にて）
奥から萩原大次氏、星野栄三郎氏、萩原氏の奥様、星野関次氏、星野冨氏、千明英雄氏

大泉町松原

話者と調査員(1)
後列左から篠木主任調査員、菅谷勘氏、今井事務局員、
前列左から山口あささん、井桁モトさん、栗原宇太郎氏、
栗原音吉氏、小此木泰助氏

下小泉松原の家並

話者と調査員(2)
左から栗原宇太郎氏、飯塚調査員、金子定市氏
菅谷勘氏、栗原音吉氏

収録風景
左より栗原宇太郎氏、窪田隆一氏、栗原音吉氏

話者と調査員(3)
後列左から菅谷勘氏、篠木主任調査員、青木恵子さん、蘆原雅恵さん
前列左から栗原音吉氏、井桁モトさん、金子虎吉氏、山口あささん、
小此木泰助氏、山口恵司氏

序　　文

昭和58年度から始められた「各地方言収集緊急調査」は、60年度までの3か年にわたり、前橋市富田町、下仁田町青倉字土谷沢、六合村入山字世立、片品村土出字古仲、大泉町下小泉字松原の5地点での現地調査を無事終了しました。

この調査は、本県にとって幾つかの点で画期的なものがありました。まず、調査方法が優れて言語学的である点です。従来、各地域で方言語彙の収集に力点がおかれ、主として民俗学的に解明する方法が採られてきましたが、今回は、「方言」を音声・音韻、アクセント、文法、語彙等、言語を構成する諸要素を総合的にとらえたことを特色としております。また、調査地点を5地点に限定し、同地点で3年間継続して収集調査を実施し、5地点で延べ、150時間におよぶ自然談話を収録したことも画期的なことです。しかも、従来の質問用紙法によらず、方言保有度の高い高齢の複数話者の会話、対話を収録し、それを延べ45時間ほど、正確に文字化し、標準語訳をつけ、注を付し、解説するという方法をとっている点などです。

これらの方法や諸条件等は、文化庁（国立国語研究所）が、昭和52年7月に定めた、「各地方言収集緊急調査実施要領」に基づくものであります。文化庁では、この「要領」に基づき全国各都道府県に漏れなく調査を実施してもらい、現代日本の言葉を国家的文化遺産として保存して行くことにしております。

困難をきわめた現地調査も60年度で完了したわけですが、この意義ある調査の内容は県民一般に公表されるべきものとの考えから、調査報告編集作業を進めて参りましたが、このほど『群馬の方言』として刊行の運びとなりました。本書が県内方言調査・研究の一指針としてのみならず、各分野で活用されることを期待するものであります。

本調査の実施及び本報告書の作成にあたり指導・助言を賜った文化庁伝統文化課・同国語課、国立国語研究所、現地調査に当られた調査員並びに調査補助員の先生方、現地調査に際し多大の便宜をいただいた前橋市・下仁田町・六合村・片品村・大泉町の各教育委員会、文字化・カード作成等にお手伝いいただいた県立女子大篠木研究室の学生諸君、録音テープのダビングに便宜をいただいた県立女子大当局、さらに本調査の主役ともいうべき約50名の話者の皆様方に対して、深甚なる謝意を表するものであります。

昭和62年3月31日

群馬県教育委員会

教育長　千吉良　覚

例　　言

1．本書は、昭和58年度～60年度の３か年にわたり実施された「各地方言収集緊急調査」の成果をもとにして、昭和61年度にまとめたものである。

2．調査地点は、下記の５地点であり、各地点とも３年間同地点とした。

(1) 前橋市富田町　(2) 甘楽郡下仁田町大字青倉字土谷沢　(3) 吾妻郡六合村大字入山字世立　(4) 利根郡片品村大字土出字古仲　(5) 邑楽郡大泉町大字下小泉字松原

3．調査内容・方法は下記のとおりで、文化庁の各地方言収集緊急調査実施要領によった。

昭和58年度　老齢者男女による会話、老齢者男性による会話

昭和59年度　老齢者女性による会話、目上の者と目下の者の会話（対話）

昭和60年度　老齢者と若年者の会話（対話）、場面設定の会話、民話

以上の条件のもとでの自然談話を１年度各地点10時間分収録し、うち３時間分を正確に文字化し、これに共通語訳を付し、注をつけ、解説をつけるものである。

4．３に示したとおりの調査法が採られ、従来の質問用紙法は採らなかった。結果として収録済テープ1,000本（90分もの）150時間分の自然談話（民話・場面設定の会話を含む）を採集し、うち45時間分が文字化された。

5．調査員は、言語学（方言）を専攻する学者５名を委嘱した（10．調査員等名簿参照）。また、現地調査に際し、話者の選定・会話の進行等の為に各地点１名の補助調査員を委嘱した。更に、テープの文字起こしの作業には県立女子大の学生諸君にお手伝い願った。

6．本書の構成は、Ⅰ概説、Ⅱ各調査地点の方言、Ⅲ民話となっており、Ⅱについては、

(1) 概観　(2) 方言的特徴等　(3) 文字化（抄）（自然談話、場面設定の会話）

7．執筆は、言語学的専門分野は調査員が、各地の概観は補助調査員が分担し、編集は県文化財保護課方言調査担当今井英雄が、主任調査員の助言を受けつつ担当した。

8．本書中の方言語彙・会話等の表記は、原則として片仮名表記としたが、やむをえない場合は「国際音声記号」を使用した。

9．方言語彙については、その究明が十分でなかったので本書では触れなかった。但し、本書編集の過程で、本県の方言・民俗学等の文献から抽出した方言語彙約４万語分がカード化されており、将来活用されるはずである。

10．各地方言収集緊急調査調査員話者等一覧

(1) 調査員（◯印は主任調査員）

飯塚英夫　茨城県立古河第一高等学校教諭　言語学（英語学・方言）　大泉町担当

◯篠木れい子　群馬県立女子大学助教授　言語学（方言）　片品村担当

杉村孝夫　福岡教育大学助教授　言語学（方言）　下仁田町担当

中條　修　　静岡大学教授　言語学（方言）　六合村担当

中林妙子　　国学院大学大学院博士課程研究生　言語学（方言）　前橋市担当

(2) 補助調査員（○印は群馬県立女子大学々生）

前橋市　森村伊勢雄(荒砥史談会々長)　○本間芳枝　○福田　香

下仁田町　福田孔一(下仁田町職員)　○清水久美子　○富沢祥子　○鳥山恵美子

六合村　山本由平(六合村議会議員)　○三ツ木美佐枝　○中村幸子

片品村　千明英雄(片品村教委社教主事)○山口貴美子　○広田幸枝

大泉町　菅谷　勘(大泉町公民館長)　○神田潤子　○蘰原雅恵　○三ツ木美佐枝
○青木恵子

録音担当　今井英雄(県文化財保護課)

(3) 話者（☆印は故人）

前橋市	有間とく	大沢忠男	境野茂世	塩沢はる	星野次男
	町田一雄	森村伊勢雄	森村民利	吉田たき	松本久作
下仁田町	赤岡あさの	赤岡猪三郎	赤岡一正	赤岡　悟	赤岡しな
	赤岡ひな	赤岡量平	岩崎正春		
六合村	山本きそ	山本清司	☆山本　栄	山本武男	山本つう
	山本とく	山本とわ	山本直義	山本なか	山本はん
	山本由平				
片品村	萩原大次	深見泰司	星野栄三郎	星野志ん	星野準一
	星野関次	星野タマノ	☆星野　昌	星野ユキ子	星野里可子
大泉町	井桁モト	小此木泰助	金子定市	☆金子虎吉	窪田隆一
	栗原音吉	栗原宇太郎	栗原ふく	山口あさ	山口恵司

(4) 調査協力機関・協力者

前橋市・下仁田町・六合村・片品村・大泉町の各教育委員会、群馬県立女子大学

市村勝美　　中村福美　　金子宮一

(5) 事務局

群馬県教育委員会文化財保護課

目　　次

口　　絵
序　　文
例　　言

I　群馬県方言の概観 …… 1
群馬県方言の概観 …… 5
1　は　じ　め　に …… 5
2　「方　言」と　は …… 6
3　群馬県方言の方言区画上の位置 …… 7
4　群馬県方言の特色と地域差 …… 10
(1)　音声・音韻 …… 10
(2)　アクセント …… 14
(3)　文　　法 …… 14
(4)　語　　彙 …… 18
(5)　ま　と　め …… 23
5　お　わ　り　に …… 23
II　各　地　の　方　言 …… 25
1.　前　橋　の　方　言 …… 27
前橋市富田町の概観 …… 29
前橋市富田町の方言 …… 35
1　は　じ　め　に …… 35
2　音　声・音　韻 …… 35
3　ア　ク　セ　ン　ト …… 41
4　文　　法 …… 44
5　お　わ　り　に …… 49
富田町の会話 …… 50
1　自　然　談　話 …… 50
2　場面設定の会話 …… 54
2　下仁田地方の方言 …… 57
下仁田町の概観 …… 59

下仁田町土谷沢の方言 …… 64
1 はじめに …… 64
2 音声・音韻 …… 64
3 アクセント …… 74
4 文法 …… 74
5 表現法 …… 77
下仁田町青倉字土谷沢の会話 …… 79
1 自然談話 …… 79
2 場面設定の会話 …… 83
3 吾妻地方の方言 …… 87
六合村の概観 …… 89
六合村世立の方言 …… 94
1 はじめに …… 94
2 音声・音韻 …… 94
3 アクセント …… 101
4 文法 …… 102
六合村入山字世立の会話 …… 106
1 自然談話 …… 106
2 場面設定の会話 …… 109
4 利根地方の方言 …… 113
片品村の概観 …… 115
片品村古仲の方言 …… 120
1 はじめに …… 120
2 音声・音韻 …… 120
3 アクセント …… 126
4 文法 …… 127
5 その他 …… 131
6 おわりに …… 131
片品村土出字古仲の会話 …… 133
1 自然談話 …… 133
2 場面設定の会話 …… 137
5 邑楽地方の方言 …… 141
大泉町の概観 …… 143
大泉町下小泉（松原）の方言 …… 148

1 はじめに……148
2 音声・音韻……148
3 アクセント……153
4 文法……153
5 おわりに……159
大泉町下小泉字松原の会話……160
1 自然談話……160
2 場面設定の会話……164
III 方言と昔話……167

Ⅰ　群馬県方言の概観

各地方言収集緊急調査調査地点位置図

群馬県方言の概観

篠　木　れい子

1　は　じ　め　に

旅に出た時、「私」が「旅人」であることを実感させてくれるのは、なんといっても〝ことば〟ではないだろうか。勿論、旅先の自然や町並み、食べ物などによってもそれを感じさせられるが。

しかし、ひと昔前に比べると、全般的に地域色が失なわれてきている。どこに行っても同じような家々が建ち並び、奥深い山中に出かけても旅館の夕膳には刺身が並ぶということも多い。同じように、ことばもラジオやテレビの普及、交通網の発達、あるいは学校教育によって、確かに以前ほど地域色はなくなってきている。

それでもやはり、私はこのことば〝方言〟にその土地の香りを一番感じるのである。

十年ほど前から、文化庁が全国方言緊急調査を開始した。各方言を３年間にわたって収録し、それを文字化したものに共通語訳と解説を付けて、千年後の私たちの子孫に残そうという仕事である。群馬県については、昭和58年度から60年度まで実施された。県下では次の５地点が調査地となった。

前橋市富田町（中林妙子担当）　　甘楽郡下仁田町土谷沢（杉村孝夫担当）
吾妻郡六合村世立（中條　修担当）　　利根郡片品村古仲（篠木れい子担当）
邑楽郡大泉町松原（飯塚英夫担当）

さて、５地点で３年間にわたって各地点30時間、延150時間の方言を収録したのであるが、私の脳裡には、話者となって下さった方々のお顔とその地域の印象がことばと重なってある。方言が話者の顔となり、そしてその地域の顔となっているように感じられてならない。

文化が、鈴木孝夫氏の言われるように「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型」[(1)]であるなら、ことばは文化そのものであり、そしてまた、ことばはことば以外の文化、生活や歴史を私たちに物語っているのではないかと思う。

１年目の調査は、複数の話者（老年層）に10時間にわたって自由に会話していただき、それを収録することであった。前橋市では養蚕の話が、下仁田町ではコンニャク作りの話が、六合村や片品村では炭焼きや畑仕事の話が、大泉町では終戦間近の町の混乱した様子の話が中心であったように記憶している。

これらの話題を整理しただけでも、すでに、各地の自然環境や主たる産業を推し量ることが

できるし、その内容までに目を向ければ、その土地の人々のかつての生活ぶりや苦労がどのようなものであったか、その中でのささやかな楽しみは何であったか、今その苦労をどのように感じているのか等々、当然のことながら知ることができるのである。

私たち調査員は30時間の会話を、邪魔にならないように部屋の片隅でひたすら聞いたのであるが、その30時間の会話から私たちが把握できた各地の方言の特色を、各担当者が以下に述べることになる。ここでは、その各担当者によってなされた各地の概説と私の資料によって、群馬県の方言概説を試みたい。

2　「方言」とは

群馬県方言の概説をするにあたって、まず最初に、「方言とは何か」ということについて簡単に述べておきたい。

一般に「方言」というと、群馬県であればドドメ（桑の実）やハーテ（風花）、テングルマ（扇車）、～ダンベー（～だろう）などの珍しい語（いわゆる俚言）や表現を想い浮かべる人が多いであろう。しかし、ことばは人間と同じく、一つ一つがバラバラにあるのではなく、それをとりまく多くのことば、例えば類義語や対義語などとの関係の中で、一つ一つのことばの意味が決まっているので、たとえ共通語と同じ語形であっても、詳しく観察してみると、それぞれの地域でその意味が共通語の意味とは多少ずれを生じていることが多い。例えば、六合村のある集落ではツララは共通語と同じく「氷柱」を意味しているが、別のある集落では「氷柱」の他に「氷」をも意味している。また、六合村や片品村や前橋市のニル（煮る）[2]は「大根や芋をニル」以外に、「御飯をニル」（共通語では「御飯をタク（炊く）」）とも用いられている（図1参照）。

そういうわけで、私たちは共通語と同形である言葉も俚言もひと抱えにして、すなわち、その地域の人々が日常生活の中で用いていることば全体を「方言」として研究を進めなければならない。

人は3・4歳から14・5歳までの間に、その人の一生の言葉を習得すると言われている。言葉を習得するこの期間は言語形成期と呼ばれている。この言語形成期に習得した言葉が、その人

図1　平山輝男『日本の方言』（講談社新書）による。

にとっては自分の心を最も自由に、かつ適確に表現できることばであり、また、他人の心を充分に理解することができることば、すなわち、〝母語〟となるのである。

そして、私たちの母なることばは、私たちの祖先が営々と語り継いできた文化遺産である。この文化遺産を丁寧に記録し、分析することは、私たちの祖先のものの見方や考え方を知ることにつながり、また、私たちのこれから進むべき道を模索する上で、大きな示唆を与えてくれるに違いないであろう。

3　群馬県方言の方言区画上の位置

全国の諸方言を、音声・音韻・アクセント・文法・語彙の各分野における特色に注目し、区画することが先覚によって試みられている。

平山輝男氏によれば、日本の諸方言は以下のように区画される。

図Ⅱ　平山輝男『日本の方言』（講談社）による。

- 日本語
  - 本土方言
    - 八丈方言（八丈島方言、青ヶ島方言、小島方言
    - 東部方言
      - 北海道方言、奥羽方言
      - 関東方言、越後方言
      - 東海・東山道方言、北部伊豆諸島方言
    - 西部方言
      - 北陸方言、近畿方言
      - 四国方言
      - 中国方言、雲伯方言
    - 九州方言
      - 九州東部（豊前・豊後・日向）方言
      - 九州西部（肥前・肥後・筑前・筑後）方言
      - 九州南部（薩摩・大隅・諸県）方言
  - 琉球方言
    - 奄美・沖縄方言
      - 奄美方言
      - 沖縄方言
    - 先島方言
      - 宮古方言
      - 八重山方言
      - 与那国方言

氏は本土方言を、八丈島方言を独立させ、四つに区画しておられるが、東部方言・西部方言・九州方言の三つに区画する説や、東日本方言・西日本方言の二つに区画する説もある。いずれにしても、群馬県方言は東部方言の関東方言に属している。

では、関東方言の中にあっては、群馬県はどのような位置にあるのであろうか。

関東方言の範囲についても諸氏によって多少の相違が見られるが、飯豊毅一氏は関東方言を以下のように区画しておられる。(3)

- 関東方言
  - 東北部方言　福島県南部・栃木県（西南部を除く）
    茨城県
  - 東南部方言　埼玉県東部・千葉県・栃木県西南部・群馬県邑楽地区
  - 西北部方言　埼玉県北部・西部・群馬県
  - 西南部方言　埼玉県南部・東京多摩地区
    神奈川県——東京神奈川方言

氏の区画によれば、群馬県の邑楽地区は関東方言の東南部方言に、その他の地域は西北部方言に属する。

関東方言を大きく東関東方言と西関東方言に区画する説によると、邑楽地区は東関東方言に、その他の地域は西関東方言に属する。

同じ群馬県にあって邑楽地区のみが群馬県のほとんどの地域と区画を別にしている大きな理由は、以下の二つにある。

その一つはアクセントである。群馬県のほとんどの地域は、例えば「雨」はアメ（アを高く発音）、「飴」はアメ（メを高く発音）、「橋」はハシ、「箸」はハシのように発音し、それらが混同することはない。「雨」をアメと発音されるのを聞くと、異様な感じを受ける。話されているすべての語それぞれに、高低の配列（型）が決まっていて、ほとんど発音しまちがえることがない。そして、その骨組の部分、すなわち体系は東京や神奈川のそれと同じ、いわゆる東京式

アクセントである。

それに対して、邑楽地区では「雨と飴」、「橋と箸」の区別があいまいであったり、板倉町などでは全くその区別が無く、アメともアメとも発音され、この発音でなければ気持が悪いというような、話し手の型の知覚が無いのである。いわゆる曖昧アクセント、無アクセント（崩壊アクセント）である。ちなみに、全国のアクセント分布図を見ても明らかなように邑楽地区の東隣りの栃木県は無アクセント地域である（図Ⅲ参照）。

もう一つは音声である。板倉町などでは、イとエの区別が無く、「江戸」と「井戸」がいずれもエドのように発音される。また、キ・シ・チ・ニ・ミ・リのイ段音が、他の地域に比べて口の中寄りで調音されるのである。これらのことも程度の差こそあれ、栃木や茨城と共通で、東北方言の匂いを漂わせている（図Ⅳ参照）。

ことばは人間の口に乗って、地を這うように伝播していくものであるので、当然、交流のある隣りの村や町や県のことばと、影響したり、されたりしながら変化するのである。

図Ⅲ　平山輝男『日本の方言』（講談社）による。

図Ⅳ　平山輝男『日本の方言』（講談社）による。

4　群馬県方言の特色と地域差

最も新しい群馬県方言の概説は、昭和59年に、下仁田町担当の杉村孝夫氏によってなされている。[4] 氏は、昭和10年代から50年代初頭までに出された先覚の研究と氏自身の研究によって、高崎市方言を中心にして群馬県方言の特色について述べ、また、先覚による県内方言区画について触れておられる。

そこで、前にも述べたように、ここでは昭和58年度から３年間にわたって調査が実施された５地点についての特色と地域差について概観し、群馬県方言の概説としたい。

(1)　音声・音韻

具体的な音声（[　]で示す）によって、私たちの頭の中にある音の体系を明らかにするのが言語研究の音韻（／／で示す）の分野である。音素は音韻の一番小さな単位であり、拍は音素

と音素が結合してできる時間的な単位で、おおよそ仮名一文字に対応している。

5地点の音声・音韻の特徴を比較してみると、表1の通りである。

表1

項目＼方言	片　品	六　合	下仁田	前　橋	大　泉
/ŋ/	×	×	×	×	×
/co、ca、ce/	○	○	○ /co、ca/のみ	×	×
/kwa、gwa/	(○)	○	×	×	×
/sje、zje/	×	○	○ /zje/のみ	×	×
/ɛ/	○	×	×	×	×
イとエの混同	○	○	○	○	○
ウとオの混同	○	◎	○	○	○
連母音アイ、アエ	ɛ:(ɛæ)	e:	e:	e:	e:
オイ、オエ	e:	e:	e:	e:	e:
ウイ	i:	i:	i:	i:	i:
アウ	o:	o:	o:	a:	a:
イエ	e: (i:)	e:	e:	e:	e:
r音の脱落	◎	○	× (数語)	× (数語)	× (数語)
w音の脱落	○	○	○	○	○
有声音の前の/ɑ/	○	○	×	×	×

表を一瞥してわかるように、当然のことながら同じ群馬県下なので共通点も多く見られるが、一方、山間部でしかも県境に位置する六合村と片品村には、平担部の地点に見られない特色がいくつか認められる。5地点の限りでは、音韻に関しては六合村・片品村・下仁田町・前橋市／大泉町という対立よりは、六合村・片品村／下仁田町・前橋市・大泉町という対立の方が顕著である。

以下、重要な特色について、簡単な説明を加えよう。

(ア)　語中・語尾のガ行音について

共通語では語中・語尾のガ行音は、鼻濁音の［ŋ］であり、音韻的にも破裂音の［g］と対立が認められることはよく知られている。しかも、この［ŋ］は分布図からもわかるように群馬県の東西に広く分布しているが、群馬県は5地点とも、新潟県や埼玉県の一部とともに［g］（時に摩擦音［ɣ］）で発音されている。

(イ)　/ca、ce、co/ について

5地点ともに共通語には見られない /ca、ce、co/（ツァ、ツェ、ツォ）の拍が認められる。但し、下仁田町では /ce/ は確認されなかった。

(ウ)　イとエの対立について

飯豊氏によれば、単独のイとエの対立は、邑楽地区にはなく、その他の群馬県の地域にはある（但し、群馬北部では混同する人がある）。

今回の5地点は、いずれもイとエの対立は認められた。但し、全地点ともイとエの混同の傾向はある。

邑楽地区でも大泉町にはイとエの対立は認められたが、栃木・茨城と接する板倉町などでは、イとエの対立はないと言われている。

(エ)　/sje、zje/ について

共通語にはない /sje、zje/（シェ、ジェ）の拍が六合村では認められる。また、/zje/ については下仁田町でも認められる。

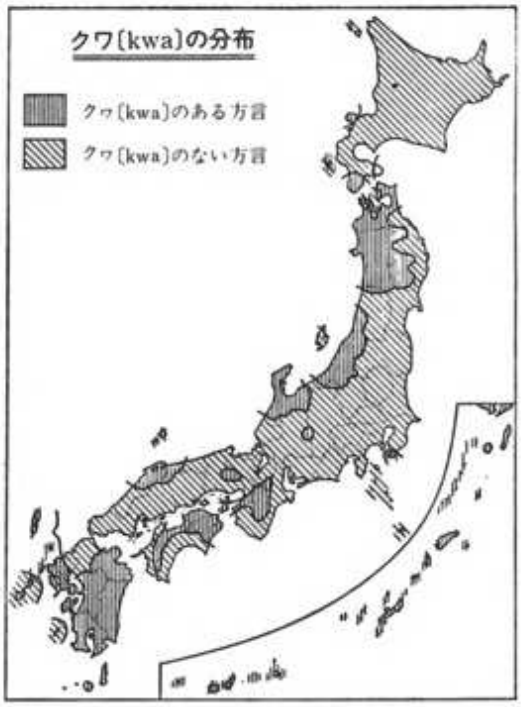
(オ)　/kwa、gwa / について

いわゆる合拗音と呼ばれる /kwa/ クヮ、/gwa/ グヮは開拗音（例えば /kja/ キャ、/kju/ キュ、/kjo/ キョ）とともに、本来の日本語になかった拍である。これらは中国の漢字音の影響で、平安時代に日本語の中に入ってきた音声である。現在では開拗音のみが残り、合拗音は一部の方言に保存されているのみである。

今回の調査で、この /kwa、gwa / が六合村の一地点に残っていることが確認された。

/kwa/ については、大橋勝男氏の『関東地方域方言事象分布地図』[5] によって、関東地方ではこの六合村[6]と千葉県の房総半島の南端にのみ保存されていることがすでに知られていたが、/gwa/ については関東地方にはないとされていた。

全国の /kwa/ の分布を見ると、隣接県の新潟にあることから、群馬県の山間部にこの古音が残っているのも、それほど不思議なことでな



図V　平山輝男『日本の方言』（講談社）による。

いかも知れない(図Ⅴ参照)。

しかし、この /kwa、gwa/ も、若い年代ではすっかりその姿を消している。

片品村にも /kwa、gwa/ の拍は認められるが、但し、これはこの古音にあたる合拗音のそれではなく、例えば「桑」クワがクッと発音されるために生じた拍である。

(カ) 連母音の融合

連母音の融合は5地点とも極めて盛んである。全地点とも、オイ、オエ、イエは[eː]に(但し、片品村ではイエは[iː]ともなる)、ウイは[iː]に発音されているが、アイ、アエ、とアウに地域差が見られる。

アイ、アエは片品村を除く4地点では[eː]となるが、片品村では[εː]あるいは[εæ]となり、[eː]と音韻的に対立する。したがって、片品村の拍体系にはε軸が立ち、他の4地点と大きく異なる。ちなみに、片品村と隣接する新潟県や東北南部でも[εː]である。

関東西北部方言に属する多くの地域では[eː]であるが、飯豊氏も群馬県北部では[εː]が聞かれると指摘されている。(7) 一方、東南部方言では[εː]の地域が多いとされているが、大泉町では[eː]であった。

今回の5地点の調査ではアイ、アエが[εː]となったのは片品村だけであったが、諸氏の研究を見ると[εː]と発音される地域は他にもある可能性が大であり、また一時代前までは、更に広い地域に[εː]が分布していたと想像される。

/kwa、gwa/ と同様、片品村の青年層ではこの[εː]はなくなり、[eː]となっている。

アウは、六合村・片品村・下仁田町では[oː]に、前橋・大泉では[aː]となっている。

西北部方言の多くの地域ではアウはアウと発音されているのに対して、群馬県北部ではオーと発音されていることは飯豊氏がすでに指摘されている。大橋氏の言語地図でもそれは明らかである。氏の言語地図(8)を見ると、群馬県においては[oː]となる地点は北部ばかりでなく、南部にも分布しているが、[aː]の地点はない。

(キ) 母音の無声化

5地点とも無声子音に挟まれた狭母音ｉ、ｕは無声化をしているが、これは関東方言の大きな特徴の一つである。

(ク) ヤ行直音化

5地点ともにヤ行の直音化が認められた。六合村ではその逆の現象、すなわち直音が拗音化する現象が顕著に認められ、特色となっている。

(ケ) wの脱落

5地点ともにa母音に挟まれたw音は脱落し、アーと発音された。

(コ) rの脱落

rの脱落現象は、飯豊氏によれば、東北部方言には見られるが、東南部、西北部にはほとんど見られないとある。また、大橋氏の言語地図にrの脱落の分布図「危ないから」[9]があるが、それによると群馬県下では片品村戸倉のみが「危ないカー」となってrが脱落している。その他の関東地方でも千葉県の中間部と栃木と茨城の県境の2地点にrの脱落現象が確認できるだけである。

このrの脱落現象は山間部の片品村と六合村に認められた。特に片品村ではそれが顕著である。

(2) アクセント

日本語のアクセントは、大きくは京都や大阪などで行なわれている京阪式アクセントと東京などで行なわれている東京式アクセント、福島や栃木（但し、足利を除く。）で行なわれている全く型の区別を持たない無アクセントに分けられる。

県下の調査地の5地点とも、東京式アクセントである。但し、山間部の六合村と片品村には、また、その数は少ないが前橋にも、それぞれの型の所属する語例には、共通語と多少異なるものが見られる。特に、共通語で平板型や尾高下型に発音される語の中、それらの地点では頭高型に発音される傾向が認められる。

前にもすでに述べたように、邑楽地区のアクセントは、いわゆる曖昧アクセント、無アクセントが行なわれていると言われているが、邑楽地区に入りながらも、大泉町は東京式アクセントであった。館林市や板倉町の老年層には、曖昧アクセントや無アクセントが行なわれているが、若い層の人たちは次第に東京式アクセントになっていることが確認されている。[10]

(3) 文　法

(ア) 意志・勧誘表現と推量表現

古語の「べし」に由来すると言われているいわゆる「べいべい言葉」は、関東地方全域（但し、東京付近を除く。）や東北地方一帯（但し、山形県・秋田言県の一部を除く。）や、静岡県東部、山梨県東部、新潟県の東南端、伊豆諸島の一部など、東日本の広い範囲にわたって用いられており、古くから有名である。[11]

群馬県下の5地点でも、もちろん盛んに用いられているが、その用いられ方や形態に多少の相違が認められる（表II参照）。

表II

	意志・勧誘	推　　量
前橋市	ベー	ダンベー
下仁田町	ベー	ダンベー
大泉町	ベー	ベー、ダンベー
六合村	ベー	ベー、ダッベー、ダッベー
片品村	ベー	ベー、(ダッベー)、ダッベー

5地点とも、自分の意志を表わしたり、人を誘ったりする場合の表現、すなわち意志と勧誘表現には「ベー」が使用されている。

明日、東京へ行グベー。(意志)　一緒に映画を見に行グベー。(勧誘)

しかし、六合村・片品村・大泉町では、この「ベー」が推し量る表現、すなわち推量表現にも用いられるのに対して、前橋市と下仁田町では「ベー」は用いられず、「ダンベー」で表現している。

(推量)

きっとあの人も行グベー。(六合村・片品村・大泉町)

きっとあの人も行グダンベー。(前橋市・下仁田町)

但し、大泉町では「ベー」の他に「ダンベー」も併用している。また、六合村と片品村では「ベー」の他に「ダッベー」あるいは「ダッベー」を併用している。

関東地方では、前橋市のように、意志・勧誘表現には「ベー」、推量表現には「ダンベー」を用いて言い分けている地域が多く、群馬県のほとんどの地域や埼玉県・栃木県西南部、千葉県などがそうである。(12)

一方、東北地方一帯では意志・勧誘表現も推量表現も「ベー」で表わしている。

六合村・片品村・大泉町の実態はちょうど関東地方と東北地方の中間の姿を示している。

歴史的には、意志・勧誘と推量を区別せずに、すべて「ベー」の表現をする方が古く、前橋市や下仁田町のように意志・勧誘と推量を区別して表現するのは、共通語の「行こう」(意志・勧誘)と「行くだろう」(推量)の使い分けの影響によって生じたものであり、群馬県・埼玉県などを中心として広がる傾向にあると言われている。(13)

以上のことから、六合村・片品村・大泉町では、かつて「ベー」だけであったのが、群馬県の広い範囲にわたってなされている「ベー」と「ダンベー」の言い分けに影響されて、区別をする方向に動き出していると言えよう。

意志・勧誘・推量表現においては、県の周辺部に位置する地点村中心部の地点、すなわち六合村・片品村・大泉町／前橋市・下仁田町の対立を示した。

また、「ダンベー」、「ダッベー」、「ダッベー」の形態に注目すれば、山間部に位置する六合村・片品村が他の地域と対立している。

(イ) 過去表現

過去の表現は5地点ともに、「タ」の他に「タッタ」が認められた。「タ」と「タッタ」の相違については、単純な過去と回想の相違とも言われるが、明確ではない。

(ウ) 可能表現

可能表現は六合村1地点に能力の可能と状況の可能の区別があることが明らかとなった。

(エ) カ変・サ変動詞の上一段化

カ変動詞「来る」とサ変動詞「する」の活用が上一段動詞と同じ姿へ向っている、いわゆる上一段化傾向は、関東方言の特色の一つに数えられている。

県下でも上一段が認められるが、その程度には地域差が認められる。(14)

最も上一段化しているのは片品村で、サ変動詞「する」は終止形までもが、「シル〜シウ」と上一段化している。仮定形は片品村の他に六合村でも「シレバ」となっているが、他の3地点では仮定形も「スレバ」であり、上一段化は認められない。

カ変動詞「来る」は5地点ともに、その未然形に上一段化が見られる。すなわち「来ない」は「キネー」である。片品村ではやはり、上一段化が進んでいて、仮定形も「キレバ」となっている。しかし、片品村でも終止形までには及ばず、「クル」である。

(オ) 敬語の助動詞

関東方言は、一般に、敬語表現はほとんどないと言われているが、群馬県下も例にもれず、極めて少ない。後に述べる文末表現に、目上、目下に対する言い分けがあるが、いわゆる敬語の助動詞と言われるものは、六合村・片品村で用いられているシャル・サッシャル（ラッシャル）のみである。

共通語の「ください」に相当する語は各地で用いられている。六合村では「クダーレ」、片品村では「クイヤイ〜クダアイ」、下仁田町・前橋市では「クンナイ」、大泉町では共通語と同じ「クダサイ」あるいは「クンナ」の形をとっている。

(カ) 比況を表わす「ミタヨーダ」

六合村と片品村・下仁田町には共通語の「みたいだ」に相当する語形は「ミタヨーダ」である。前橋市・大泉町ではこれは用いられず、共通語と同じ「ミタイダ」あるいは「ミテーダ」を用いている。

(キ) 文末助詞

共通語の文末助詞「ね」に相当する語は、各地点では次のようである。(15)

	目　上	目下
六合村	ムシ～ムシェ	ナー
片品村	ムシ～ミシ	ナー
下仁田町	ノー	ナー
前橋市	ノー	ナー
大泉町	ネー	ナー

六合村・片品村の山間部には、かの有名な「ムシ」が保存されており、目上の人に対して盛んに用いられ、目下の人に対する「ナー」と区別して使われている。

下仁田町・前橋市では「ノー」と「ナー」の対立であり、大泉町は共通語と同じ「ネー」と「ナー」の対立となっている。

文末詞においても、やはり山間部の六合村・片品村に古い相が留められており、一方、大泉町には、一番早く共通語が入り込んでいる。

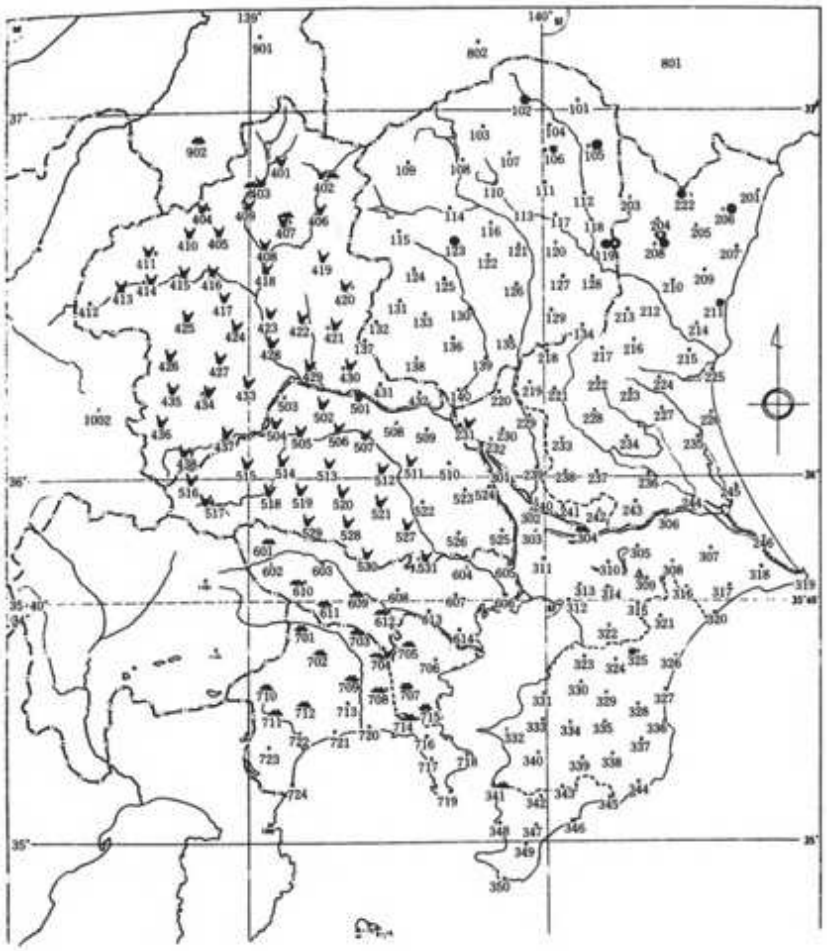
(4) 語　彙

語彙に関しては、各地点とも未だ十分な分析は行なわれていないので、今後に期し、ここでは大橋氏の関東方言の語彙から見た関東方言の分派表[16]を紹介し、また『関東地方域方言事象分布地図』より数葉の語彙の地図を拝借し、語彙の概説にかえたい。

- 関東方言語彙
  - 八丈・青ヶ島分派
    - 八丈島分派
    - 青ヶ島分派
  - その他の関東域分派
    - 東部分派
      - 北部分派
        - 栃木県分派
          - 北東部分派
          - 南西部分派
        - 茨城県分派
          - 北部分派
          - 南部分派
      - (中間部分派)
        - 下総分派
          - 東部分派
          - 西部分派
      - 南部分派
        - 上総分派
        - 安房分派
    - 西部分派
      - 北部分派
        - 群馬県分派
          - 北東部分派
          - 南西部分派
      - (中間部分派)
        - 埼玉県分派
          - 東部分派
          - 西部分派
      - 南部分派
        - 東京都分派
          - 東部分派
          - 西部分派
        - 神奈川県分派
          - 東部分派
          - 西部分派
        - 北伊豆諸島分派

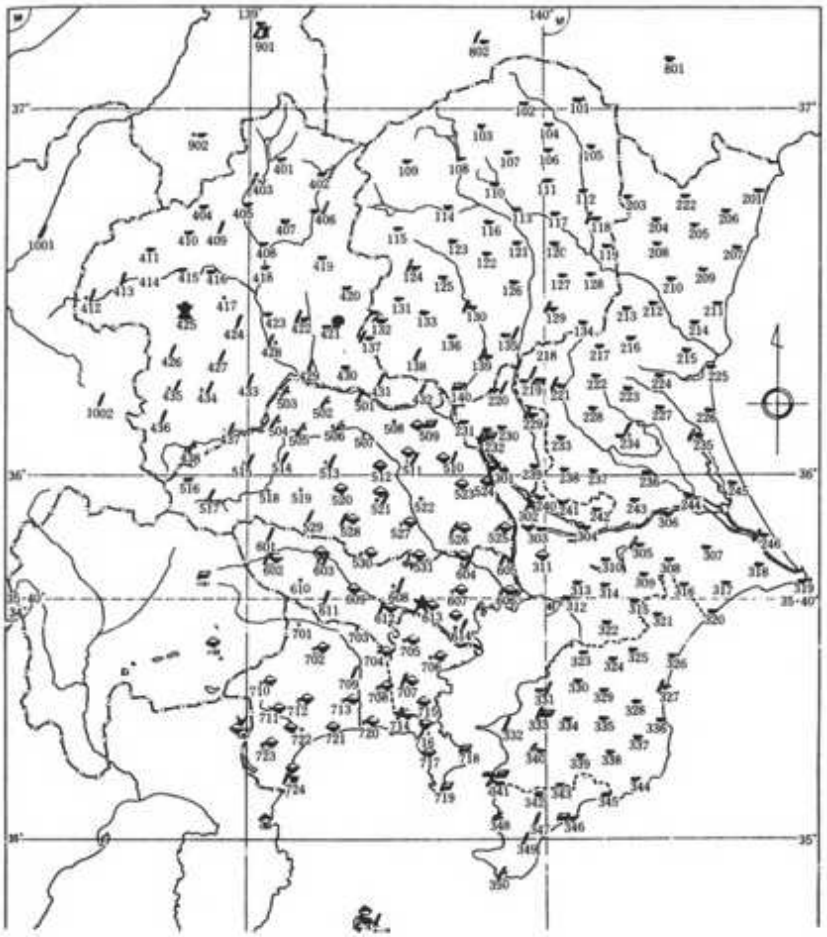
分派図　大橋勝男「関東方言の語彙」による。

Map 7　「奥」　大橋勝男『関東地方域方言事象分布図』第三巻（桜楓社）による。



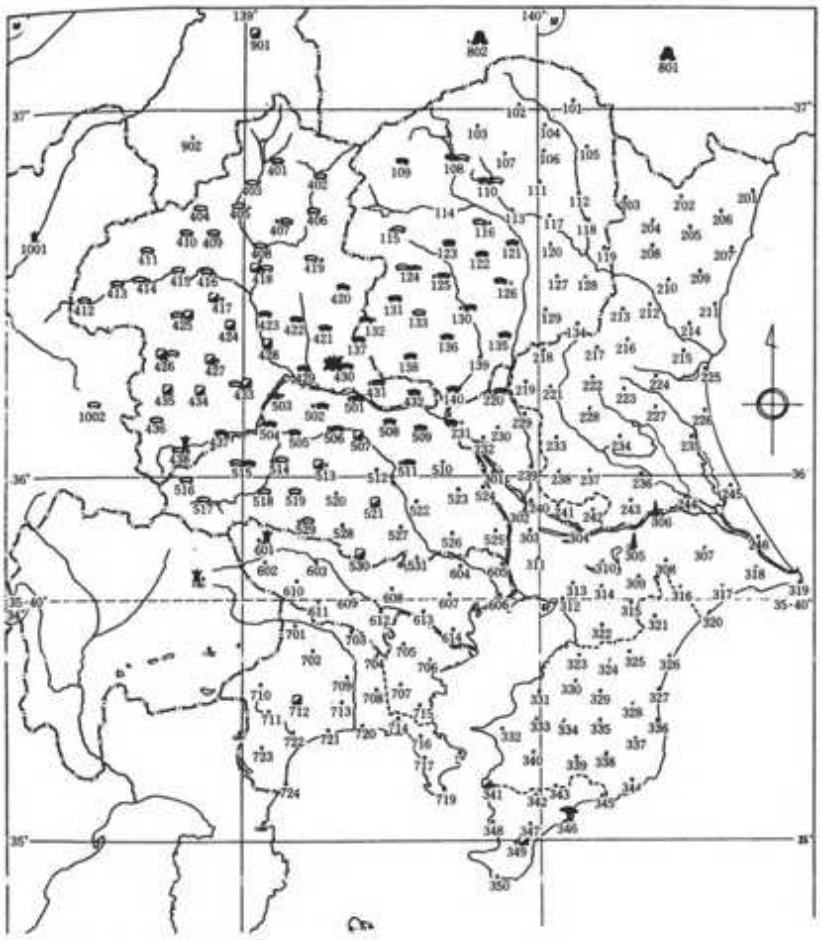
- OKU 〈OKUDE412〉
- OKUJI 〈OKUJII6-32, 6-33, 6-34, 6-36, 6-37〉
- OKURI 〈OKURII433(, 437〉
- GKI 〈OKII304〉
- IRI
- IRIKKO
- NAKA
- SAKI
- DOJI
- 上記以外の事象

Map 147 「コワイ〈疲れて体がたいぎい〉」



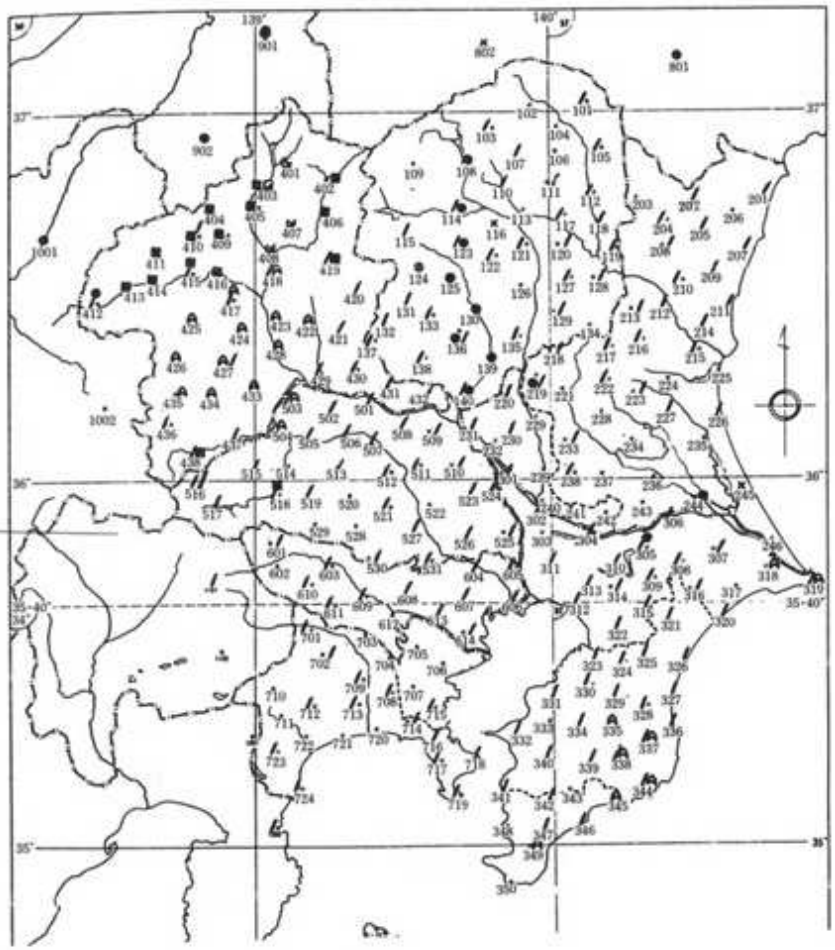
- TSUKARETA
- KUTABIRETA KUTABIETA[331] KUTABITTA[327] KUTABITCHA[238, 602] KUTABITA[322 4]
- KUTABURETA
- DARUI
- KANDARUI 〈KANDARUKYA(A)[6-]〉
- KATTARUI
- KEEDARUKYA(A) 〈KYAADARUKYA(A)[6-34, 6-35]〉
- KENTARUI
- KETTARUI
- KOWAI
- SETSUNAI
- KITSUI
- KUTCHII
- KUGENDA
- TAIGIDA

Map 78 「ものもらい」



- MONOMORAI　MONOMORAE112, 206, 218, 227
  MONOMURAI6-32
  MOROMORAI229, 330
  MORUMORE324
  MOMORAI327
  OMORAI431
  MONOMIDAI6-30
- KOJIKI 〈MEKKOJIKI6-30
- MEKAIGO 〈MIKAIGO431, 432, 502, 503, 506 L, 508, 511〉
- MEKAGO
- MEKAI
- MEPPARI
- MEPPA 〈MEPPATSU901〉
- MEPPANSHOO　MEPPAICHO6-24
  MIPPAICHOO6-23
- MENEKUMO
- NOMME　NUMME6-34 NUMMEE6-32
  NOME802
- YAMME
- MEBOSHI
- MEMBO

Map 12 「暑いねえ。」(「ねえ」相当の文末詞)



NE(E)

NEEN

NA(A)

NAI

NO(O)

NONSHI

MUSHI

MUSA

MU

MEE

「～ねえ」という構造をとらない言いかた

(5) まとめ

5地点の概説によって、群馬県方言の概説を行なったが、音韻・文法のいずれにおいても、山間部に位置する六合村と片品村には、平担部に位置する下仁田町・前橋市・大泉町とは異なった特色がいくつか見出された。

一般に邑楽地区だけが群馬県の他の地域と区画を異にされているが、大泉町に関しては前橋市・下仁田町と大差はなく、かえって山間部対平担部の対立が顕著であった。

各地の概説と5地点の調査に参加した私の印象を加えて5地点を区画すれば以下のようになろう。

六合村・片品村／下仁田町・前橋市・大泉町

今後、5地点の分析を深めるとともに、他の多くの地点の方言についても調査をし、群馬県方言の奥深い解明に努力したいと思う。

5　おわりに

昭和58年度から3年間にわたって実施された方言調査は、各地の自然談話の収録がその主たる目的であった。

ここで得られた各地30時間延150時間の録音は、きわめて貴重な資料である。調査員が話者の方々と同席し、録音器が回転しているという状況下では、全くの日常生活における自然談話と同じ、というわけにはいかぬかも知れないが、しかし、5地点とも良き話者に恵まれて、それにきわめて近い資料が得られたと確信している。このような長時間の自然談話が収録されたのは、県下でもこれが初めてではなかろうか。

私たち調査員は、この貴重な資料に胸をワクワクさせながら、音声・音韻・アクセント・文法・語彙の分野にわたって体系的に把握をすべく力を注いだ。音声・音韻・アクセントに関しては、かなり詳しくその特色を明らかにすることができたと思うが、文法と特に語彙に関しては、未だ十分なる体系的把握には至っていない。

150時間の中から、私たちは45時間分の録音の文字化と共通語訳を行なった。この仕事は正直に述べれば、大変な仕事であった。しかし、ヘッドホーンを耳にして、幾度も幾度もテープをまわしたお蔭で、各地の方言の姿はその輪郭を浮かび上がらせ、そしてその扉を開き、私たちに手を差し延べてくれているように感じる。今後、私たちはその扉をくぐり、その姿の内部に侵入し、その姿の中に秘められているその地に生活している人々の、あるいは生活した人々の心や、文化・歴史を解明していきたいと思う。

今、こうして文字化された資料を見ると、私たちの脳裏には、話者の方々の微笑をたたえたお顔が音響付きの映像となって、なつかしく映し出されてくる。

最後に、長時間にわたって快く話者となって下さった方々に、調査員を代表して、心より御

礼を申し上げ、今後ますますの御健勝をお祈りいたします。

また、話者となって下さった方で、残念ながら故人となられたお三方、山本栄氏（六合村）、星野冨氏（片品村）と金子虎吉氏（大泉町）の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

注

(1) 鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波新書、1973年）

(2) 前橋市方言については、中林妙子「加熱料理動作の意味構造の変遷―群馬県前橋市南部地域方言を中心に―」（『国語学』146号、1986年）参照。

(3) 飯豊毅一「関東方言の概説」（『講座方言学5関東地方の方言』国書刊行会、1984年）

(4) 杉村孝夫「群馬の方言」（『講座方言学5関東地方の方言』国書刊行会、1984年）

(5) 大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図』第一巻（桜楓社、1974年）

(6) 六合村入山引沼

(7) 注(3)に同じ。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 注(5)に同じ。

(10) 篠木れい子「群馬県館林市方言のアクセント(1) ―曖昧アクセントの研究―」（『群馬県立女子大学紀要』第四号、1984年）参照。

(11) 室町時代に、ロドリゲスがその著『日本大文典』（1604～1608年の間の刊と言われている。）の「関東または坂東」の特色として、この「ペイ」を指摘している。

(12) 群馬県下の「ぺい言葉」については、本間芳枝「「ペイ言葉」の研究」（『篠木ゼミレポート1』1983年）、阿部二美子・若林香世「群馬県沼田市方言及び栃木県鹿沼市方言「ぺー言葉」の比較研究」（『篠木ゼミレポート2』1984年）参照。

(13) 注(3)参照。千原直美「関東方言における「ペイ」の研究」（群馬県立女子大学国文学科卒業論文、昭和61年度）によれば、千葉県銚子市方言では、群馬県とは逆の方向へ向っているという。すなわち老年層では意志・勧誘と推量を区別して表現しているが、若年層では区別せず、すべて「ぺー」で表現している。

(14) 清水久美子「群馬県方言におけるカ変・サ変動詞の上一段化についての考察」（群馬県立女子大学国文学科卒業論文、昭和58年度）参照。

(15) 群馬県下の青年層の文末助詞については、神田潤子「群馬県方言における文末表現の研究―「ねえ」相当の文末表現」（『篠木ゼミレポート1』1983年）参照。

(16) 大橋勝男「関東方言の語彙」（『講座方言学5関東地方の方言』国書刊行会、1984年）

II 各地の方言

1　前橋の方言

調査地点　前橋市富田町

調査員　中林妙子
同補助　森村伊勢雄
話　者　有間とく　女（明治41年生）
大沢忠男　男（明治37年生）
境野茂世　女（明治34年生）
塩沢はる　女（大正3年生）
星野次男　男（明治36年生）
町田一雄　男（明治35年生）
森村伊勢雄　男（大正11年生）
森村民利　男（昭和26年生）
吉田たき　女（明治34年生）
松本久作　男（明治39年生）

前橋市富田町の概観

森　村　伊勢雄

1　は　じ　め　に

「荒砥」の名は現行行政地名としては存在しない。明治22年、郡区市町村編成法施行により、赤城山の一峰荒山の南腹に源を発する荒砥川の下流域11か村が合併して荒砥村が成立した。

本調査の調査地点となった富田町はこの時荒砥村の一大字となった。その後昭和32年１月、隣村の木瀬村の一部を合併して城南村となり、昭和42年５月には城南村が前橋市に合併となりここに前橋市富田町が成立した。

本稿では、前橋市全体のあらましについて述べ、次いで話者の方々の生活の舞台であり、子供の頃から馴れ親んできた荒砥地区（旧荒砥村）に限定して概観してみたい。

2　前橋市の概観

県都前橋市は、古くは厩橋と称した。上野国国府の所在地として奈良平安の昔から政治経済文化の中心地であり、官道「東山道」の「群馬駅家（くるまのうまや）」も国府近くにあったという。厩橋の名は、この駅家の近くを流れる車川に架かる橋「うまや一の橋」に因むものと云う。

中世には、長尾氏の築いた厩橋城が、戦国の雄甲州武田・越後上杉・相州北条の三氏による攻防の焦点となった。

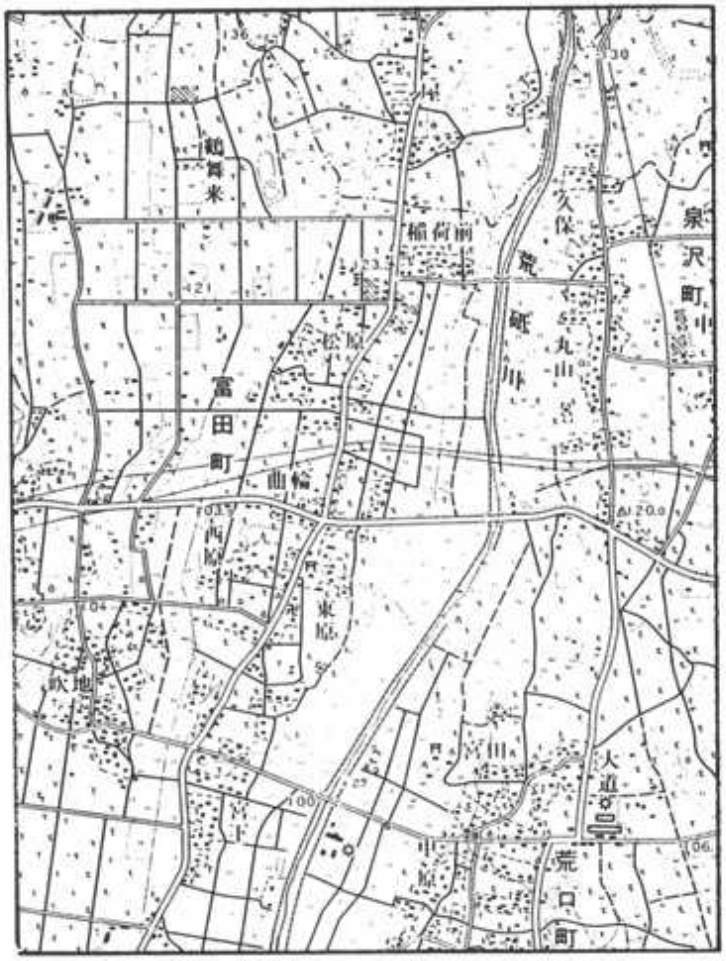
江戸時代になると、平岩氏・酒井氏・松平氏ら親藩・譜代の幕閣級の大名が封ぜられ、10万～15万石の城下町として整備された。幕末、開港後は、輸出用生糸の集散地・糸のまちとして大発展をとげた。維新後は県庁所在地となり、明治25年には市制が施かれ、昭和29年には周辺８か町村を合併、次いで30年に１村、42年には調査地点を含む城南村を合併して現在の市域となった。

昭和61年６月現在の面積は147.39㎢、人口278,915人（男136,398人、女142,517人）、世帯数87,686世帯となっている。

3　荒砥地区の概観

(1)　位置、地形

荒砥地区（以下「旧荒砥村」と呼ぶ）は、前橋市の東南部に位置し、面積は約25㎢。北は大



胡町、東は粕川村・赤堀町、南は伊勢崎市・旧木瀬村、西は旧桂萱村に接している。地形は、赤城山南裾部に位置している関係で北から南へなだらかに傾斜しており、最北部の泉沢で海抜125mほど、最南部の新井で75mほど、調査地点の富田の中央部で110mほどであり、全体的に平坦といえる。なお、東部の下大屋、西大室、東大室はなだらかな丘陵地帯で、小流により開析された谷地が複雑に入り組んでいる。

富田地区風景

気候は、夏は蒸暑く、冬は有名な「からっ風」の本場で乾燥寒冷である。特に夏季の水不足

は、古来悩みの種で、村内各地に溜池が点在する。

河川としては、村内中央部西寄りを南北に貫流する荒砥川があり他に神沢川などの小流が南流している。

(2) 人口、集落等

旧荒砥村は、明治22年に江戸時代以来の11か村が合併した村であり、これらの旧村が大字となり、昭和42年前橋市へ合併となり町となった。即ち、泉沢町、下大屋町、西大室町、東大室町、二之宮町、飯土井町、新井町、荒子町、荒口町、今井町及び富田町である。これら11町（旧11大字）は、江戸時代以来の農村として集落を形成しており、家屋は本地区特有の「赤城型民家」と呼ばれる大型萱葺民家であった。

人口は表1のとおりであり、微増の傾向は見られるものの、農村地区の例に漏れず、高齢化が進行している。

表1
前橋市荒砥地区（旧荒砥村）人口動態

年　代	人　口	世帯数
	人	世帯
明治22（1889）	5,814	—
大正9（1920）	8,176	1,354
14（1925）	8,434	1,383
昭和5（1930）	8,819	1,403
10（1935）	9,118	1,447
15（1940）	9,413	1,439
20（1945）	11,340	1,792
25（1950）	11,362	1,782
30（1955）	11,350	1,785
35（1960）	15,905	2,755
40（1965）	15,163	2,886
45（1970）	15,127	3,131
50（1975）	15,526	3,453
55（1980）	16,451	3,795
60（1985）	11,435	2,718

（昭和35～55年の数値は城南村全体の数である）。

表2　富田の人口動態

年　代	人　口	戸　数
	人	戸
明治22（1889）	674	—
昭和12（1837）	1,059	167
35（1960）	1,439	217
40（1965）	1,264	235
50（1975）	1,347	283
60（1985）	1,477	340

(3) 沿　革

天正18年（1590）に小田原北条氏が滅亡すると徳川家康が関八州を支配することになる。旧荒砥村は当初大胡城主牧野氏の支配をうけ、開幕後はほぼ前橋藩の領域となる。富田村（現富田町）は、江戸時代を通じて前橋藩領であり、明治維新後は、岩鼻県、群馬県、熊谷県、群馬県に属した。明治22年に上記11村が合併して荒砥村が成立。昭和32年1月に

富田町赤城型民家

隣接する木瀬村のうち５大字を合併して城南村が成立し、荒砥村の呼称が消滅した。昭和42年５月には城南村全村が前橋市へ合併となり各大字は前橋市の町名となった。現在便宜的に旧村名で市内各地区を呼称しており、本地区は「城南地区」あるいは「荒砥地区」という。

(4) 産　業

旧荒砥村は、米麦・養蚕を中心とした純農村地帯であり、戦前の農業人口は85％に達していた。

昭和９年の土地利用状況をみると、水田498町歩、畑749町歩、林野650町歩、宅地113町歩、沼地24町歩、社寺境内地15町歩、公共敷地その他190町歩で、田畑の割合は56％にも達する。30％を占める林野も大正中期から継続された開墾により耕地化され、更に昭和20年に大正用水が完成して畑地の水田化が進められると共に、農地改革の断行後は未開墾地の耕地化が進行し、村内の開墾可能地はほとんど耕地その他に利用されている。

主要農産物は、米、大・小麦、甘藷、里芋等であったが、最近は米麦中心からビニールハウスによるキュウリ、トマト等の野菜栽培、菊・バラ等の花き栽培等近郊農業的色彩が強まっている。

本地区は養蚕県群馬の中核ともいえる所である。大正期には、生糸が我が国輸出品の花型になったこともあり、加えて荒子の飯島喜平治、富田の吉田包輔、二之宮の内田源十郎ら各氏の功績もあって、収繭量は急速に伸びた。また、蚕種製造業も村内から多数輩出しており、本県養蚕業発展に寄与している。しかし、繭・生糸の相場は大きく変動するものであり、特に化学繊維の発達等により、昭和30年頃の盛期を最後に現在は衰退に向っている。

なお、昭和初期に富田の茄子はその良質美味で知られ、隣村の江木の牛蒡と並び称されたものであった。

伊勢崎銘仙は、本県を代表する織物であるが、本村の農家にはほとんど「はた織機」が置かれ、農家の女衆の仕事として伊勢崎銘仙の賃機が行なわれていた。「娘３人いれば大尽になる」とまで言われたものである。最盛期は大正から昭和初期の頃で、機織戸数は大正５年685戸（同織工数861人）昭和10年315戸（同331人）であった。しかし、機械織の発達により次第にその数を減じ、現在ではほとんどその姿を見ない。

かつては、水車を利用した精米業も盛んで、荒砥川、神沢川、桂川、千貫用水などの川筋には合計20基の水車が回っていた。昭和に入り、電力が導入されるとこれらの水車は相次いで姿を消してしまい、現在は皆無の状態である。

旧荒砥村は純農村であり、商店は呉服、荒物、酒、菓子等をとりそろえた「万屋」がほとんどで、専門店はほとんどなかった。現在は、スーパーなども増えており、村内の流通機構に変化がみられる。そんな中で昔の家業をしのばせる「屋号」を残す家がいくつかみられる。例えば「菓子屋」、「古着屋」、「餅屋」、「甘酒屋」、「飴屋」などである。また「秤指（はかりさし）」と呼ばれた糸

繭商の存在は、養蚕地帯の面目躍如たるものがあろう。

(5) 交　通

古代の官道「東山道」が本村南部を東西に通じていたらしく、後に「あづま道」と呼ばれた道筋がこれに当るとされる。源義経が奥州へ落ちのびる時に通った道との伝承がある。

江戸時代には、下大屋に鎮座する産泰神社が藩主酒井氏の崇敬を集め、前橋城からほぼ直線的に同社への参道が建設・整備され、「産泰道」とよばれた。同様に二之宮鎮座の二之宮赤城神社や宮城村三夜沢鎮座の三夜沢赤城神社への参詣の道も整備され、一般庶民の利用に供せられた。

なお、近代の道としては、本村南部を東西に通ずる国道50号線のほか県道大胡・玉村線、県道前橋・国定線、伊勢崎・大胡線、などがあり、前記の古道（ほとんど改修されている）と合せて、本村地内を縦横に通じている。交通機関としては、鉄道はないものの、バス路線があり、市街地や伊勢崎・大胡方面への輸送の便に供せられているが、近年のマイカーの普及により、路線バスの本数もめっきり減ってしまった。

(6) 教　育

荒砥川畔より赤城山遠望

江戸時代末から明治初期にかけて、村内の寺院や名主の家などで「寺小屋」教育が行なわれ、読み・書き・算盤が教授された。富田でも、「老僧」と通称された正法院の住職観月光泰が寺小屋を開いたと伝えられる。

明治５年に学制が頒布されると、翌６年には荒口の観音寺に荒口小学校が開校。７年には二之宮小学校、８年には大室学校が相次いで開校した。明治12年になると登美田（富田）小学校も開かれ、富田、堤、東上野の４か村の子弟が通学することとなる。その後、村内の各小学校は統廃合や校名変更を重ねるが、太平洋戦争後は旧小学校及び青年学校は新制の小学校及び中学校へと生まれ変り現在に至っている。現在は、小学校３（荒子小、二之宮小、大室小）と中学校１（荒砥中）がある。

(7) 文化財等

旧荒砥村は古墳密集地帯である。昭和10年の調査では365基の古墳が報告されており、現在も国史跡の前二子、中二子、後二子及び附古墳（荒砥三古墳と称される100m前後の大前方後円墳）

をはじめ多くの古墳が遺存している。また、古代末から中世にかけて用水路として造られたと思われる国指定史跡「女堀」跡も富田町から東方へ点々と残っている。

また、二之宮赤城神社の納曽利面(県重文)、二之宮慈照院の千手観音像、二之宮無量寿寺の十一面観音像（いずれも市重文）などの彫刻、二宮神社梵鐘及び絵馬、同社の石造宝塔（いずれも市重文）などの指定文化財の他に、産泰神社の社殿などの建造物や中世の板碑などの石造文化財等のすぐれた文化財も多い。更に、産泰神社の太々神楽、二之宮赤城神社の里神楽、泉沢の神楽獅子、飯土井・二之宮・泉沢に伝わる地芝居、富田の三柱神社の祭礼の時に奉納される祇園囃子など多彩な民俗芸能も伝承されている。

近年の発掘調査により、古墳時代の豪族の館跡のような遺構が検出されたり、中世の城館跡が見つかったりもしている。

前橋市富田町の方言

中　林　妙　子

1　は　じ　め　に

調査地点を含む前橋市の方言は、音韻・アクセント・文法・語彙のどの面においても、東京方言と大差ない方言である。前橋市方言に観察される特色は、群馬県の広域に渡ってみられるものであり、この地域独特の特色はないようである。更に、近年の方言研究によって、群馬県内でも前橋市は高崎市と並んで共通語化の進んでいる地域であることが指摘されている。そのような前橋市の中にあって、調査地点の富田町は、前橋市の方言の古い形を比較的よく残している地域である。

以下、共通語との相違点を中心に、富田町方言について、具体的に述べていく。

2　音　声・音　韻

音声・音韻の特色を、共通語との比較から、主なものいくつかを挙げると、次のようなものがある。

ⓘ　母音の交替が「イとエ」、「ウとオ」などを初め、しばしば観察される。

ⓘⓘ　連母音の融合長音化が著しい。特に、連母音アイ・アエは音環境・品詞・語種等にほとんど関らず、日常使われている語であれば、ほぼ全てが融合しうる。連母音の融合長音化により、富田町方言では共通語にはない「ウェ /we/ 」と「チェ /cje/ 」の拍が認められる。

ⓘⓘⓘ　共通語のガ行子音は、語中語尾では鼻濁音の［ŋ］であるが、富田町方言では県内の他地域同様、語頭と同じ破擦音の［g］或は摩擦音の［ɣ］であり、［ŋ］は聞かれない。

ⓘⓥ　ナ行音・ラ行音を中心に、撥音化がしばしばおこる。また、それ以外でも、破裂音の前に促音・撥音が添加されることが少なくない。

ⓥ　日常会話では、長音は音環境・品詞・語種等に関わらず、しばしば単音化する。

（→拍体系表）

表1　拍体系表

イ	エ	ア	オ	ウ	ヤ	ヨ	ユ	ワ	ウェ
/i/	/e/	/a/	/o/	/u/	/ja/	/jo/	/ju/	/wa/	/we/
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フ	ヒャ	ヒョ	ヒュ		
/hi/	/he/	/ha/	/ho/	/hu/	/hja/	/hjo/	/hju/		
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ	ギャ	ギョ	ギュ		
/gi/	/ge/	/ga/	/go/	/gu/	/gja/	/gju/	/gjo/		
キ	ケ	カ	コ	ク	キャ	キョ	キュ		
/ki/	/ke/	/ka/	/ko/	/ku/	/kja/	/kjo/	/kju/		
ジ	ゼ	ザ	ゾ	ズ	ジャ	ジョ	ジュ		
/zi/	/ze/	/za/	/zo/	/zu/	/zja/	/zjo/	/zju/		
チ		ツァ	(ツォ)	ツ	チャ	チョ	チュ		チェ
/ci/		/ca/	(/co/)	/cu/	/cja/	/cjo/	/cju/		/cje/
シ	セ	サ	ソ	ス	シャ	ショ	シュ		
/si/	/se/	/sa/	/so/	/su/	/sja/	/sjo/	/sju/		
	デ	ダ	ド						
	/de/	/da/	/do/						
	テ	タ	ト						
	/te/	/ta/	/to/						
ニ	ネ	ナ	ノ	ヌ	ニャ	ニョ	ニュ		
/ni/	/ne/	/na/	/no/	/nu/	/nja/	/njo/	/nju/		
リ	レ	ラ	ロ	ル	リャ	リョ	リュ		
/ri/	/re/	/ra/	/ro/	/ru/	/rja/	/rjo/	/rju/		
ミ	メ	マ	モ	ム	ミャ	ミョ	ミュ		
/mi/	/me/	/ma/	/mo/	/mu/	/mja/	/mjo/	/mju/		
ビ	ベ	バ	ボ	ブ	ビャ	ビョ	ビュ		
/bi/	/be/	/ba/	/bo/	/bu/	/bja/	/bjo/	/bju/		
ピ	ペ	パ	ポ	プ	ピャ	ピョ	ピュ		
/pi/	/pe/	/pa/	/po/	/pu/	/pja/	/pjo/	/pju/		
ン			ッ			ー			
/N/			/Q/			/R/			

2-1　母　音

母音は、共通語と同じくイ /i/ ・エ /e/ ・ア /a/ ・オ /o/ ・ウ /u/ の5母音である。その音声も、共通語とほぼ同じであるが、単独のイは共通語よりやや広い［ɪ］に、単独のエは共通語よりやや狭い［ɪ］に近い音として聞かれることがある。また、狭母音イ・ウは、無声子音に挟まれる場合と、無声子音に下接して語末にくる場合に無声化する。

以下、母音に関する特色（主に、母音の交替）について、個別に述べていく。

① エ→イ

エはイになりやすい。特に、単独で語中語尾にあるエで、ア・ウ・オの母音に続く場合は、ほとんどのものがイになりうる。例えば、ナマイ（名前）・カイル（帰る）、ウイ（上）・フイル（増える）、キコイル（聞える）・オイル（終える）など（→連母音の項）。また、単独で語頭にあるエも、イライ（偉い）のように、語彙的にイとなるものもある。子音と結合したエでは、メシタ（見せた）など、セ→シとなる場合に交替がみられる。

② イ→エ

イがエになることがある。単独のイではエバル（威張る）・エボ（いぼ）・エカキ（いかき＝籠の一種）・エンゲン（隠元）・エンキョ（隠居）など語頭にあり、後に /b/ ・ /N/ 音が続く場合に交替しやすい。また、子音と結合したイでは、メセル（見せる）・メメズ（蚯蚓）・メッカル（見つかる）、ヘゲ（髭）・ヘガシ（東）など、ミ→メ・ヒ→ヘとなる場合に交替しやすい。その他、ゼネ（銭）のような例もみられる。

③ イ→ユ

単独のイは、ワ行音の前でユとなることが、稀にある。例えば、オユワイ・オユウェー（お祝い）・ユワオ（岩男＝人名）など。

④ エ→オ

語彙的であるが、ヨモゴ（嫁御）のように、エがオとなることが、稀にある。

⑤ ア→エ

語彙的であるが、ヘガス（剝がす）のように、アがエとなることが、稀にある。

⑥ オ→ウ

オは、単独でも、子音と結合する場合でもウとなることがある。例えば、ウブー（負ぶう）・ムス（燃す）・フント（本当）・アスブ（遊ぶ）・アスコ（あそこ）・フルシキ（風呂敷）・セーフル（据え風呂）など。

⑦ ウ→イ

語彙的であるが、ウは語頭でイとなることが稀にある。例えば、イゴク（動）・シコシ（少し）など。

⑧ ウ→オ

ウは、後ろにオ段の音が続く場合、オとなることがある。例えば、モコ（婿）・モコー（向う）・オーモロ（大室＝地名）など。

2-2　連母音

連母音は、極めて、融合・長音化しやすい。

① アイ→エー

連母音アイは、日常使用される語であれば、音環境・品詞・語種等に関りなく、ほとんどの場合、融合長音化し得る。特に、形容詞と付属語「たい・ない」などはきわめて融合長音化しやすい。融合長音化したエーの音は、エの音をのばした音と、音声的に違いはない。例えば、ワリエー（割合）・ヘー（灰）・ニゲー（苦い）・ケーコ（蚕）・チッチェー（小さい）・ウルセー（うるさい）・デーコン（大根）・テーコ（太鼓）・ネー（無い）・アレー（粗い）・アメー（甘い）・ベー（倍）・スッペー（酢っぱい）・ハエー（早い）・ヨウェー（弱い、ヨエーとも）など。例に示したように、ヤイは融合長音化する場合、イェーとはならず、エーとなる。また、ワイも、ぞんざいな発話ではウェーでなくエーと発音されることもある。また、ハイの音節は原則としてヘーとなるが、「這入る」に限って、ヘールともヒャールとも言う。

次節2－3①で述べるように、「ユ→イ」の変化がおこるため、「繭・粥」などの語では、一般の連母音アイ同様、メー（繭）・オケー（お粥）となる。

なお、五段動詞でイ音便となるものでは、「掃く、書く、咲く、泣く、巻く」など、連用形に連母音アイが現われるが、この場合には融合長音化しにくい。また、外来語でも連母音アイは融合しにくい。

② アエ→アイ・エー

連母音アエは、アイさらにエーとなる。連母音アイ程ではないが、融合長音化しやすい。例えば、ハイ・ヘー（蠅），カンガイル・カンゲール（考える），カイル・ケール（帰る），サイ・セー（さえ＝助詞），ナイ・ネー（苗），マイ・メー（前）など。

③ ウイ→イー（エー）

主に、3拍以上の形容詞で、連母音ウイは融合長音化してイーとなる。例えば、ヒキー（低い）・マジー（まずい）・アチー（熱い・暑い）・サミー（寒い）・フリー（古い）など。なお、アツイ（厚い）・ウスイ（薄い）などは、融合しない。

形容詞以外では、「結・結納」などの語の連母音ウイが融合長音化するが、その場合、エー（結）・エーノー（結納、イーノーとも）のように、ウイ→イーより、ウイ→エーとなりやすい。

④ オイ→エー

主に、3拍以上の形容詞で、連母音オイは融合長音化してエーとなる。例えば、スゲー（すごい）・ホセー（細い）・フテー（太い）・オモシレー（面白い）・～ペー（～ぽい）など。但し、「強い」はツエーともツイーとも言う。なお、アオイ（青い）・トーイ（遠い、トーイーとも）など、3連母音になる場合は融合しない。

⑤ アウ→アー

ワ・ア行の五段活用動詞で、連母音アウはアーとなる。例えば、ハー（這う）・カー（買う）・ハラー（払う）・カマー（構う）など。

⑥　イエ→エー

主に、3拍以上のヤ行下一段活用動詞で、連母音イエはエーとなる。例えば、ケール（消える）・オセール（教える）・ネール（煮える）・メール（見える）など。但し、「冷える」はヒーールとなる。同様に、「稗」はヒーとなる。

⑦　オエ→オイ・エー

4拍以上の下一段活用動詞で、連母音オエはオイ更にエーとなる。例えば、キコイル・キケーール（聞える）、オボイル・オベール（覚える）など。これ以外の場合、連母音オエは融合長音化せず、一般にオイとなる。例えば、コイ（声）・コイル（越える）・モイル（燃える）など。（2－1、①）

上述の他、連母音エイ・オウは東京方言同様、それぞれ、エー・オーと発音されるのが普通である。

2-3　半母音

①　ユ→イ

語彙的であるが、ユはイになりやすい。例えば、イビ（指）・イノクチ（湯ノ口＝地名）、オツイ（おつゆ）・タイ（田湯）・マイ（繭）・イワイル（所謂）など。（→連母音の項）

②　/w/ の脱落

/w/ の音（ワ /wa/ の /w/ ）は、脱落して、母音単独の拍となりやすい。特に、母音のアに挟まれる /w/ は、ほとんど例外なく脱落する。例えば、カーラ（川原・瓦）・ターラ（俵）・マータ（真綿）など。また、母音ウ・オに下接するワも、 /w/ が脱落する傾向がある。例えば、クア（桑）・スアル（座る）・コアス（壊す）など。

③　ワ→ヤ

母音イに下接するワは、ヤとなることがある。例えば、ビヤ（枇杷）・ニヤ（庭）など。

2-4　子　音

子音の音声は、2㈢で触れた、ガ行子音の〔ɣ〕を除けば、大旨、共通語と同様である。

①　カ行子音の濁音化

語彙的であるが、カ行子音は濁音（有声音）となることがある。例えば、イグ（行く）、シャガン（左官）、ガイロ・ゲーロ（蛙）など。

②　サ行子音

語彙的であるが、サ行子音は拗音化することがある。例えば、シャジ（匙）、シャガン（左官）、コシャエル・コシェール（拵える）など。また、サ・シ・スの音は、促音の後で、ツァ・チ・ツとなることがある。例えば、オッツァレル（←オッサレル、叱られる）・マーッツァカ（←マ

サカ、とても、大変、実にの意)・マッチロ（真っ白)・マッツグ（真っ直）など。

③　ザ行子音

ザ行子音の音声は、語頭では破擦音の［dz、dʒ］であるが、語中語尾では摩擦音の［z、ʒ］になりやすい。

語彙的であるが、ザ行子音は拗音化することがある。例えば、ジャクロ（ざくろ)・ジョーリ（草履）など。

④　ダ行子音

語彙的であるが、ダ行子音はエ段のデに限って、ザ行子音になることがある。例えば、クマゼ（熊手)・ムカゼ（百足)・ナゼル（撫でる）など。

⑤　マ行子音

語彙的であるが、マ行子音はバ行子音になることがある。例えば、ケブ（煙)・イネブリ（居眠り)・ヒボ（紐)・テボリ（手盛り）など。

⑥　シとヒの交替

一般に、シとヒの区別は明確である。東京方言ほど盛んではないが、シとヒは交替することがある。

シは、主に、後に /c/ 音が続く場合、ヒとなることがある。例えば、ヒチ（質)・ヒチガツ（七月)・キョーヒツ（教室）など。

また、ヒは、主に、後に /k/ ・ /c/ ・ /t/ 音が続く場合、シとなりやすい。例えば、モモシキ（股引)・シキワカレ（引き分れ)，シツヨー（必要)，シト（人)，シグモリ（日曇り）など。

2-5　特殊拍・その他

①　ラ行音

ラ行音は /n/ ・ /b/ 音の前にある場合、撥音化しやすい。特に、ラ行四段活用動詞・一段活用動詞・サ行変格活用動詞・カ行変格活用動動詞と「こそあどことば」はきわめて撥音化しやすい。例えば、トンネー（取らない)・ヤンナ（やりなさい)・ミンナ（見るな)・スンナ（為るな)・クンナ（来るな)・アンノ（あるの)・アンベー（あるだろう)、トリキンネンダン（取りきれないのだ)、ソンナラ（それなら)、〜ダカンノー（〜だからねえ)、オンノ（俺の）など。

また、 /d/ 音の前にある場合、撥音化或は /r/ 音が脱落することがある。「こそあどことば」などで起こりやすい。例えば、ソンデ・ソエデ・ソイデ（それで)、アンダケ・アイダケ（あれだけ)、クンダイ（来るのだよ)、アンダ（あるのだ）など。

上記以外に、アイガ（あれが)・サカナトイガ（魚取りが）などのように、格助詞「が」が続く場合や、インル（入れる)・クンル（呉れる）などのように、ラ行音が続く場合にも、/r/ 音の脱落・撥音化することがある。

② ナ行音

助詞「の」及び「もの（物・者）」の「ノ」の音は撥音化しやすい。例えば、コドモントキ（子供の時）・アルン（あるの）・ナカッタンカイ（無かったのかい）・カマーンダ（構うのだ）、～ダモン（～だもの）・キモン（着物）など。また、助詞「に」は、後に /n/ 音が続く場合、撥音化する。例えば、ハダカン　ナッテ（裸になって）・キズン　ナル（傷になる）など。上記以外に、マインチ（毎日）のようなものもある。

③ シュ・ジュの直音化

シュ・ジュは直音化してシ・ジになりやすい。特に、高年齢層では、直音化するのが一般的である。例えば、シロ（棕櫚）・シッパツ（出発）・カシ（歌手）・オトコシ（男衆）・ゴシーギ（御祝儀）、シジツ（手術）、ジバン（襦袢）・ジン（順）・シジー（始終）・ヒョージン（標準）など。なお、シュー・ジューと長音になる場合は直音化しない。

④ 語頭の /N/

語頭のウは、後に /m/ ・ /N/ が続く場合、撥音化し、語頭に /N/ がたつことがある。例えば、ンメ（梅）・ンマ（馬）、ンメー（うまい）・ンート（うんと）など。

⑤ 促音・撥音の添加

促音は、主に、 /h/ ・ /k/ ・ /c/ ・ /t/ の前に添加される。なお、 /h/ 音の前に添加される場合は、 /h/ は /p/ となる。例えば、ヤッパリ（やはり）・ヨッポド（余程）、イシッコロ（石ころ）・コマッケー（細かい）・ソレッキリ（それきり）・モトッカラ（元から）、ハネッツルベ（跳釣瓶）・ヒトッツモ（ひとつも）、トッテモ（とても）・アツクッテ（暑くて）・マーッタク（全く）など。

撥音は、主に、 /n/ ・ /m/ ・ /b/ 音の前に添加される。例えば、オンナシ（同じ）、アンマリ（あまり）・マンマ（儘）、タンビ（度）・チットンベー（少しばかり）・ゴンボ（牛蒡）、ニンド（二度）など。

⑥ 長音化

一般に、長音の単音化が著しいが、語彙的には、長音化もみられる。例えば、マーリ（毬）・ザール（笊）・セー（背）・フターリ（二人）・カーリー（軽い）など。

⑦ 連声音

助詞「を・は」が撥音に続く場合、連声により「ノ・ナ」となる。例えば、シャシンノ　トル（写真を撮る）、キモンノ　キル（着物を着る）、ミホンナ　ネー（見本は無い）など。

3　アクセント

前橋市方言のアクセントは、東京式アクセントであり、富田町方言も同様である。3拍名詞の5類（朝日・命・涙・火箸・枕など）の多くが中高型（○●○）である点など、東京方言の

アクセントと比べて、ややその古い形をとどめている。(→アクセント体系表)

表2　アクセント体系表

拍数	音韻論的解釈	反省的型	所　属　語　例
1	/○/	○▶	柄、血、実〈1類〉、名、葉、日〈2類〉、胃、気…
	/○˥/	●▷	帆〈1類〉、矢〈2類〉、火、木、根([nekkō]とも)、菜、絵、歯、手…〈3類〉
2	/○○/	○●、○●▶	飴、あれ、枝、風、口、鈴、鳥、庭、膝、水…〈1類〉、梨、北〈2類〉、虹… 行ぐ([ɪɣɯ])、嗅く([kakɯ̄])、貸す、咲く、突く、飛ぶ、乗る、振る…〈1類A〉、漕ぐ〈2類A〉、居る、着る、寝る、為る…〈1類B〉
		●●、●●▶	灰([he:])、塀([he:])、蠅([he:]) 買う([ka:]、[kaɯ]とも)〈1類A〉
	/○○˥/	○●、○●▷	石、紙、川、下(した)、橋、肘…〈2類〉、足、家(いえ)、犬、腕、鍵、雲、山…〈3類〉、露〈5類〉
		●●、●●▷	台([de:])、繭([me:]、[mai]、[majɯ]とも)
	/○˥○/	●○、●○▷	息、糸、海、肩、空、種、箸、麦…〈4類〉、雨、秋、蜘蛛、猿、春、蚋、夜…〈5類〉、鯛、乳、癌… 飼う、書く、取る、飲む、降る、蒔く、読む…〈2類A〉、着く、〈A〉、出る、見る、来る〈2類B〉 良い([i:])、無い([ne:])
3	/○○○/	○●●、○●●▶	机、額…〈1類〉、間([aisa]とも)、桜〈2類〉、畑〈4類〉、兎、雀、背中、鼠…〈6類〉、薬〈7類〉、卵、みかん、おでん、二十歳、遊ぶ([asɯbɯ])、当たる、捜す、握る、運ぶ…〈1類A〉、違う([tʃiɣa:])、〈2類A〉、歩く〈3類A〉、枯れる、捨てる、腫れる…〈1類B〉 赤い([ake:])、厚い、薄い、浅い([ase:])…〈1類〉
		●●●、●●●▶	氷、財布([se:ɾɯ])、　舅、大事([de:dʒi]) 這入る([ça:ɾɯ]、[he:ɾɯ])〈3類A〉、消える([ke:ɾɯ])〈1類B〉、遠い、
		○○●、○○●▶	コップ、燃木([mɯɲ̍iki][moʃ̍iki])、りんご、昨夕([jɯmbe])
	/○○○˥/	○●●、○●●▷	小豆、毛抜、とかげ〈2類〉、力〈3類〉、頭、刀、林、東〈4類〉、椿〈7類〉、唾([tsɯbaki])
		●●●、●●●▷	扇〈4類〉、表紙、麓
		○○●、○○●▷	女〈4類〉、はんこ
	/○○˥○/	○●○、○●○▷	小麦〈3類〉、五つ、紅葉〈4類〉、朝日、命、心、涙、一つ、火箸、火鉢、柱、枕、眼〈5類〉、きな粉、所帯、花火、わさび、ぶどう… 動く([iɣ̍okɯ])、起こす、落とす、乾く、縛る、頼む、照らす…〈2類A〉、隠す、参る〈3類A〉、起きる、付ける、交ぜる、逃げる、晴れる…〈2類B〉、熱い([at̍ʃi:])、白い([ʃ̍ire:])、高い([take:])、強い([tsɯe:]、[tsɯi:])、深い([ɾɯke:])…〈2類〉

		●●○、 ●●○▷	瓦（[ka:ra]、[kawara]とも）〈4類〉 帰る（[ke:ru]、[kairu]とも）〈2類A〉
	/○˥○○/	●○○、 ●○○▷	欠〈1類〉、緑、えくぼ〈2類〉、鮑（[aobi]、[awabi]）〈3類〉、嵐〈4類〉、姿〈5類〉、鳥〈6類〉、苺、蚕（[kaiko]、[ke:ko]、[ke:ko]とも）〈7類〉、通る（[to:ru]、[to:ru]とも）〈2類A〉

動詞活用形のアクセント

	音韻論的解釈	活用形のアクセント
四段活用・2拍	/○○/	(止) ○○ (未) ○○ナイ (用) ○○タイ ○○タ(ダ)
	/○˥○/	(止) ○˥○ (未) ○○˥ナイ (用) ○○ダ˥イ ○˥○タ(ダ)
四段活用・3拍	/○○○/	(止) ○○○ (未) ○○○ナイ (用) ○○○タイ ○○○タ(ダ)
	/○○˥○/	(止) ○○˥○ (未) ○○○˥ナイ (用) ○○○ダ˥イ ○○˥○タ(ダ)
	/○˥○○/	(止) ○˥○○ (未) ○○○˥ナイ (用) ○○○ダ˥イ ○˥○○タ(ダ)

	音韻論的解釈	活用形のアクセント
一段活用・変格活用・2拍	/○○/	(止) ○○ (未) ○ナイ (用) ○タイ ○タ(ダ)
	/○˥○/	(止) ○˥○ (未) ○˥ナイ (用) ○ダ˥イ ○˥タ(ダ)
一段活用・変格活用・3拍	/○○○/	(止) ○○○ (未) ○○ナイ (用) ○○タイ ○○タ(ダ)
	/○○˥○/	(止) ○○˥○ (未) ○○˥ナイ (用) ○○ダ˥イ ○˥○タ(ダ)

形容詞活用形のアクセント

	音韻論的解釈	活用形のアクセント
2拍	/○˥○/	(止) ○˥○ (用) ○˥○ナル (仮) ○˥○○バ
3拍	/○○○/	(止) ○○○ (用) ○○○ナ˥ル (仮) ○○○˥○バ
	/○○˥○/	(止) ○○˥○ (用) ○˥○○ナル (仮) ○˥○○○バ

注　(止)＝終止形
(未)＝未然形
(用)＝連用形
(仮)＝仮定形

(注)・˥は、アクセントの滝（下がりめ）を表わす。
・●、▶は高い拍、○、▷は低い拍を意味する。
・▶、▷は付属語の拍。
・動詞で「A」は四段活用、「B」は一段活用及び変格活用を表わす。
・所属語例は、名詞、動詞（四段活用、一段活用及び変格活用）、形容詞の順に掲げてある。

4・文　　法

文法上の特色では、主なものとして、次のような点が指摘できる。

ⓘ　動詞では、カ行変格活用動詞の一段化が進んでいる。いわゆる五段活用動詞では、カ行・サ行に活用するものの連用形に促音便が現われることがある。また、意志を表わす場合、高年齢層を中心に、「う・よう」のかわりに「ベー」が用いられるため、共通語の五段活用動詞は、日常会話のレベルでは四段活用となる。

ⓘⓘ　付属語では、種々の特色ある語が用いられる。代表的なものとしては「ベー・ダンベー」である。

ⓘⓘⓘ　動詞を中心に、接頭辞が種々の語につき、また、その種類も多い。

4-1　動　　詞

①　富田町方言では、日常会話では、高年齢層を中心に、意志・勧誘を表わす場合、共通語の「う・よう」のかわりに「ベー」が用いられる。「ベー」は、共通語の五段活用動詞の終止形（ウ段音の活用語尾）に相当する活用形に接続するので、「う・よう」のみが接続するオ段音の活用形を欠く。したがって、富田町方言では、日常会話のレベルでは、動詞は四段活用となる。但し、若年齢層を中心に、共通語化により「う・よう」も使用されるようになってきており、動詞の活用は四段活用から五段活用へと変化してきている。（→動詞活用表）

②　カ行変格活用動詞「クル（来る）」では、ネー（ない＝打消）・サセル（させる＝使役）・ラレル（られる＝受身・可能）等が下接する場合、一段化して、キネー・キサセル・キラレルとなる。また、命令形はコーである。

③　共通語のサ行・カ行・ガ行五段活用動詞は、サ行動詞では音便をとらず、カ行・ガ行動詞ではイ音便をとるが、サ行動詞の「外(ハズ)す・吊(ツル)す・寄(ヨ)こす」等、一部のものは促音便をとり、カ行・ガ行動詞の「歩く」・「行く」（富田町方言では、イグ）は促音便をとる。なお、「歩く」はイ音便もとる。（→動詞活用表）

④　仮定条件を表わす助詞「ば」が下接する場合、ア・ワ行五段活用動詞以外の動詞では、「エ段音の活用語尾＋バ」の形の他に、/CjaR/（ア段拗音）の形になる。例えば、カキャーイー（書けばいい）、ミリャー　イー（見ればいい）、クリャー　イー（来ればいい）など。（→動詞活用表）

⑤　強い打消を表わす「～（し）はしない」の表現では、ア・ワ行五段活用動詞以外の五段活用動詞では、イ段音の活用語尾と助詞「は」の融合した /CjaR/ の形となる。例えば、カキャーシネー（書きはしない）、イギャー　シネー（行きはしない）、トリャー　シネー（取りはしない）など。なお、稀に融合した拗音は直音化することがある。例えば、ソンナニ　カカラ　シネンダヨ（そんなに、掛かりはしないのだよ）など。（→動詞活用表）

表３　動詞活用表

活用形の名称	未然形				連用形		終止・連体形				命令形	仮定形			
下接語 ＼ 動詞語幹	ネー（打消）	セル……サセル（使役）	レル……ラレル（受身・尊敬）	レル……ラレル（可能）	マス ハジメル テー（願望） ナ（命令）	テ〔デ〕 タ〔ダ〕 テル〔デル〕 タラ〔ダラ〕	＊（終止）（体言） カイ サ ンダラ（条件）	ベー（意志）＊	ダンベー（推量）	ナ（禁止）	（命令）ヤ	バ（仮定）	（バ）イー	（ヤ）シネー（強い打消）	同類語
書く　ka(k)	a	a	a	／	i	(i)	u	u	u	u	e	e	(kjaR)	(kjaR)	動く、泣く、吹く
漕ぐ　ko(g)	〃	〃	〃	／	〃	[(i)]	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(gjaR)	(gjaR)	泳ぐ
貸す　ka(s)	〃	〃	〃	／	〃	i	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(sjaR)	(sjaR)	出す、隠す、押す 差す、消す
外す　hazu(s)	〃	〃	〃	／	〃	¦i (Q)¦	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	吊す、寄こす
行ぐ　i(g)	〃	〃	〃	／	〃	(Q)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(gjaR)	(gjaR)	
歩く　aru(k)	〃	〃	〃	／	〃	¦(Q) (i)¦	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(kjaR)	(kjaR)	
待つ　ma(t)	〃	〃	〃	／	(ci)	(Q)	(cu)	(cu)	(cu)	(cu)	〃	〃	(cjaR)	(cjaR)	持つ、育つ
死ぬ　si(n)	〃	〃	〃	／	i	[(N)]	u	u	u	u	〃	〃	(njaR)	(njaR)	
飛ぶ　to(b)	〃	〃	〃	／	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(bjaR)	(bjaR)	遊ぶ（アエ）
読む　jo(m)	〃	〃	〃	／	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(mjaR)	(mjaR)	飲む、産む、頼む 進む
取る　to(r)	〃	〃	〃	／	〃	(Q)	〃	〃	〃	¦(N) u¦	〃	〃	(rjaR)	(rjaR)	売る
有る　a(r)	／	／	／	／	〃	〃	〃	¦u (N)¦＊	¦u (N)¦	／	／	〃	〃	〃	
蹴る　ke(r)	a	a	a	a	〃	〃	〃	u	u	¦(N) u¦	o	〃	〃	〃	
会う　a(w)	¦a (a)¦	¦a (a)¦	¦a (a)¦	／	(i)	〃	(u)	(u)	(u)	(u)	(e)	(i)	(iba)	(ija)	思う、食う
笑う　wara	R	R	R	／	i	〃	R	R	R	R	e	¦i e¦	e(ba)	i(ja)	
見る　mi	—	—	—	—	—	—	ru	¦— N¦	ru	N	ro	re	(rjaR)	—(ja)	着る、借りる
落ちる　o(ci)	〃	〃	〃	〃	〃	¦— (Q)¦	〃	—	〃	¦N ru¦	〃	〃	〃	〃	拾える
足りる　ta(ri)	(N)	〃	／	(a)	〃	—	〃	／	〃	／	／	〃	〃	〃	
植いる　u(i)	—	〃	—	—	〃	〃	〃	¦— (e)¦	〃	N	¦ro (ero)¦	〃	〃	—(ja) (eja)	
出る　de	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	ro	〃	〃	—(ja)	寝る、受ける
来る　k(u)	(i)	(i)	(i)	(i)	(i)	(i)	〃	¦— ru¦	〃	〃	(oR)	〃	〃	(ija)	
為る　s(u)	〃	(a)	(a)	／	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(iro)	〃	〃	〃	

＊「ベー」が、推量の意で用いられる場合。

（注）・活用語尾の記述は、拍体系表（表１）に従って記述した。
・活用形の名称は、最も広く使われている名称を与えた。
・同一の下接語に、複数の語尾が接続する場合、¦　¦でくくって示した。
・（　）は、動詞の語幹の（　）中から変化する場合、或は、仮定形の「バ」・強い打消の「ヤ」が語幹と融合した場合の形等を表わす。
・〔　〕は、連用形に下接する「テ・タ・テル・タラ」が「デ・ダ・デル・ダラ」と濁音となる場合を表わす。

4-2 形容詞

形容詞では、日常会話では、高年齢層を中心に、推量を表わす場合、「だろう」のかわりに「ベー」が用いられる。共通語の「～かろう」という表現に形の上では相当する「～カンベー」という表現が盛んに用いられる。例えば、タカカンベー（高いだろう）・アツカンベー（暑いだろう）・ヨカンベー（良いだろう）・ナカンベー（無いだろう）など。

形容詞の活用体系は、共通語のそれと相違点が少ないので、体系表は省略する。また、形容詞語尾の音韻的特徴については、2-2の項で既に触れたので、省略する。

4-3 付属形式

4-3-1 助詞類

① 格助詞「を」は、省略されて非表出となる傾向が強い。例えば、ソンナ　オモイ　　シタンダヨ（そんな思いを、したのだよ）など。

② 格助詞「に・へ」は、イとなる傾向が著しい。例えば、ナカイ　イレル（中に入れる）、コッチー　キタ（こっちに来た）、タンボイ　イグ（田んぼへ行く）など。また、前接する母音と融合して、ナケー　イレル（中に入れる）のようにもなる。「に」は、また、後に /n/ 音が続く場合、撥音化する（→2-5、②）。

③ 格助詞「が」は、人間（人名・人称代名詞等）を表わす語に接続する場合、主格のみでなく、連体格を表わすことがある。例えば、オラガチ（俺の家）、クチョーサンガチ（区長さんの家）、○○チャンガ　トコ（○○ちゃんの所）など。

④ 共通語の格助詞「に」及び「～の上に」の意に当たる助詞「ゲ・ゲー」がある。「ゲ・ゲー」は、人間（人名・人称代名詞等）を表わす語と「こそあどことば」に接続する場合は、語に直接接続し、それ以外の体言には、助詞「の」を介して接続する。例を示せば、オレゲワ　ワカンネーケド（俺には、わからないけれど）、ゴゼンノ　モッテ　ソノゲー　トロロー　カケテ　タベタ（御膳を盛って、その上にとろろ芋をかけて食べた）、フサノゲー　ツイタ（房に付いた）など。

⑤ 共通語の「ても」に当たる接続助詞は「モ」である。例を示せば、ナカナカ　シタクモ　デキネーカラノー（なかなかしたくても、出来ないからねえ）など。

⑥ 共通語の「のか・のだか」に当たる疑問を含む並立助詞は「ガナ」である。例を示せば、シタガナ　シナカッタガナ　ヨク　ワカンネー（したのか、しなかったのか、よくわからない）など。

⑦ 限定・おおよその程度を表わす副助詞は、「ばかり」の変化した形の「バイ・ベー」が用いられる。例えば、コドモバイダッタ（子供ばかりだった）、アスンデベー　イル（遊んでばかりいる）など。

⑧ 限定を表わす副助詞は、「キリ・シカ」及びその変化した形の「キシ・シキャ」が用いら

れる。例えば、コレキシダ（これきりだ）、ミッカグレーシキャ　ネー（3日ぐらいしか無い）など。

⑨　副助詞「など・なんか」に相当する表現は、「ナンカ・ナンツ・ナンダ・ダナンカ・ダナンツ・ダンナンカ・ダンナンツ」など、種々の表現が用いられる。例を示せば、オレナンツ（俺など）、オレダナンカ（俺など）、オレダンナンツ（俺など）など。

⑩　疑問を表わす助詞は「カイ・カヤ・イ」などである。例を示せば、タマニャー　ウチーイルンカイ（たまには家に居るのかい）、ドンナ　フーイ　シタイ（どんなふうにしたのか）など。

⑪　共通語の「ね・ねえ」に当たる終助詞には、「ノ・ノー」・「ナ・ナー」が主に使用される。両者のうち、「ノ・ノー」のほうがやや丁寧な表現である。例を示せば、ソーダイノー（そうだよねえ〈主に、同等以上の者へ、或は、丁寧な言い方の場合〉）、ソーダイナー（そうだよなあ〈主に、同等以下の者へ、或は、親しい間柄の者へ〉）など。

⑫　念を押す意の終助詞「ぜ・ぞ」に当たるものは「デ・ド」である。例を示せば、ワカンネーデ（わからないぜ）、アメリカ　イッタッテ　アレダドー（アメリカへ行ったって、あれだぞ）など。

⑬　念を押す意の終助詞「よ」に当たるものは、「ヨ」の他に「イ」が使われる。例を示せば、アー　ヒデーモンダイ（ああ、ひどいものだよ）など。

4-3-2　助動詞類

①　過去進行を表わす助動詞「タッタ」が使われることがある。例を示せば、アンナ　コトーシタッタイノー（あんな事を、していたよねえ）、コクバンニ　カイテアッタッタイネー（黒板に書いてあったよねえ）など。なお、過去完了と過去進行とは、共に「タ（ダ）」で表現されることも多く、両者の区別は明確ではない。

②　断定の助動詞「です」の変化した形の「ス」が、稀に用いられる。例を示せば、ソーユーケーケンガ　アルンス（そういう経験があるのです）など。

③　断定の助動詞「だ」の仮定形「ダラ」が用いられる。例を示せば、アイツダラ　シッテルヨ（あいつなら知ってるよ）、ソーユー　キモチダラバ　イーケドノー（そういう気持ちならば、いいけれどねえ）など。

④　意志・推量を表わす「ベー・ダンベー」が盛んに用いられる。

ベーは、動詞に下接する場合、主に、意志・勧誘の意で用いられる。例えば、タノシマセベート　オモッテ（楽しませようと思って）、イッショニ　イグベー（一緒に行こう）など。動詞「有る」・形容詞にベーが下接する場合は、推量の意で用いられる。例えば、ソーユー　ケーケンガアンベーカラ　ハナシテクンナイ（そういう経験があるだろうから、話してください）、ソレデヨカンベー（それで、いいだろう）など。（→動詞・形容詞の項）

ダンベーは、体言と活用語の連体形に下接し、推量の意を表わす。例を示せば、アノ　シトア　ドコノ　シトダンベー（あの人は、どこの人だろう）、ハー　イグダンベヤー（もう、行くだろうよ）など。

⑤　「～(する)よ」の意を表わす助動詞「イ・ー（のばす音）、ライ・ラー」が用いられる。五段動詞には未然形に「イ・ー」が、一段・カ変・サ変動詞には語幹に「ライ・ラー」が下接する。例を示せば、オレガ　カカー（俺が書くよ）、コレ　クレラー（これをあげるよ）、キガネ　スライノー（気兼ねをするよねえ）など。

⑥　共通語の「じゃない」に当たる表現として、「ガネ・ガノ・ガナ・ガン・ガー」が用いられる。ガネは女性が多用し、ガンは男性が多用する。例を示せば、オーカ　ウレシクネーガネ（あまり嬉しくないじゃない）、サンジップングレー　ヨケー　カカッチャーガン（30分ぐらい、余計に掛かっちゃうじゃない）、イチバン　オーインダッツーケーガー（一番、多いのだというじゃないの）など。また、断定の「だ」に打消の「ナイ」が直接接続した「ダナイ・ダネー」の形も用いられる。例えば、ソーユ　コト　イッタンダネーン（そういうことを言ったのじゃないの）など。

⑦　共通語の「らしい・ようだ」に当たる「ゲ（ダ）」が盛んに用いられる。例えば、マッサカ　シアワセゲネー（とても幸せらしいねえ）、ルスノ　ウチガ　アッタゲダノー（留守の家があったようだねえ）など。

4-3-3　その他の付属形式

①　共通語の「～どころで（は）ない」に当たる表現として、「ズラーナイ・ズラーネー」が用いられる。例えば、ジューネンズラーネー（10年どころでない）・デカセギズラーネー（出稼ぎどころでない）など。

②　共通語の「きれいなの」の「～なの」に当たる表現として、「ノガン」が用いられる。例を示せば、ユーメーノガンガ　アル（有名なのがある）、アタッタグレーノガンガ（当たったぐらいなのが）など。

③　待遇表現は非常に稀にしか使われないが、挨拶のことばや丁寧な命令の言い方に現われることがある。例えば、アリガトガンス（ありがとうございます）、ハナシテクンナイ（話してください）など。

④　動詞・形容詞を中心に、種々の接頭辞のついた形が盛んに用いられる。動詞では、オッカク（缺く）・オッパジマル（始まる）、スットビオキル（とび起きる）、ツッタツ（立つ）、ツンノメル（のめる）、ヒッパタク（叩く）・ヒッツク（付く）、クッツク（付く）、ブッカク（缺く）・ブッタタク（叩く）、フットブ（飛ぶ）、ヒンムク（剝く）など。形容詞では、ウスギタネー（汚ない）、コギタネー（汚ない）、コッパズカシー（恥ずかしい）・コッピデー（ひどい）など。

4-4　人称代名詞

4-4-1　自称の代名詞

男性は、高年齢層では、専ら「オラ・オレ」を用いる。稀に「ワシ」も用いられる。若年層になると、「オラ・ワシ」は用いられなくなり、主に「オレ」が用いられている。高年齢層における「オラ・オレ・ワシ」は、待遇度等、用法の上で顕著な相違はない。

女性は、高年齢層では、専ら「私」の変化した形の「アタシ・アチシ・アッチ・アシ」が用いられる。稀に、「オレ」も用いられる。これらの代名詞は、待遇度等、用法の上で顕著な相違はないが、「アタシ」が最も広くよく使用されている。また、やや丁寧な会話では、「ワタシ」も稀に用いられることがある。若年層になると、主に「アタシ」が用いられる。

自称の代名詞では、共通語では男性しか用いない「オレ」が男女共に用いられていることが特色である。

4-4-2　対称の代名詞

対称の表現は、相手の名前等に接尾辞「チャン・サン（促音の後ではツァン）・ヤン」をつけて呼ぶのが最も一般的で、代名詞はあまり用いられない。対称の代名詞としては、男女共に「オメー」が稀に用いられる程度である。なお、「オメー」は高年齢層においては、相手を卑下する表現ではない。

5　お　わ　り　に

前橋市富田町方言の特色を、共通語との相違を中心に述べてきた。富田町方言の特色は、後述される群馬県内の他地域に共通してみられる特色がほとんどである。言い換えれば、群馬県方言の最大公約数的な方言であるといえよう。

なお、上述の説明及び説明文の中で用いた例は、基本的には、昭和58～60年度に収録され文字化された方言資料によるものである。したがって、説明の不備な点も多く、例の全ても最も適切なものであるとは言えない。この点については御容赦願いたい。

富田町の会話

1　自然談話——川の魚や蜂のことなど

話し手　A　森村伊勢雄　（男）
B　大沢　忠男　（男）
C　町田　一雄　（男）
D　星野　次男　（男）

D　ヤ　アラトガー　ダッテ　イゼン　オーミズガ　タビタビ　デタ
いや　荒砥川　だって　以前　大水が　度々　出た

ジブンナーノー　オーミズノ　デタ　アトア　ハッコミ(1)ツンデ
時分はねえ　大水の　出た　後は　ハッコミと言うので

マー　[C アー。／ああ。]　ソー　ユンガ　イックラデモ
まあ　そう　いうのが　いくらでも

カケラレタンダカラ。　[C ソーダヨ。／そうだよ。]　オーミズガ　デタ
仕掛けられたのだから。　大水が　出た

トキア　ウント　フイタ　トコガ　ダンダン　ヒケテキテ
時は　うんと　(水が)増えた　所が　だんだん　(水が)引けてきて

ショット　トメテノー。　ンー　ソコデ　イックラモ　サカナ
ちょっと　(水を)止めてねえ。　うん　そこで　いくらでも　魚(が)

トレタンダケド。
取れたのだけれど。

B　マー　オラホーノ　アレダナー　ニシノ　ヨセヤンガサー
まあ　俺の方の　あれだなあ　西の　与惣さんがさ

サカナ　トイガ　イチバン　ウマカッタッツーケンド　サカナトリア
魚　取りが　一番　うまかったというけれど　魚取りは

タシカニ　ジョーズダッタカ　シンネーケンド　イルンモ
確かに　上手だったか　知れないけれど　いるのも

イタンダイノー。　[A アー　モトガ　イタンダヨ。／ああ　元が　いたのだよ。]　モトガ
いたのだよねえ。　元が

イナケリャノー。　[C アー　イナケリャ　ツレッコネーヤー。／ああ　いなければ　釣れっこないや。]
いなければねえ。

笑]　[D 笑]　サカナトリ　イグンニ　ドーグ　シットモ
魚取り(に)　行くのに　道具(を)　少しも

モッテガネンダン。　[C ンー。／うん。]　アノー　イマノ
持って行かないのだもの。　あの　今の

ナガシコミノ　コー　ユー　トタンノー　アレダイナー
流し込みの　こう　いう　トタンの　あれだよなあ

アマダルノ　フルーミテーナノー。　[D ンー。／うん。]　アー　ユー
雨樽の　古　みたいなねえ。　ああ　いう

チーセント　コノクレー　チーセー　アノー　サカナ　インル
小さいのと　このくらい　小さい　あの　魚(を)　入れる

アノ　カゴー。　ザルカ。　[Dアー　ザルダイノー。／ああ　笊だよねえ。]
あの　籠。　笊か。

ミソコシザル　ミテーノ　モッテグッキリ。　ソレッキリデ
味噌濾し笊　みたいの　持って行くきり。　それきりで

アレダヨ　チョット　ニサンジカン　イッテクレバ　ハー
あれだよ　ちょっと　二三時間　行って来れば　もう

ミソコシザルイ　ナカラ　イッペーダカラノー。　スナメトー
味噌濾し笊に　かなり　いっぱいだからねえ。　すなめと

D　マー　ドジョー　アタリダローノー。
まあ　泥鰌　あたりだろうねえ。

B　ドジョー　デノー　アー。
泥鰌　でねえ　ああ。

C　ムカシャー…。
昔は

B　アノクレー　イタンダカラ。　イマー　イナクナッタツンナ
あのくらい　いたのだから。　今は　いなくなったというのは

ドーカシテラーナー。　アー。
どうかしているよねえ。　ああ。

A　ノーヤクノ　セーカノー　ヤッパリ。
農薬の　せいかねえ　やはり。

B　ノーヤク　ジャ　ネンカノー。
農薬　では　ないのかねえ。

C　マ　ノーヤク　ダンベナー。
ま　農薬　だろうなあ。

D　ムカシワ　イビ(2)アタリダッテ　ズイブン　トレタンダカンノー。
昔は　海老あたりだって　ずいぶん　取れたのたからねえ。

アー。　[Bソーサー。／そうさ。]　スクッテモ　ナンデモ
ああ。　すくっても　なんでも

トレタンダカラ。
取れたのだから。

B ダカラ ノーヤクー ガ アレダンベガン キ キ キーテカラ
だから 農薬 が あれだろうが 効いてから

ヘーモ イネーシ カモ イネーシサー。 ソレカラ
蠅も いないし 蚊も いないしさ。 それから

アレダンベー アノー イナゴナンカノー。 [D アー。 ああ。]
あれだろう あの いなごなんかねえ。

アレ テ ネーゴナンテ ハー テンデ イナクナッチャッタ。
あれ いなごなんで もう 全く いなくなっちゃった。

C ホタルガ イネーヤ。
蛍が いないや。

B ハー イネーン。
ああ いないの。

C ホタルナン シットモ ミカケネーモンノー。 コトシ
蛍など 少しも 見かけないものねえ。 今年

イルンカイ ホタルワ タマニャー。
いるのかい 蛍は たまには。

B ダイチ アレダンベー。
だいいち あれだろう。

A イヤ ホタルア コトシノ ナツアー ミズニ シマッタヨ。
いや 蛍は 今年の 夏は 見ずに 終わったよ。

C アー オレモ ミネー。
ああ 俺も 見ない。

B アイツナンカモ スク スクナクナッタンダネンカノー。
あいつなんかも 少なくなったのではないかねえ。

ヘビダトカサー カイルトカ。
蛇だとかさ 蛙とか。

A アー ユー モンモ ヘッテキタイノー。
ああ いう ものも 減ってきたよねえ。

B アー ユー モンモ ヨースルイ ヘッテキタト オモンダノー。
ああ いう ものも 要するに 減ってきたと 思うのだねえ。

ヨク アレダナー シ ヤマッカカシガ マー ダイタイダケドサ
よく あれだなあ やまかかしが まあ だいたいだけれどさ

[C アー。 ああ。] イタモンダー。 カーラエ クサカリ イゲバ
いたものだ。 川原へ 草刈りに 行けば

ドーシテ　ヤマッカカシノ　コンナ　デッケーンガ　イックラモ
どうして　やまかかしの　こんな　大きいのが　いくらも

イタケンド…。
いたけれど

D　アー　ヤマッカカシワノー　ドコデモ　ミラレタンダケド
ああ　やまかかしはねえ　どこでも　見られたのだけれど

サイキンナ　ホントニ　ミネー。
最近は　本当に　見ない。

B　イ　イマ　イナ　イネーヨ。
××　今　××××　いないよ。

D　アー。
ああ。

C　イマ　ハチモ　スクネーヤノー。
今　蜂も　少ないやねえ。

B　ハチノ　スモ　ネーヤノー。
蜂の　巣も　ないやねえ。

D　ハチア　ネーヤノー。　センダッテ　オ　オテラノ　ホラー
蜂は　いないやねえ。　先日　××　お寺の　ほら

ソージ　シタッテー　ハ　キョネンナー　ハチン　ササレテ
掃除　したって　××　去年は　蜂に　刺されて

サーギ　ヤッタケド　コッシワ　ヒトッツモ　ミナカッタ。
騒ぎ　したけれど　今年は　一匹も　見なかった。

B　イナカッタゲダナー。
いなかったようだなあ。

D　クネノ　ソージ　シタンダケド。
生垣の　掃除　したのたけれど。

A　アー。
ああ。

B　アー。　アラ　ヤッパリ　アレ　ハチモ　ヘッチャッタンダノー。
ああ。　あれは　やはり　あれ　蜂も　減ってしまったのだねえ。

D　ヤー　ハチア　ヘッタンダガナ　マー　アラジデモ　クル　アレガ
いや　蜂は　減ったのだか　まあ　嵐でも　来る　あれが

アルンダナ　マー　［ᴬンー。／うん。］　ワカラネーケド。
あるのだか　まあ　わからないけれど。

B　マー　アレダイノー。　ヨク　アラシガ　ンー　ハチノ　スガ
まあ　あれだよねえ。　よく　嵐が　うん　蜂の　巣が

カーラノ　バラノ　　キニサ　シターノ　ホーニ　スガ
川原の　　いばらの　木にさ　下の　　方に　　巣が

ツクッテアル　トキーア　オーミズワ　ネーケンドサー。　[D]アー
作ってある　　時は　　大水は　　ないけれどさ。　　ああ

オーミズア　アー。　エダノ　タカクニ　スガ　ミーンナ
大水は　　ああ。　枝の　　高くに　　巣が　皆

アルッツー　トキニワ　オーミズノ　デル　チョーコーガ
あるという　時には　　大水の　　出る　兆候が

アルンデ　ヤツラ　リコーデ　アレダー　ドジギワエ　ツクンネン。
あるので　やつら　利口で　　あれだ　　土地際へ　　作らない。

ダカラ…。
だから…。

注

(1) 鉄板でできている、どじょうなどを取るための仕掛。
(2) 川海老。5cmくらいのもので、以前はとれた。
(3) いなごの方言形。ナイゴとも。

2　場面設定の会話

話し手　A　大沢　忠男　(男)
　　B　有間　とく　(女)

見送り

A　アマグガ　ドコニ　アッタッケナー。　ミツケテクレヤー。
　雨具が　　どこに　あったっけなあ。　見つけてくれや。

B　ハイ　アッタヨ。　ドコ　　イグンダイ。
　はい　あったよ。　どこへ　行くのだい。

A　キョーワ　モモノキガーガ　　ダイブ　ツレル　ソーダカラ
　今日は　　桃木川が　　大分　　釣れる　そうだから

　モモノキガー　ホー　イッテクベート　オモーンダ。
　桃木川の　　方へ　行って来ようと　思うのだ。

B　コーンナニ　クモッテンニ　イグンカイ。
　こんなに　　曇ってるのに　行くのかい。

A　クモッテル　トキノ　ホーガ　ケーッテ　ヨク　ツレルカラナー。
　曇ってる　　時の　　方が　　かえって　よく　釣れるからなあ。

B　アンマリ　フッテキネー　ウチニ　ケール　ホーガ　イーヨ。
　あんまり　降ってこない　うちに　帰る　　ほうが　いいよ。

A　アー　ナルベク　ハイク　カイッテクルヨ。(咳払い)
　ああ　なるべく　早く　　帰ってくるよ。

B　イ　イシガ　スベルカラ　キオ　ツケテ　　ホーガ　イーヨ。
　　石が　すべるから　気を　付けて（気を付けた）ほうが　いいよ。

A　ダイジョーブダ。　シンパイ　スル　コトア　ネーヤ。　ジャー
　　大丈夫だ。　心配　する　ことは　ないや。　じゃあ

　イッテクルデー。
　行ってくるぞ。

B　イッテキネーカイ。
　行ってこないかい。

迎　え

A　アー　ケーチタデー。（咳払い）
　ああ　帰って来たぞ。

B　ハヤカッタノー。
　早かったねえ。

A　アメデ　スッカリ　ビジョヌレ　ナッチャッタカラナー。
　雨で　すっかり　びしょぬれに　なっちゃったからなあ。

B　ンート　トレタカイ。
　うんと　取れたかい。

A　ミテクレヤー　マー　コ　キョーワ　テンキガ　アメガ　ンー
　見てくれや　まあ　今日は　天気が　雨が

　キョーワ　アメッブ　コ　コンナニ　フッタンデー　トテモ
　今日は　こんなに　降ったので　とても

　ツレタデ。　コノ　サカナーオ　ミテクレヤ　マー。
　釣れたぞ。　この　魚を　見てくれや　まあ。

B　ウワー　ンーント　トレタノー。　ユガ　ワイテルカラ
　うわあ　うんと　取れたねえ。　湯が　沸いてるから

　ヘーンネカイ。
　入らないかい。

A　ジャー　アーダー　ユニ　ヒャーッテ　デルマデニ　サカナ
　じゃあ　あれだ　湯に　入って　出る迄に　魚(を)

　ヤイトイ　ヤイトイテクレヤー　サケノ　イッペー　ノム
　焼いておいてくれや　酒の　一杯(も)

　ノミテーカラナー。
　飲みたいからなあ。

B　ハイ。
　はい。

2　下仁田地方の方言

調査地点　甘楽郡下仁田町青倉字土谷沢

調査員　杉村孝夫
同補助　福田孔一
話　者　赤岡あさの　女（大正10年生）
赤岡猪三郎　男（大正5年生）
赤岡一正　男（大正7年生）
赤岡　悟　男（明治42年生）
赤岡しな　女（大正10年生）
赤岡ひな　女（明治41年生）
赤岡量平　男（明治42年生）
岩崎正春　男（昭和25年生）
福田孔一　男（大正11年生）

下仁田町の概観

福　田　孔　一

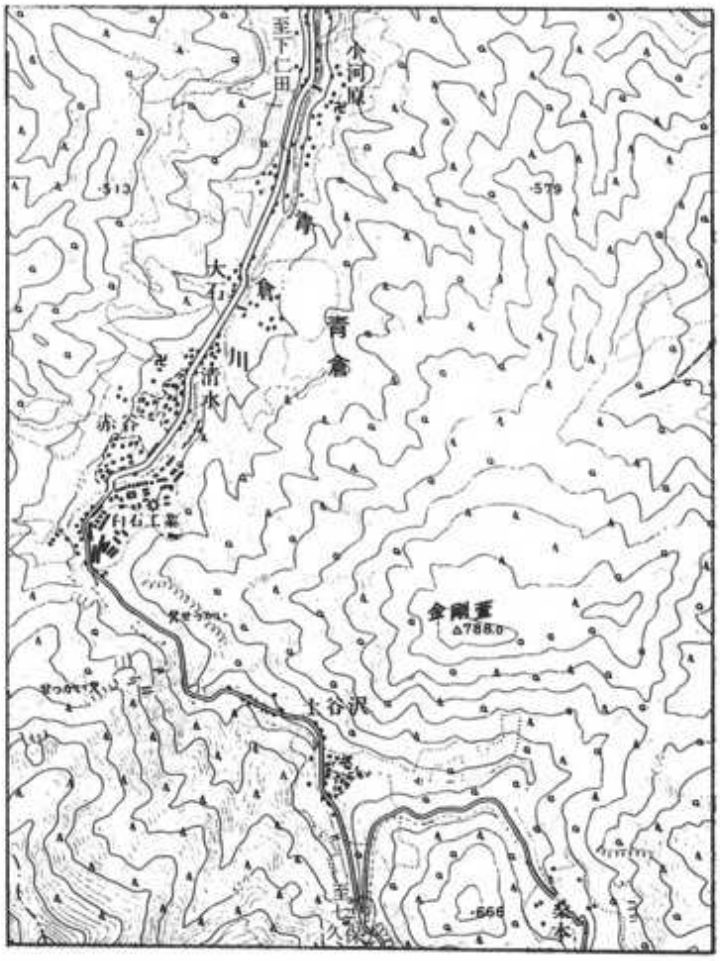
1　位　置、地　形

下仁田町は県の南西部に位置し、甘楽郡に属している。東は富岡市、藤岡の両市と甘楽町、南は南牧村と多野郡中里村、西は長野県佐久市、北は妙義町、碓氷郡松井田町、長野県北佐久郡軽井沢町にそれぞれ境を接している。

昭和30年（1955）３月、下仁田町、馬山村、小坂村、西牧村、青倉村の五カ町村が合併して現在の下仁田町になった。

町は北、南、西の三方を山に囲まれており、北には妙義山、千駄木山、大山（おおやま）、西に日暮山（につくらやま）、八風山、物見山、熊倉峯、荒船山、南に鹿岳（かなたけ）、四ツ又山、稲含山などいずれも 1,000m から1,500m級の山々である。

このため町の面積189.44㎢のうち、88％を山林と原野が占めている。



北部の和見沢及び西部の日暮、八風山方面に源を発する鏑川が主川となって、途中物見山、荒船山等より発する支流を集めた市の萱川を本宿附近で合流し、東南に向い、中小坂地内で妙義山方向より発する小坂川を合流し、更に南下して青岩附近で、南牧川を合流し東進しながら、途中横瀬川その他の小河川を合流しながら富岡市に向っている。

交通路は鎌倉期より特に発達したと考えられる。現在で

も何個所か鎌倉街道であったと伝えられている旧道がある。

江戸期には中山道より別れて藤岡宿から下仁田を通り信州への道が開かれていて、下仁田宿として栄えた時代もあった。

現在は鏑川沿いに国道254号線が開かれていて、内山峠を越えて長野県佐久市に通じている。また本宿より右に別れて和見峠を越えて長野県軽井沢町に至り、国道18号線に合流する県道下仁田・軽井沢線があり、また鏑川と南牧川合流点附近から北東に開けた平坦地に主邑の下仁田の町並がある。

調査地点の大字青倉字土谷沢は、合併以前は旧青倉村の大字青倉地内の小字であって、下仁田町の南部に位置している。

明治22年（1889）の町村制実施の際、青倉、大桑原、風口、宮室の四カ村及び南甘楽郡平原村（現在の多野郡中里村）の一部を編入し青倉村と称し、昭和30年の下仁田町への合併までに及んでいた。

土谷沢部落は大字青倉のやや中央部に位置し、東西を1,000m程の山々に挟まれ、南は桑本、平原、七久保の各部落を経て1,400m級の山を境に多野郡に接していて、北流する青倉川に沿って山間が開口していて県道下仁田・小平線が一本、北から南に貫通しているのみである。

2　人　　口

町の人口は昭和60年10月の時点では、14,596人であった。大字青倉は1,186人で、土谷沢では95人であった。

明治42年（1909）12月の調査では旧青倉村の人口は2,378人で、約10年後の大正7年（1918）12月では2,761人で約400人増加していた。従って当時の大字青倉の人口は1,500人前後で、字土谷沢では150人以上あったと推定される。

土谷沢部落（中央左は元土谷沢分校）

現在人口は過疎化が進み年々減少する傾向にある。大正時代や戦前の大家族制の頃は現在より人口は多かったのである。

3　沿　　革

旧青倉村は、天正18年（1590）徳川家康が関東を領するに当り、南牧領の１村で天領としての代官支配であった。その後文政７年（1824）から天保７年（1836）まで館林藩に属したが、再び徳川氏の直轄となった。安政元年（1854）より徳川氏麾下の采地（旗本領）となって明治維新まで至った。

明治元年（1868）12月より岩鼻県に属し、同４年10月群馬県に属した。同６年（1873）より熊谷県に属したが、同９年より再び群馬県に属すことになり、同11年（1878）12月郡区編制の時点で、南・北甘楽郡に分割され、青倉村は北甘楽郡役所の管轄に置かれた。同時に青倉、大桑原、風口、宮室の四カ村を連合してその戸長役場を青倉村に置き、青倉村外三カ村戸長役場と称し事務取扱をした。

明治22年（1889）４月市町村制実施の際前出四カ村に元南甘楽郡平原村（現中里村）の内字土屋ほかの小字を北甘楽郡に編入、これを大字平原村と称し、前記４カ村と合せここに青倉村と称し、旧各村は大字として昭和30年（1955）の下仁田町に合併に至るのである。

4　産　　業

町の主な産業は農林業で江戸期以降第二次大戦までは農家で養蚕を行わない家は皆無という位であった。従って江戸期以来戦前までは製糸業も盛んであり、大字青倉でも物産中の最も主要なものであった。明治中期までの製糸の大部分は座繰りであったが、明治後期より器機製糸が発達し、製糸組合等により共同事業として生糸が盛んに生産された。

養蚕は江戸期から昭和30年代まで、農家の重要な収入源として行なわれ、戦後も各地に稚蚕共同飼育所が設立され、最盛期には青倉で養蚕農家120戸を数えたが、40年代より減少し始め、60年代には12戸だけとなった。

和紙もまた下仁田地方の特産品の一つであった。青倉地区では木紙（きがみ）、長しぶ、青倉紙とよばれ、江戸時代より全村の三分の一の農家で農閑期の副業として生産したと伝えられている。昭和期に入り、生産農家も僅か数戸となり、30年代には製紙農家は皆無となった。

かつて活躍した水車

青倉の石灰は、口伝によると土谷沢の赤岡家の先祖が（現赤岡悟氏）

石灰山の管理を徳川家より命ぜられた。また江戸城築城の際には青倉の石灰を白壁の材料に使用したとか伝えられている。一説には嘉永、安政の頃、青倉村名主の赤岡與惣右衛門が字白岩地内に石灰礦を発見し、自己資金を投入してかまを築き石灰を生産したのが始まりと伝えられている。

明治以降昭和初期まで青倉産の石灰は米作り及び養蚕用として需要が増大し、生産業者も増加したが、現在は化学品生産会社1社、生石灰、肥料等製造会社1社のみとなった。

わが国の蒟蒻相場は下仁田で決まるといわれている。現在も全国一の集荷出荷量を維持している。その蒟蒻の歴史は下仁田ではそう古く無いのである。

江戸時代蒟蒻が庶民の食用として普及したのは水戸藩によってである。茨城県久慈郡で盛んに栽培が行われ、蒟蒻玉の精粉加工法が発明され、運搬貯蔵等も容易となり、商品価値も上昇し広く取引が行われるようになった。

明治に入り加工法等が下仁田地方に伝えられ、下仁田地方の土壌に適した作物であり、また冬のからっ風と水利は加工に適した為に蒟蒻産業が発達し今日に至っている。

白石工業(株)白艶華工場付近

5 交　　通

下仁田町は古くから交通の要地であった。現在も鎌倉道といわれる旧道が何個所かある。江戸時代には中山道脇往還として本庄宿から藤岡宿に入り、甘楽の谷間を西上し、下仁田宿から西牧関所を通り信州へ通ずる道が開けていた。現在は国道254号線で長野県へ通じている。交通機関としては明治30年開業した上野鉄道（高崎・下仁田間）があり、現在の上信電鉄となっている。その他の交通手段としては路線バス及び自家用自動車等があるが現在廃止されたバス路線もあり、町営のスクールバスが運行している地域もある。

6 教　　育

この地方の教育は、文化文政の頃から明治5年の学制領布に至るまでは寺小屋教育であって、旧町村別では、下仁田8、馬山4、小坂6、西牧29、青倉8で合計55カ所の寺小屋が存在した。

明治5年以来各町村は、それぞれの町村に適した小学校を法律により設置し教育を行って来た。昭和56年3月廃校になり、同年4月より青倉小学校に合併した土谷沢分校の前身は、明治

18年教育令の改正により明治５年以来開校していた青倉学校が廃され、北甘楽郡第11小学校として下仁田町に設置されこれに連合した。同時に字土谷沢に教育期間二カ年の分校を開校した。これが土谷沢分校の前身であり、後に四年制、六年制となりながら、昭和56年３月の廃校まで続いたのであった。

7　民俗、文化、文化財等

町は県の西南部に位置しているので、他の西毛地域の市町村と、風俗習慣などは大体同じである。当町は大部分非米作地帯であるので、米作りについての習俗や農作業の点において多少異なる点もある。

年中行事なども町内各地区大体同じであるが小正月行事の「どんど焼」など一般に14日夜行うが、土谷沢部落では15日早朝行うなどの違いがある位で他は大体同じである。

下仁田は古くは鎌倉道を通じ、江戸期には中山道及び脇往還の下仁田道を経て東の文化が入り、西京や日本海側の文化は信州方面より峠を越えて入って来た。明治以降も交通機関の発達に伴い速度を早めながら入って来た。

勿論古くから山地独自の衣食住その他の文化は発達しながら現在に至ったのである。

当地方は江戸期には天領支配であったので近世の城跡城閣などは無い。中世の山城や狼煙台の跡らしきものなどが見られるのみで、土谷沢部落の上方にもお屋敷と呼ぶ山城の跡があり、東方には物見台の跡もある。

西毛地方は県内有数の石造文化財の宝庫である。当町でもその通りである。これは隣国信州の石工が江戸への往来で通過し、又滞在したなどに依るものと考えられ、また民間信仰も根強かったことにもよるのであろう。

特に道祖神、庚申塔、馬頭観音などに見るべき物が多い。町内に百庚申の建立個所も５カ所もある。その他寺社建築についても見るべきものも多い。これも信濃国の木匠達の通過や滞在によるものもあると考えられている。

下仁田町土谷沢の方言

杉村孝夫

1 はじめに

本稿で記そうとする土谷沢の方言の概要は、土谷沢のはえぬきの7人の高年齢層話者の談話資料にあらわれる言語形式による。調査表を使った質問調査によるものではない。談話資料は、録音という場面的制約のあるもので、まったくの自然談話とはいえないが、複数話者の談話では、時間の経過とともにかなり自然談話に近いものが表れていると思われる。そこには、質問調査では得られない特徴も表れていよう。

7人の方々の中には、多少の年齢差がみられ、それぞれの年代には個人差も存するが、特にことわらない限り、本稿では取り上げていない。以下では、音韻上の特色、文法・表現法上の特色について取り上げる。

2 音声・音韻

2-1 音素と拍体系

当方言の音素は次の23個である。

母音音素　/i, e, a, o, u/

半母音音素　/j, w/

子音音素　/h, g, k, d, t, n, z, c, s, r, b, p, m/

拍音素　/N, Q, R/

(註) /N, Q, R/ は、それぞれ撥音、促音、長音の各音素を表す。

以上の音素は、拍音素は単独で、母音音素は単独または子音、半母音音素と組み合わさって、その他の音素は組み合わさって拍を形成する。拍体系は表1の通りである。

表1

ju	jo	ja	—	i	e	a	o	u	wa
hju	hjo	hja	—	hi	he	ha	ho	hu	—
gju	gjo	gja	—	gi	ge	ga	go	gu	—
kju	kjo	kja	—	ki	ke	ka	ko	ku	—
—	—	—	—	—	de	da	do	—	—
—	—	—	—	—	te	ta	to	—	—
nju	njo	nja	—	ni	ne	na	no	nu	—
zju	zjo	zja	—	zi	ze	za	zo	zu	—
cju	cjo	cja	cje	ci	—	ca	co	cu	—
sju	sjo	sja	—	si	se	sa	so	su	—
rju	rjo	rja	—	ri	re	ra	ro	ru	—
bju	bjo	bja	—	bi	be	ba	bo	bu	—
pju	pjo	pja	—	pi	pe	pa	po	pu	—
mju	mjo	mja	—	mi	me	ma	mo	mu	—
N	Q	R							

音韻上の特色を拍表でみると

(1)　/co、ca/（ツォ、ツァ）の拍がある。

ゴッツォー（御馳走）、オトッツァン（お父さん）、ウタチュ　ヤツァー（歌というやつは）

(2)　/cje/（チェ）の拍がある。

チッチェー（小さい）

以上の2点である。その他、当方言の音声的な特徴としては次の諸点があげられる。

(3)　母音の無声化は盛んである。

①　狭母音 /i、u/ が無声子音にはさまれた場合、語末で無声子音に伴なわれた場合の無声化は規則的におこる。

②　次の様な場合は、 /a、o、e/ でも無声化がおこる。

マルカッテ　カ̥カッタッテ（束になってかかっても）、タ̥タカウ（戦う）、コ̥ココロガケ（心がけ）、カワネーッテ̥　コター（買わないということは）

(4)　／g／の行（ガ行）は、語頭で［g］、語中・尾で［g～ɣ］。［ŋ］はない。

(5)　/r/ の行（ラ行）は、赤岡ひな氏（女、明41）には、顫動音（ふるえ音）がしばしばあらわれる。他の話者には、ほとんどあらわれないかまったくあらわれない。

(6)　/N/（撥音）は語頭にも立つ。無雑作な発音では、次の場合のようにあらわれる。

①　マ行音の前の /u/

ンマヤ（馬屋）、ンマク（うまく）、ンーメー（美味い）

②　撥音の前の /u/

ンート（うんと＝沢山）、ンードーカイ（運動会）、ンー（うん＝応答詞）

③　「何」にあたる語として

ンダノ（何だね）、ンダッタノ（何だったね）、ンダイ（何だね）

④ 「それ」、「そんな」、「そう」にあたる語として

ンダカラ（それだから）、ンデモ（それでも）、ンジャー（それでは）； ンナ コトダケデ（そんなことだけで）、ンーナナー（そんなのは）；ンダケド（そうだけど）

(7) /Q/（促音）に該当する音声には有声の異音もあらわれる。

ソッデー（それで）、カッテッテッペー（買っていってみよう）

2-2 音変化

音変化には、交替、脱落、添加、縮約がみられる。それらは、音声的条件に規定された変化ばかりでなく、形態音韻的な変化をも含む。微細で個別的音変化も掬い上げていく。

(1) 交替

（1，1） 母音交替

① i＞e

エバッテ（威張って）、エーカゲン（かなり）、メッケル（捜す）、ヘラネー（放らない）

② e＞i

キカシタ（聞かせた）

これは、使役を表す助動詞の連用形が「テ・タ」に続くとき「セ」＞「シ」の母音交替がおこるものである。

③ ae＞ai、oe＞oi

ムカイニ クル（迎えに来る）、カイリタイ（帰りたい）、ソコン トコイ（そこの所へ）

連母音 /ae、oe/ が同化して /eR/ となったとみなし、回帰させた結果生じたものである。

④ o＞u

アスコ（あそこ）、ヨアスビ（夜遊び）、ムス（燃す）、ウクリムケー（送り迎え）、アカップー（赤頬）、ニチムカラノ（煮てしまうからね）

最後の例は、au＞oRの縮約を経てo＞uの交替をしたもの。

⑤ u＞o この例は稀。

ヤマモジナ（山猪）

⑥ o＞a

コマッテ ヤル（籠ってやる）

⑦ u＞i

イゴク（動く）

⑧ i>u

スイテ（敷いて）

（1．2） 半母音を伴う母音交替

① i>ju

ユワ（岩）、ユッテ（言って）

② ju>i

ソーイ　コト（そういう事）

③ oR>owa

トワイ（遠い）

（1．3） 子音交替

① hi>si

シテーグチ（額）、シトツ（一つ）、ゼシ（是非）、シツヨー（必要）、ヘー　シッテ（屁を放って）

hi>siからさらに、si>ciの交替をしたものがある。ただしパロール的。ヘーッテ　チッテ（屁を放って）。逆に、ci>siの交替もある。オシッチモーカラ（落ちてしまうから）。

② ta>ha

ハタク（たたく）

③ so>ho・hu

ホデ（それで）、ホースルト（そうすると）、ホンナドコジャーネー（そんなどころではない）；フンナカ（その中）、フンナモンダカラ（そんなものだから）

④ b>m

キミダンゴ（黍団子）

⑤ m>b

アツベタ（集めた）

⑥ 直音化

i）zju>zi　ギジツシャ（技術者）、ジッカンメ（十貫目）

ii）sju>si　ワケーシ（若い衆）、ウチノシ（家の衆）

iii）sjo>so　ソッチュー（しょっちゅう）　これは、前2者にくらべパロール的。

⑦ zo>zjo

ジョーリ（草履）

⑧ ki>si

カッテシテ　クンネーカイ（買ってきてくれないかね）

⑨ ik->ig-

イグ（行く）、イギテー（行きたい）、イガネー（行かない）

「行く」という動詞の語幹末尾の子音においてのみk>gという子音交替がみられる。

（1．4） 拍の交替

拍の交替では、撥音・促音・長音になるものがさかんである。

① ni> N

オセワン　ナッテ（お世話になって）、ナンシロ（なにしろ）、マンチ（毎日）、シモンタ（下仁田）

② no>N

オセータンサー（教えたのさ）、ソン　トキャー（その時は）、デキネンダケド（できないのだけれど）、イソガシンニ（忙しいのに）、クーンガ（食うのが）

③ re・ra・ru>N

アンダナー（あれだなあ）、クンナカッタ（くれなかった）、モマンナキャ（もまれなければ）；オベータンカノー（覚えたからねえ）、ナッテタカンノ（なっていたからね）；ショッテ　クンナ　ヤダナー（背負ってくるのはいやだなあ）

以上の様に、ダ行・ナ行音の前で撥音と交替する。

④ neR>N

イージャンカ（良いではないか）、タケージャンカ（高いではないか）

「〜ではないか」にあたる「〜ジャネーカ」が「〜ジャンカ」になる。

⑤ koto>koN

オメーガ　キテ　クレタ　コンダカラ（お前が来てくれたことだから）、ソンナ　コンデスンダケド（そんな事で済んだけど）

⑥ N>Q

ホットーニ（本当に）、カッテッテッベー（買っていってみよう）

後者は、「カッテ　イッテ　ミベー」から「カッテッテンベー」を経て生じた形である。

⑦ R>Q

ロップ（ロープ）、ソッカイ（そうかね）、オッキー（大きい）、ヒッテモ（引いても）

⑧ re・ro>Q

ソッデー（それで）；マーシメン　トッカラ　ミルト（道路が曲っている所から見ると）

⑨ si>Q

ヨコッテ（よこして）、ソーッチャー（そうしては）、オッツケル（押しつける）

⑩ tete>Qte

オユー　タッテ（お湯を沸して）、ソダッテ（育てて）

⑪ kisja>Qsja

ナナツブグレーッシャ（7粒ぐらいしか）

⑫ zucu>Qcu

イットーッツ（1頭ずつ）

「ズツ」は、「ズ」の脱落した形もある。

ハンブンツー　ニカイダッタナー（半分ずつ2回だったなあ）

⑬ ri・re・ru・ro>R

クミタテタイソーバッカーノー（組み立て体操ばかりはねえ）、ミセタッキーデ（見せたきりで）；ソーデ（それで）、ヤスムンダケード（休むのだけれど）；イカッテーチューンデ（埋まっているというので）；イッタ　トコーダノー（行ったところだねえ）

⑭ naNka>RNka

オラーンカ（俺なんか）

「ナンカ」は、「ナ」の脱落した形もある。

オランカノ　ジダイニャ（私たちの時代には）

⑮ nana>nara

ナラクボ（七久保＝地名）

(2) 脱落

（2．1）母音の脱落

（2．1．1）1語の内部

i>ϕ　ヤダナー（いやだなあ）、マンチ　マンチ（毎日毎日）、ダイチ（第一＝まず）

（2．1．2）2語連続部

① te・de+i・o…>te・de+…　アスビアルイテタ（遊び歩いていた）、シゴトバカ　シテルカラ（仕事ばかりしているから）、ヤッテゲル（やっていける）；ノンデッテ　クレヤー（飲んでいってくれや）；ウワノセ　シトク（うわのせしておく）

② to+o…>to+…　カイリタイトモンダケド（帰りたいと思うのだけど）、クーベートモッテモ（食おうと思っても）

（2．2）半母音の脱落

① wa>a　キョーア（今日は）、クチアー　ワルカッタケド（口は悪かったけど）、ホーリコンジャッタチュアイ（放りこんでしまったというよ）

② awa>aR　ツチアザー（土谷沢）、ナートビ（縄飛び）、サーギ（騒ぎ）、ワラーレル（笑われる）、マニアーネー（間に合わない）、カナーナクッテ（かなわなくて）

③ ja・jo>a・o　ツチアザー（土谷沢）、ヨセ　オセナンテ　ユワレテ（よせよせなどと言われて）

（2．3）子音の脱落

① mi>i　スイマセン（すみません）

② nja>ja　コンヤク（蒟蒻）

③ na>a　アンダイ（何だね）

④ re>i　コイデ（これで）、ソイデ（それで）

（2．4）　拍の脱落

① N>φ　イッショケメ（一生懸命）、サンボギ（三本木＝地名）

② R>φ

i）撥音の前　コーチョン　ナッテ（校長になって）、インダケレド（良いのだけれど）、デッケンダ（大きいのだ）、モライテンダケド（もらいたいのだけれど）、ツケベーチュンデ（つけようというので）、イソガシンニ（忙しいのに）、イッショケメ（一生懸命）

ii）促音の前　ネドコイ　ヘッテ（寝床に入って）、ヘッテルンダモノ（入っているのだもの）

iii）その他　ソーユ　ワケデ（そういうわけで）、ソシタラ（そうしたら）、ホントニ（本当に）、ヒャクメグレー（百枚位）、モッテ　ネーチュヨーナ（持っていないというような）

③ ru>N>φ

後接の「ノ」が撥音と交替した後、ruが撥音と交替すると、撥音の連続を避けるために一つ目の撥音が脱落する。そのプロセスは次の通り。

スルノデ>スルンデ>*スンンデ>スンデ

ショードク　スンデ（消毒するので）、コマンダケド（困るのだけど）、クレンデ（くれるので）

④ re・ru>φ　ホデ（それで）、ソダケ（それだけ）、アダネー（あれだねえ）、ダガ（誰が）、デキネンダケド（できないのだけれど）；ソースト（そうすると）

⑤ bakari>baka　ジューゴマンバカサー（15万ばかりさあ）、フツカバカ　メーワ（2日ばかり前は）、ハタラクバカ　ノージャ　ネー（働くばかりが能ではない）

⑥ tokoro・dokoro>toko・doko　イソガシー　トコ（忙しいところ）、ショーボーゴヤントコ（消防小屋のところを）、ソンナドコジャ　ネーヤイ（そんなどころではないよ）

⑦ nici>ci　コンチワー（今日は）

⑧ mi>φ　ナヤ（みなや＝間投詞）、ンナ（皆）

⑨ desu>su　ドースネー（どうですね）、マチガイ　ナイスヨ（間違い無いですよ）

⑩ naNka>naN　イー　ザルナン　カッテ　キテノー（良い笊なんか買ってきてねえ）

⑪ sorede>de（2拍の脱落）　デ　スミー　ヤイテテ（それで、炭を焼いていて）

(3)　添加

撥音、促音、長音の各拍の添加がみられる。添加形式は強調のニュアンスを伴なう。

① φ>N　ソノマンマ（そのまま）、アンマリ（あまり）、ナンニモ（何も）、ウンマクッテノー（美味くてねえ）、ネガ　ヨンゲダッチュー（値がよさそうだという）、カンケーワ　ナ

ンゲカ（関係は無さそうか）

② ϕ>Q

i）単語境界　コレッカラ(これから)、ソノジダイッカラ(その時代から)、ワスレッチャッテ（忘れてしまって)、キビシクッテ（厳しくて)、ミセタッキーデ（見せただけで）

ii）形態素境界（複合語の構成要素間）　マメッタマ（豆玉)、サカナッカス（魚滓)、シトッパナシ（一話)、カリッコト（借事)、カジリッツイタリ（がじりついたり）

iii）形態素内　ヤッパリ（やはり)、イックラ（いくら＝副詞)、バッカ　ユーニャ（馬鹿を言うなや)、ワッキャー　ネー（訳はない)、オッカシー（面白い）

③ ϕ>R

i）原則として1拍目の後　イーチ　イッテ(市へ行って)、マーッタク(まったく)、コージアケテ（こじあけて)、ナーンデモ（何でも)、ソーレコソ（それこそ)、ドーコノ（どこの)、ミーンナ（全て）

ii）1拍目が無声拍の場合は2拍目の後　シトーリ（一人)、フターリ（二人）

iii）2拍目以降　イチバーン（一番)、シマーットイテ（仕舞っておいて)、ミンーナシテ（皆で）

(4) 縮約

（4．1）連母音の同化

（4．1．1）単純語の内部

① ai>e (R)　イヘー（位牌)、アクテ（悪態)、エレー（えらく)、ヘーッテル（入っている)、コノクレー（この位)、デケー（大きい)、キレー（きらい)、カレー（辛い)、モライテー（もらいたい)、イマデー（今だに）

最後の例は、「イマダニ」から「イマダイ」を経て生じた形である。

①′ mitai>micjo(R)　マゼゴハンノミチョーニ(混ぜご飯みたいに)、イチミチョノンモ(市みたいのものも)

② jai>eR　ハエー（早い）

「je」という新しい拍は作らず、既存の類似の拍へと吸収される。

③ ae>eR　オメー（お前)、フツカバカ　メー（2日ばかり前)、ケーシタ（返した）

④ ie>eR　メーテ（見えて)、オセータリ（教えたり）

⑤ oi>eR　ボヤヒレー（薪拾い)、フツゴーノ　オメー（不都合な思い）

⑥ oe>eR　オベール（覚える）

⑦ ui>iR　サビー（寒い）

⑧ jui>iR　イーノー（結納）

②と同じく「ji」という既存の拍はないので「i」に吸収される。

⑨ ue>eR　フレール（震える）

⑩ au>oR　カタオ　アロー　クリーク（肩を洗うクリーク）、ベンキョー　シテ　モロー　シツヨー（勉強してもらう必要）、クッチモーンダカラ（食ってしまうのだから）、ワスレッチモー（忘れてしまう）

ワ行五段活用動詞・補助動詞に体言（相当）が後接する場合にあらわれるが、補助動詞では最後の例のように終止する場合にあらわれることもある。

（4．1．2）複合語・2語の連接部

① o+a>a(R)　コナイダ（この間）

② o+e>eR　ココン　トケー（ここの所へ）、コケー（ここへ）

③ Ci+a>CjaR　モチャーゲテ（持ち上げて）

④ ga+ie>geR　オラーゲー（俺の家へ）

（4．2）半母音の同化

（4．2．1）　1語の内部

① owa>aR　オサーッタ（教わった）

② owa>oR　オッコーシー（壊しに）

（4．2．2）　助詞「ワ」と前接語との同化

① Ci+wa>CjaR　トーガラシャー（唐辛子は）、タマニャー（たまには）、トキャー（時は）

② Ce+wa>Cja(R)〜CaR　アリャー（あれは）、ソリャ（それは）、ソラー（それは）

①、②については(2)脱落（2．2）半母音の脱落①wa>a参照。

③ Ca+wa>CaR　ハラー（腹は）

現象としては（2．2）②awa>aRと同じである。

④ Co+wa>Ca(R)　タカラモナー（宝物は）、ソーユナー（そういうのは）、コンダ（今度は）

⑤ Cu+wa>CaR　ヨカー　ネンダノー（良くはないのだねえ）

（4．2．3）　助詞「ba」と前接語との同化

① Ce+ba>CjaE　カワカシャー（乾かせば）、クリャー（来れば）、ナケリャー（無ければ）

動詞・形容詞・同型に活用する助動詞の仮定形にあらわれる同化である。

①'kere+ba>kja(R)　マカサナキャ（負かさなければ）、モマンナキャー（もまれなければ）、サモナキャ（そうでなければ）

形容詞（型）の仮定形にあらわれる。

② e+ba>jaR〜waR　クヤー（食えば）、モラヤー（貰えば）、イーッチューワー（良いと言えば）

（4．2．4）　「と＋言う」の同化

① to+juR>cju(R)　イカッテーチューンデ（埋まっているというので）、イーッチュワー（良いといえば）

② to+juR>te　リョーヘーサンテ　ウチデ（量平さんという家で）

③ to+juR+to>qto　ムコーエ　イグット　リッパナ　オシロガ　ミエルノデ（向うへ行くというと立派なお城が見えるので）

④ to+juq+te>cuqte～teqte～siqte　イー　ムコ　アテターツッテ　ソーユー　ヒョーバンダ（良い婿を当てたといって、そういう評判だ）；オカシーテッテ（おかしいといって）；ダメダシッテ（だめだといって）、ナンシッテタイ（何と言っていたね）

⑤ to+juq+tara>siqtara　コーヤシッタラ（来いやと言ったら）

⑥ to+juq+taqte>cuqtaqte～qtaqte～taqte　ハンブンコデッツッタッテ（半分ずつでと言っても）、スルッタッテ（すると言っても）、ノーイッケツデタッテ（脳溢血でといっても）

⑦ to+juq+（te+wa・ta+qke)>qcja・qtaqke　ジャマモノアツカイッチャ　オカシーケド（邪魔物扱いと言ってはおかしいけど）；ナンタッケナー（何と言ったかなあ）

後の例では、撥音の後で促音が脱落している（ナンッタッケを経ている）。

（4．3）　語末の撥音に助詞「wa・o」が同化する。

① N+wa>Nna　オバーサンナ（お姿さんは）、ショッテ　クンナ　ヤダ（背負ってくるのは）

② N+o>Nno　コシアンノ　スル　シト（漉餡をする人）、オヒナサンノ　シトツグレー（お雛さんをひとつぐらい）

（4．2．5）　文末詞「ja」と前接語との同化

Ca+ja>Cja(R)　ソーキャー（そうかや）、ユーニャー、ユーニャ（言うなや）

（4．4）　その他の縮約

① te+sima->cja-　ヌイチャウンダイ（抜いてしまうのだね）、ワスレッチャッターノー（忘れてしまったよねえ）

㈱　sima-は語幹のみの表示。

② tokoro+（kara・ga)>toqkara・to(q)ka　ジャノフチン　トッカラ（蛇の淵の所から）、ムス　トッカ　ネーンダモノ（燃す所がないのだもの）、フッタトッカ（振ったところが）、ムス　トカ（燃す所が）

後の3例では、tokoro>toqの交替につれて「ga」>「ka」と交替し、有声の促音が生じるのを避けている。

3 アクセント

当方言のアクセントは東京式アクセントである。前橋市方言のアクセントと大差はないので省略する。

4 文　　法

4-1 活用形

(1) 形容動詞（型）の連体形「ノ」、仮定形「ダラ」

ソンナ　ヨーノ　ワケデ（そんな様なわけで）、ラクノ　ワケダッタ（楽なわけだった）；ミキサーダラ　イーケド（ミキサーならいいけど）

(2) カ変動詞「クル（来る）」の未然形「キ-」、「ベ-（意志）」に続く形「クー」

キランネー（来られない）、クベー（来よう）

4-2 助　詞

(1) 目的・場所・方向・時などを表す「に」にあたる形式は「ニ」の他次の様なものがある。

① 「エ」　ドカタエ　デル（土方に出る）、オタクエモ　アンマリ　オウカガイ　デキネンダケド（お宅にもあまりおうかがいできないのだけど）

② 「イ」　オクイ　ネテル（奥に寝てる）、コシゴイ　イレトク（腰籠に入れておく）

③ 前接語末に長音を添加　ウチー　ケール（家へ帰る）、アシー　カジリッツイタリ（足にかじりついたり）、ナツヤスミー　カイスイヨク　イガネー（夏休みに海水浴に行かない）

④ 無形式　イーチ　イッテ（市に行って）、シモンタ　イッテ（下仁田へ行って）、フリガミ　シチャー（振髪にしては）

(2) 連体格「ガ（の）」

人称語・親族語・人名の後の連体格は「ガ」であらわすことがある。

オラガ　ウチモ（俺の家も）、イサチャンガ　ウチ（猪三ちゃんの家）、オラーチノ（私の家の）

最後の例は「ガ」が弱まって長音化した形である。

(3) 逆接「ナクモ（なくても）」

シンパイ　シナクモ　イーカラ（心配しなくてもいいから）、ムカシデ　ナクモ　ネノイー　トキャ（昔でなくても値のいい時は）

(4) 疑問「ガナ（か）」

ドコニ　アルガナ　オセーテ　クレ（どこに有るか教えてくれ）、イクネングレー　ヤッタンダガナ　ソノ　ガッコー（何年ぐらいやったのだか、その学校）

(5)　疑問の意を含む列挙

①　「～ガナ～ガナ（～か～か）」　アオクラノ　ガッコーダガナ　シモンタノ　ガッコダガン　モッテ　キタッタナー（青倉の学校だか下仁田の学校だか持ってきたなあ）

②　「～ガ～ガ（～か～か）」　キンガ　アルガ　ネーガ　ワカラネー（金が有るか無いかわからない）、ドーユー　ワケデ　キューニ　ナクナッタンダガ　ナンダガ（どういう訳で急に失くなったのだか何だか）

(6)　「ノ」の脱落

スミツクニ　イー　トコダッタ（住み着くのに良い所だった）、メタ　イグダッチュー（いくらでも行くのだという）

(7)　「シテ（で）」

ミーンナシテ　ワケテ　クヤー（皆で分けて食えば）

4-3　文末詞

(1)　「イ」

①　助詞＋「イ」　ワケーシワイ（若い衆はどうだね）

②　動詞・補助動詞の終止形＋「イ」　スグ　イグイ（すぐ行くよ）、ナニ　スルイ（何をするね）；ツクッテルイ（作っているよ）、ソー　シトクイ（そうしておくよ）

③　詠嘆形＋「イ」　アスビー　イガイ（遊びに行くよ）、タノマイ（頼むよ）、アスンデライ（遊んでいるよ）、ボチボチ　ヤッテライ（ぼちぼちやっているよ）

④　助動詞＋「イ」　ソーダッタンダイ（そうだったのだよ）、コドモン　トキダイ（子供の時だよ）；ヨカッターイ（良かったよね）、フツーニ　ナッターイ（普通になったよね）

（1．1）　「カ＋イ」　アー　ソーカイ（ああそうかね）、ジョーズジャンカイ（上手だね）

（1．2）　「ヤ＋イ」　ハナスベーヤイ（話そうよ）、イーヤイ（良いよ）、アッタッケヤイ（有ったっけね）、ヘーラネーヤイ（入らないよ）

（1．3）　「ワ＋イ」　モラットクワイ（貰っておくよ）、カタマラナク　ナッチマウチュワイ（固まらなくなってしまうというよ）、フサクデ　ネーチュワイ（不作でないというよ）

(2)　「カ」

アレ　イッパイカー（あれ一杯か）、アルジャ　ネーカ（有るではないか）、ショーワ　ハックネンダッタカ（昭和8・9年だったか）、ワカルモンカ（分かるものか）

(3)　「ガナ」

ナンプングレーデ　イゲルガナ（何分ぐらいで行けるか）、オメーンチガ　ワリーガナ（お前の家が悪いよ）

(4)　「サ」

オセータンサー（教えたのさ）

（4．1）「ワ＋サ」　イマ　カネガ　ネーンダワサー（今金が無いのだよ）

(5)　「デ」

フッタツ　アルデ（2つ有るよ）、アガラシテ　モラウデ（上らしてもらうよ）

(6)　「ナ」

ナンタッケナー（何と言ったかなあ）、ワスレチャッターナー（忘れてしまったなあ）、アレダッチュワーナー（あれだと言うよなあ）、ドノヘンダンベナー（どの辺だろうなあ）、セーカツワ　ラクダッタナ（生活は楽だったな）

（6．1）「カ＋ナ」　ナントカ　ナラネーカナ（何とかならないかな）、キカシテ　クンネーカナ（聞かせてくれないかな）、アレオ　ウタッタンダカナー（あれを歌ったのだかなあ）

（6．2）「ヤ＋ナ」　アレモ　ウメーヤナー（あれも美味いやなあ）

(7)　「ネ」

ダイタイ　ソーダネー（だいたいそうだねえ）

（7．1）「カ＋ネ」　シッテ　イマスカネー（知っていますかねえ）

（7．2）「ヤ＋ネ」　ノリガ　オーイヤネー（糊が多いやねえ）

(8)　「ノ」

ワスレチャッターノー（忘れてしまったよねえ）、ワスレラーノー（忘れるよねえ）、アリャーシネーノー（有りはしないねえ）

（8．1）「イ＋ノ」　フツーニ　ナッターイノー（普通になったよねえ）、タチウスデ　ツイタンダイノー（立臼で搗いたのだよねえ）

（8．2）「ヤ＋イ＋ノ」　デッケーヤイノー（大きいよねえ）

（8．3）「カ＋ノ」　ケントー　シテ　モラエネーカノー（検討してもらえないかねえ）

（8．4）「モノ＋ノ」　ナナカンメダモンノー（7貫目だものねえ）

（8．5）「ヤ＋ノ」　アジガ　ワリーヤノー（味が悪いやねえ）、ネーヤノ（無いやね）

（8．6）「ヨ＋ノ」　サカイメダッタンダヨノー（境目だったのだよねえ）

（8．7）「ワ＋ノ」　ソーダチュワノー（そうだというよねえ）

（8．8）「ン＋ノ」　メニ　ツクンノー（目につくねえ）、ソーユー　コトワ　ユーンノー（そういう事は言うねえ）

(9)　「モノ」

タマガ　デッケンダモノ（玉が大きいのだもの）、ソノクレーダッタンダモノー（その位だったのだもの）、シラネー　ナカジャ　ネーモノ（知らない仲ではないもの）

(10)　「ヤ」

ドーニ　キータヤ（どうに聞いたか）、ノッタッケヤ（乗ったっけか）、シッテルダンベヤ（知っているだろうよ）、ダシテ　クレヤー（出してくれよ）、アスビー　キナヤ（遊びにおいでよ）、ミテ　ミロヤ（見てみろよ）

(10. 1)　「ニャー」(<「ナ＋ヤ」)　バッカ　ユーニャー（馬鹿を言うなよ）

(10. 2)　「キャー」(<「カ＋ヤ」)　ホーリナゲタンジャー　ネーンキャー（放り投げたのではないのか）

(11)　「ヨ」

イー　ヨメゴン　ナルヨー(良い嫁になるよ)、イクラグレーナンダヨ(いくら位なのだよ)、ヨカッタヨー（良かったよ）

(12)　「ワ」

プーット　デルンダチュワ（プーって出るのだと言うよ）

(13)　「ン」

ソレマデ　ビョーキワ　シラナカッタン(それまで病気は知らなかった)、セッカイ　イレル　ワケナン（石灰を入れるわけなのか）、アー　ソーナン（ああそうなのか）

4－3で記した文末詞の相互承接をまとめると次の様になる。

		ワサ	
カヤ			
カナ	ヤナ		
カネ	ヤネ		
カイ	ヤイ	ワイ	
カノ	ヤノ	ワノ	イノ
	ヤイノ		ンノ
			ヨノ
			モノノ

カ＞ヤ＞ワ＞イ・ン・ヨ・モノ＞ナ・ネ・ノ・サの順で下接語の数が少なくなる（5＞4＞3＞1＞0）。デとガナは孤立していて承接がない。

5　表　現　法

(1)　「～シ　スル」

「～」の部分を強調した表現になる。

シンセキジャー　アルシ　スルカラ　ゼンブー　オセーテ　クレテノー（親戚であるものだから全部教えてくれてねえ）、コドモノ　アスビカタモ　カーッテ　クルシ　スルダーノー（子供の遊び方も変わってくるものだねえ）

(2)　「シッテ　ユー」

形式としては「と言って言う」だが、はじめの「シッテ」は「と」の意になっている。

ジブンデ　ヤッテ　ミルシッテ　ソーニ　ユッタイ（自分でやってみると、そうに言ったよ）、ソーダバッカダシッテ　ユッテルンノー（ソーダばかりだと言っているねえ）

(3) 「タッケ」・「タッタ」

回想表現には、疑問の意を含む「タッケ」と詠嘆的回想の「タッタ」がある。

ソーユー　ウタガ　アッタッケヤ(そういう歌があったっけね)；キノドクナ　コトー　シタッタノー(気の毒な事をしたものだねえ)、カッテ　キテ　クレタッタヨー(買ってきてくれたのだったよ)、アーレダキャー　タマゲタッタ(あれだけは驚いたよ)

(4) 「ター」・「ダー」

助動詞「タ」・「ダ」に長音を添えた詠嘆表現がある。

ソンナ　ヨーナ　ウタモ　ウタッターノー(そんな様な歌も歌ったよねえ)、フツーニナッターイノー(普通になったよねえ)；オベータンダーノー(覚えたのだよねえ)、ウチノシノ　オカゲダーイ(家の者達のおかげだよ)

下仁田町青倉字土谷沢の会話

1　自然談話——昔の遊び

話し手　A　赤岡　悟　（男）
B　赤岡しな子　（女）
C　赤岡あさの　（女）
D　赤岡　量平　（男）

A　アスビカタモ　イロイロ　カーッタモンデ　ムカシワ　イーワ
遊び方も　いろいろ　変わったもので、　昔は

ンダノー　オー　スベテノ　アスビガ　マー　ナンチューカ　ヨーチナ
何だねえ、　すべての　遊びが　まあ　何というか　幼稚な

アスビデ　イマダ(1)ラ　カラオケダー　ナンダ(2)チュヨーナ　アー
遊びで、　今なら　カラオケだ　何だというような

コトー　ヤッテ　ウタノ　レンシューモ　スルケド　ムカシノ
ことを　やって　歌の　練習も　するけど、　昔の

ウタチュ　ヤツァー　コドモナンカノ　ウタチュヤツァー　ベシテ
歌という　やつは、　子供なんかの　歌というやつは　総じて

オヤガ　オセータ　ウタデ　ダレカ　ソーユーノ　ウター　シッテル
親が　教えた　歌で、　誰か　そういうの、　歌を　知ってる

シトワ　イネーカナ。　（Bサー。さあ。）　ムカシノ　オームカシノ
人は　いないかな。　昔の、　大昔の

ウター　ツマリ　（Bソーダ。そうだ。）　シトツトヤートカ　マー　ナントカ
歌　つまり　ひとつとや　とか　まあ　なんとか

チュヨーナ　ウタモ　アルダンベシ　エー　マ　ソノホカ　イロイロ
というような　歌も　あるだろうし、　まあ　そのほか　色々

ウタガ　アルト　オモーンダ。　オ(××)　オヒート(3)ノ　オー　ヤリナガラ
歌が　あると　思うんだ。　御手玉の、　を　やりながら

ウター　ウタウトカ　ア　マーリー　ツキナガラ　ソノ　ウタウトカチュヨナ
歌を　歌うとか　まりを　つきながら　歌うとかというような、

イロイロ　ウタガ　アッタト　オモーンダケド
色々　歌が　あったと　思うんだけど

ソーユー　ウター　シトツ　キカシテ　クンネーカイ。　（笑）
そういう　歌を　ひとつ　聞かせて　くれないかね。

B ソーダノ　オラナンカ[4]　バカデサー　ナニモ　オベーテルチュヨーナ
そうだね、　私なんか　馬鹿でさあ、　何も　覚えているというような

コター　ネーケドサ　ジョーリ[5]ダノ　ゲタオ　イロイロ　ナラベテ
事は　無いけどさ、　草履や　下駄を　色々　並べて

アー　ソレー　アレダーノー[6]　ナラベトイチャー　ボーデ
　　それ　あれだよねえ、　並べておいては、　棒で

コーニ　カゾエテッテ　ジョーリ[7]　キンジョ　キンジョ　タマガ
こうに　数えていって　草履　近所　近所　玉が

タンコ　タンコ　イードノ　ハタ　ヨージン　サイタカ　サカヌカ
たんこ　たんこ　井戸の　端　用心　咲いたか　咲かぬか

イマサキ　ソロバン　ミョーミョーグルマニ　テオ　トッテ　ミタラバ
今先　算盤　みょうみょう車に　手を　とって　みたらば

アリャスケ　ウリャスケ　サムライ　ツックノケーシッテ
ありゃすけ　うりゃすけ　侍　つっくのけ　と

ソーイッチャー　(笑)　アレダノ　ソレ　イッポッツ　コーニ
そう言っては　あれだね　それを　一方ずつ　こうに

トッタンダノー。　ソーユー　コトーモ　アレ…。
取ったんだねえ。　そういう　ことも　あれ…。

C デモ　ヨク　オベーテルジャネー。(笑)
でも　よく　覚えているではないか。

B アー　アー　オランカ　アレダイ　ウター　ヘタダカラサ　ンナヨーナ
ああ、　ああ、　私なんか　あれだよ　歌は　下手だからさ、　そんなような

コトデモ　ムカシッカラノー　イーズタエデ　シトツオベーデ
事でも　昔からの　言い伝えで　一つ覚えで

オベーテンダケドサー。　イマジャ　ソンナ　ウター　ウタッテリャー
覚えているんだけどさあ。　今では　そんな　歌を　歌っていれば

ワラーレラー[8]イ。
笑われるよ。

C ソーダーノー。　(笑)　ソレー　ホラ　マーリー　ツクッテモサー
そうだよねえ。　それを、　ほら　まりを　作ってもさあ

マーッタク　マーリノ　ウター　ウタッタリノー。　[Bソー　ソー。
まったく　まりの　歌を　歌ったりねえ。　そう　そう。]

[9]アーオバ　シゲレル　サクライノ　サートノ　アタリ[10]ノ　ユーマグレ
青葉　茂れる　桜井の　里の　あたりの　夕まぐれ

コノ　ヒトカゲ[11]ニ　コマ　トメテー　ヨノ　ユクスエオー
この　ひとかげに　駒　とめて　世の　行く末を

ツクズクトーッテ　ソンナヨーナ　ウタモ　ウタッターノー。
つくづくとって　そんなような　歌も　歌ったよねえ。

B　ソーダノー。　ソンナヨーナ　ウター　ミンナ　ウタウンダイ。
そうだねえ。　そんなような　歌を　皆　歌うのだよ。

C　ノー　マサツラガ　[B ンー。うん。]　コドモト　コー　ワカレル(02)　トコノー　[D ソー。そう。]
ねえ、　正行が　子供と　こう　別れる　ところをねえ、

ウター　ウタッテサー　ヘーナンテ　コドモニノー。
歌を　歌ってさあ、　「へー」なんて　子供にねえ。

A　ソーユーフーナ　ウター　イマー　ナンダーノー　メズラシクッテ　[C ンー。ううん。]
そういうふうな　歌は　今は　なんだよねえ　珍しくて

ダレモ　キータ　コトワ　ネーヤノー。
誰も　聞いた　事は　無いやねえ。

C　ソーダノー。イマー　カラオケバヤリデノー。
そうだねえ。今は　カラオケばやりでねえ。

A　ムカシャ　ムカシャ　ヨク　ウタッ　ウタッタンダケド。
昔は　昔は　よく　歌ったんだけど。

C　マー　ハナサキミナトダトカサー　マー　アレダー　アノ　シツレンシタヨーナ
まあ、　「花咲き港」だとかさあ、　まあ　あれだ、　あの　失恋したような

ウタダトカノー　イロイロノ　ウター　ウタウンデ
歌だとかねえ、　色々の　歌を　歌うので

コンナ　トショリデモ　ソーユー　ウター　イッションナッテ
こんな　年寄りでも　そういう　歌を　一緒に　なって

オベールンガ　イソガシーヤーノ　コンダー。(笑)
覚えるのが　忙しいやね、　今度は。

B　ナカナカ　オベーランネーヤイ。
なかなか　覚えられないよね。

C　ソーダヨ。　トシ(××××)　ンーナ　チョーシッパズレニ　ナッタリノー　ンーナ
そうだよ　そんな　調子はずれに　なったりねえ、　そんな

オンチノンナー　ヨセ　オセ(03)ナンテ　ユワレテ。
音痴の者は　よせ　よせなんて　言われて。

B　イマー　カラオケナンチュンガ　アルカラ　ジブン　シトリデ　ウ(××)
今は　カラオケなどというのが　あるから　自分　ひとりで

ウタウヨージャ　ネー　ナカナカ　ソレニ　アワセナクッチャナンネーカラノー
歌うようでは　ない。　なかなか　それに　合わせなくてはならないからねえ。

[C アワセナクッチャナンネーモンノー。合わせなくてはならないものねえ。]　ナカナカ　なかなか

サーギダイ。(14)　[ᶜソーダヨ。そうだよ。]　リョーヘーサンナンカー
大変だよ。　　量平さんなんかは

イロイロ　ムカシノ　シター　シッテルダンベヤイ。
色々　　昔の　　人は　　知っているだろうよ。

A　カ　カ　カ　カ　カゾエウタニャーサー。
数え歌にはさあ。

C　リョーチャンナ(15)　シッテラーヤ(16)。　ムカシノ　ウター。
量ちゃんは　　知っているよ。　　昔の　　歌を。

A　シッテルダンベヤ。　ソノー　[ᴰシラネーサー。知らないさ。]　カゾエウタデサー
知っているだろうよ。　そのう、　　　　数え歌でさ、

イチバン　ハジメガ　ナントカ　イチノミヤトカ　ナントカチュヨーナ
一番　　初めが　　何とか　　一の宮とか　　何とかという様な

ウタガ　アッタッタケド(17)　ソーユー　ウター　シッテルダンベヤ。
歌が　　あったものだけど　そういう　歌を　　知っているだろうよ。

シトツ　シトツー　(笑)　[ᶜリョーチャンナー　ジョーズダヨ。量ちゃんは　上手だよ。]
ひとつ　ひとつ

キカシテ　クンネーカナ。　ジョーズダイ。　(間)　ヨク　ソーユ
聞かせて　くれないかな。　上手だよ。　　よく　そういう

ウター　ムカシ　キータ　コトガ　アッタッタケード　コドモノ　オ
歌を　　昔　　聞いた　ことが　あったものだけれど　子供の

オモイデニ　シトツ　ソーユー　ウター　アー　ナニカナ
思い出に　　ひとつ　そういう　歌を　　何かな

ダレカ　シッテル　シター　イネーカイ。
誰か　　知ってる　人は　　いないかね。

(注

(1)　「ダラ」は、「ダ」の仮定形。

(2)　「～ダ　～ダ」で「～だとか～だ」の意。例示的に列挙する。

(3)　「オヒート」は、お手玉。

(4)　自称は、古くは、男女とも「オラ」である。

(5)　「ゾーリ」の語頭音は口蓋化している。

(6)　「アレダーノー」は、「アレダノー」にくらべて詠嘆的表現である。

(7)　以下、「ツックノケー」まで節をつけて歌う。「ジョーリ　キンジョ　キンジョ」は、「ぞうりが並んで」の意。「イマサキ　ソロバン」は、「これから先数を数える」の意。「ツックノケー」は、「つき出して」の意。最後の言葉でぞうりを抜いて取る。

(8)　「ワラーレラーイ」は、「ワラーレル（笑われる）」の詠嘆形「ワラーレラー」に、丁寧の意を表す文末調「イ」が後接したもの。

(9) 以下、「ツクズクトー」まで節をつけて歌う。

(10) 正しくは「ワタリノ」であるが、民間語源による解釈がおこなわれて「アタリノ」になった。

(11) 正しくは「シタカゲニ」であるが、上と同じ理由で「ヒトカゲ」になった。

(12) 落合直文作詞、奥山朝恭作曲の「桜井の訣別」。正成（まさしげ）がその子正行（まさつら）と別れる場面を歌ったもの。

(13) 「ヨセ　ヨセ」と言うところが、第2番目の半母音〔j〕が弱まって脱落した。

(14) 「サーギ」は「騒ぐこと」の意ではなく、「大変なこと」の意。

(15) 「リョーチャンナ」は、「リョーチャンワ」の連声形。

(16) 「シッテラー」は、「シッテル」の詠嘆形。

(17) 「タッタ」は、回想的過去。

2　場面設定の会話

話し手　A　赤岡　一正　（男）
　　B　赤岡あさの　（女）

見送り

A　キョーワ　コンナダシー　アレダナー　クモッテルシサー　マー
今日は　こんなだし　あれだなあ，　曇っているしさあ、　まあ

ツリニデモ　イッテ　クベート　オモーンダケドサー　マー　テンコーモ
釣にでも　行って　来ようと　思うのだけどさあ、　まあ　天候も

シンパイダカラ　アマグワ　ドコニ　アルンダンベナー。
心配だから　雨具は　どこに　あるのだろうなあ。

B　ソーダノー　イツモノ　トコニ　アルト　オモーンダケド　イーヤイ
そうだねえ、　いつもの　所に　あると　思うのだけど　いいよ

メッケテ　ヤラーイ。
探して　やるよ。

A　ジャー　イッテ　クラーナー。
では　行って　くるよ。

B　ソーカイ。　ジャーサー　コンナニ　テ　ソラモヨー　ワリーシ　マー
そうかね。　ではさあ、　こんなに　××　空模様が　悪いし　まあ

シンパイダケド　シトッキリ　イッテ　ツッテ　キナイ。
心配だけど　一時　行って、　釣って　おいで。

A　ンー　マー　アンダナ　クモッテル　トキノ　ホーガ　アレダナ
うん、　まあ　何だな、　曇っている　時の　方が　あれだな、

ヨク　アレダヨ　アノー　サカナモ　ツレルンダヨ。　アノー　ツリザオモ
よく　あれだよ、　魚も　釣れるのだよ。　釣竿も

スイメンニ　ウツラナクッテ。
水面に　　うつらなくて。

B　アー　ソーカイ。　マー　イマノウチワサー　フッテモ　キネーシ　スルカラ　イーケド
ああ、　そうかね。　まあ　今のうちはさあ、　降っても　来ないし　するから　いいけど

アメデモ　フリャーサー　マタ　イワモ　スベルシ　シンパイダカラノー
雨でも　　降ればさあ、　また　岩も　　すべるし　心配だからねえ、

ナル　ナルベク　ハヤク　ケーッテ　キタ　ホーガ　イーヨ。　ジャー　イッテ
××××　なるべく　早く　　帰って　　きた　方が　　いいよ。　では　　行って

キナイノー。
おいでねえ。

A　ンー　ナルベク　ハヤク　マー　カエッテ　クルヨ。
うん、　なるべく　早く　　まあ　帰って　　くるよ。

B　ナンタッテ　ボーズブチワサー　イワ　イワバッカダカラ　イワニ
何といっても　坊主淵はさあ　　××××　岩ばかりだから　　岩に

スベラネーヨーニノー。
すべらないようにねえ。

A　マー　ダイジョーブ　ダイジョーブ。　マー　シンパイ　スルナイ。
まあ　　大丈夫　　大丈夫　　まあ　　心配　　するなよ。

ジャー　イッテ　クライ。
では　　行って　くるよ。

B　ソーカイ。　ジャー　イッテ　キナイノー。
そうかね。　では　　行って　おいでねえ。

迎　え

A　イマ　カエッタヨ。
今　　帰ったよ。

B　アー　ソーカイ。　ヨク　ハイク　カエッテ　キラレタノー。
ああ　そうかね。　よく　早く　　帰って　　こられたねえ。

A　ミテ　ミロヤ。　コンナニ　タクサン　トレタンダ。
見て　みろよ。　こんなに　たくさん　取れたのだ。

B　マー　ホンニサー　オーキーノガ　トレタ　　コリャー。　ヨカッタノー。
まあ　本当にさあ　大きいのが　　取れた、　これは。　　良かったねえ。

（ᴬダケドサー…／だけどさあ…）アユモ　ヤマメモ　イルヨ。
鮎も　　山女も　　いるよ。

A　ダケドサー　　アメデサー　カラダガ　ピ　ピショピショニ　ナッチャッタンダヨ。
だけどさあ、　雨でさあ、　身体が　　××　びしょびしょに　なってしまったのだよ。

[Bアー。／ああ。] ナニカ　キガエデモ　ダシテ　クレヤー。
何か　着替えでも　出して　くれや。

B　アー　ソレヨリ　キ　サキニサー　オフロイ　ハインナイ。　ユー
ああ、　それより　　先にさあ　お風呂へ　お入りよ。　湯を

ワカシトイタカラ。
わかしておいたから。

A　ジャー　フロイデモ　ヘールカナー。
では　風呂へでも　入るかなあ。

B　ジャー　ソノー　ユイ　ハイッテル　ルスニサー　サケー　サケデモ　ノムヨーニ
では　風呂に　入っている　間にさあ、　酒でも　飲むように

サカナニ　アレダヨ　イマ　ツッテ　キタノー　シオヤキカ　フライニ　シトカーノ。
肴に　あれだよ　今　釣って　きたのを　塩焼きか　フライに　しておくよね。

A　ソーダノ　シオヤキノ　ホーガ　ヨカンベー。
そうだね、　塩焼きの　方が　いいだろう。

B　ジャー　ソー　シトクイ。
では　そう　しておくよ。

3　吾妻地方の方言

調査地点　吾妻郡六合村入山字世立

調査員　中條　修
同補助　山本由平
話　者　山本きそ　女（明治44年生）
山本清司　男（昭和28年生）
山本　栄　男（明治37年生）
山本武男　男（明治44年生）
山本つう　女（明治44年生）
山本とく　女（明治41年生）
山本とわ　女（明治38年生）
山本直義　男（明治44年生）
山本なか　女（昭和２年生）
山本はん　女（明治44年生）
山本由平　男（昭和５年生）

六合村の概観

山　本　清　司

1　地形・地質等

六合村は群馬県の西北端にあり東経138度46分、北緯36度33分に位置し、東は中之条町西は草津町、南は吾妻町および長野原町に接し北は長野県下高井郡山の内町に接している。東西20km南北23km、面積は202.38km²で、そのうち90%は山林と原野でしめられている自然郷である。標高は低いところで600m、山岳となると2,000mにも達する。

地質は、石英質両輝岩、安山岩等で形成されていて土壌には浅間山及び白根山の火山灰の影響を受けた黒色土が多く、一部には砂質土壌もあり、耕地が散在している。

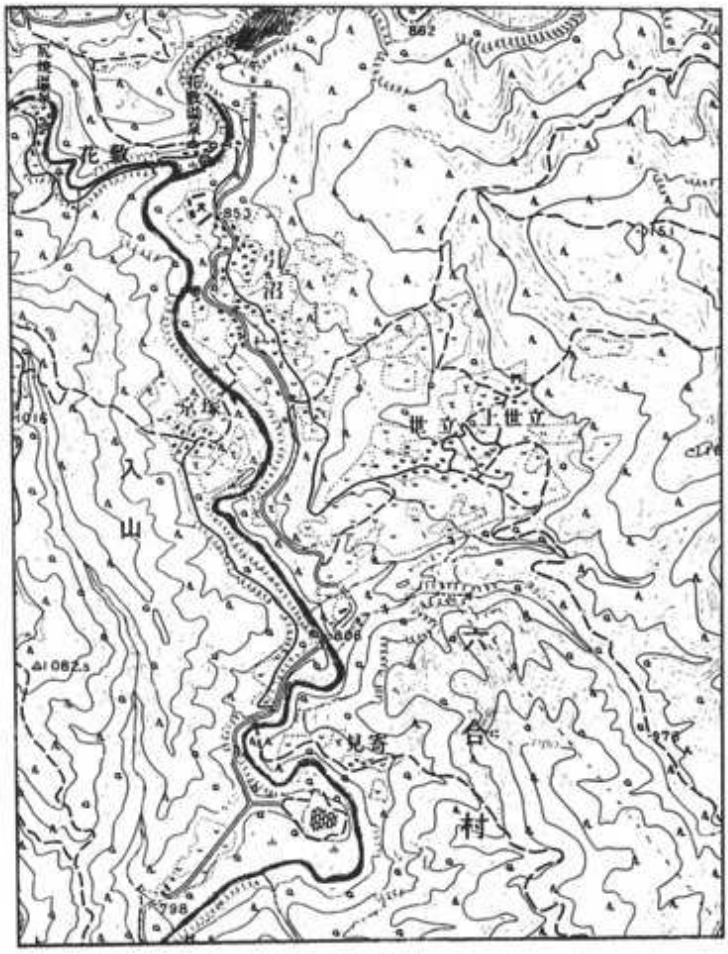
気候の面では、高冷降雪地帯に属しており融雪期は、一部の北面高冷急斜地の4月中旬を除き3月上旬である。

気温は、年平均気温12°C程度であり、年間降水量は1,300mm 降雪量は150～200cm程度である。

標高が高く地形が複雑なため季節的な変化は著しく、特に寒気は厳しい。

村の真中を流れる白砂川は、各支流を合して発電等に利用され地域の産業に寄与している。

平地は高所地及び河川流域にわずかにあり深い渓谷には、いくつもの温泉（花敷、尻焼、応徳、湯の平）が湧きでている。閑静な落



六合村世立

ち着きのある温泉であり、春の若葉秋の紅葉と四季おりおりの景観をみせてくれ露天風呂に入りながらこの美しい景色を楽しむことができる。

今回の方言調査を実施した世立地区は役場所在地、小雨から北へ7㎞の地点で花敷、尻焼温泉に接している。

歌人若山牧水で有名な牧水コースの基点の集落として、また木曽義仲が生まれた、或は居たという伝説があるなど数多くの民俗資料（民話・伝説等）が残されている集落である。

世立の家並み

2　人　　口

人口は昭和60年10月に実施された国勢調査によると、2,228人である。六合村の人口の推移をみると、大正9年に第1回の国勢調査が行なわれ、その時の人口は2,597人であった。その後年々増加し、特に群馬鉄山との関係もあって、昭和30年には4,383人となった。伸び率は1.7倍で同年次の群馬県人口の伸び率1.7倍とほぼ等しかった。

群馬鉄山より産出される鉄鉱石により鉱業の発展が期待されたが、同37年～40年にわたり閉山という事態に直面し、従業員及びその家族の転出により甚しい過疎現象があらわれ、同45年の国勢調査では2,580人となっている。

このため、六合村の人口構成はいわゆるひょうたん型といわれる老齢人口と幼年人口の多いものになってしまい、昭和45年には過疎地域に指定されるに至った。

最近では、低成長時代の到来により、人口流出傾向にブレーキがかかってきているが、これは交通機関の発達により、通勤圏が拡大しまた村内にも事業所が増加しつつあることによって生じた現象である。

若年者の定住化の傾向は進みつつあ

表1　六合村の人口推移

	総人口	男	女	総世帯数
大正9年	2,597	1,322	1,275	539
〃 14年	2,621	1,309	1,312	536
昭和5年	2,630	1,332	1,298	523
〃 10年	2,708	1,356	1,352	541
〃 15年	3,107	1,589	1,518	590
〃 22年	3,736	1,925	1,811	679
〃 25年	3,748	1,878	1,870	703
〃 30年	4,383	2,361	2,022	783
〃 35年	3,530	1,705	1,822	737
〃 40年	3,091	1,570	1,521	691
〃 45年	2,580	1,257	1,323	623
〃 50年	2,353	1,154	1,199	624
〃 55年	2,245	1,130	1,115	640
〃 60年	2,228	1,157	1,071	699

るが、近年は出生率も低下しているので人口の減少傾向は現在も続いており、高齢化もすすんでいる。

今後も六合村の人口は2,000人を上回る規模で安定することが予想される。

世立地区についてはここ10年間わずかな変化があるだけである。

3　沿　　革

六合村は吾妻郡各町村と同じく、先史時代から人が住んでいたことが、熊倉・広池遺跡及び各地の出土品から推定される。

徳川時代に真田氏の領地となり、のち幕府の直轄地となり、その後一部地域は分割により旗本領となり明治に至っている。

明治の廃藩置県により岩鼻、群馬、熊谷県となり、明治９年以降は群馬県となった。

明治22年新しい町村制施行に伴い草津村と六合村が合併し、草津村と称し役場を小雨に置いたが、当時の経済事情の差異から明治33年７月１日草津村を廃し、大字６カ村（赤岩、日影、太子、小雨、生須、入山）を以って六合村制を施行して現在に至っている。

六合の呼称は古事記の一節〝天地四方を以って邦となす。の国造りの由来からきていると云い伝えられている。

4　産　　業

六合村はかつて農業と木工品の製作及び木炭生産が主な産業であった。

とくに入山地区では「曲げもの細工」を中心とした仕事に従事するものが多かった。

夏は農業、農閑期の冬場には、豊富な森林資源を生かした曲げもの細工に代表される木工品の製作を行った。製作された木工品はメンパ、シャモジ、ヒシャク等で日本全国へ送りだされていった。

今に残る炭焼き窯

戦後の産業構造の変化により六合村の様子も著しく変った。

農業、工業にかわって急速に伸びをみせたのがサービス業である。長い間農林業を主体とした産業から観光開発に伴うサービス業主体の産業に変化している。

六合村の観光の中心は野反湖、白砂川沿いにある花敷、尻焼、湯の平、応徳温泉である。

野反湖は、標高1,500mをこえる高原であり夏は非常に涼しく、高山植物に恵まれ、キャンプ場としても有名である。

花敷、尻焼、湯の平、応徳温泉はもの静かで落ちつきのある温泉であり、春の新緑と秋には全山が見事に紅葉し露天風呂に入りながら、景観を楽しむ観光客が多い。。

本村の観光地を訪れる人々は年々増加しており今後の六合村の中心的な産業になることが予想される。

5 交　　通

六合村は多くの山地、白砂川の渓谷などの地形的な制約を受けているため、村内の交通事情に大きな問題がある上に道路が行き止りで交通の便には恵まれていなかった。

六合村に通ずる主な道路は、①中之条町から暮坂峠をこえて小雨にぬける道路。②長野原町から白砂川沿いに小雨入山に通ずる道路。③草津町から荷付場へ通じ、白砂川沿いの道路と合流する道路である。

中之条・暮坂線は、牧水の歌碑があり牧水コースと呼ばれ観光コースとなっている。

②③の道路は現在国道292号線となり道幅の拡張工事が行なわれ六合村の一大観光地である野反湖まで全舗装でいけるようになった。

この結果入山から国鉄長野原駅まで自動車で30分程度になり、かつての徒歩時代に比べると時間的距離が大幅に短縮され通勤範囲も拡大した。

鉄道は昭和20年に群馬鉄山の設置した鉄鉱石輸送鉄道が長野原から太子まで開通し、昭和29年から旅客輸送も行われた。しかし、群馬鉄山の閉山により昭和45年廃止されバス輸送に切りかえられた。交通手段として現在では路線バスと自家用車が重視されている。

6 教　　育

明治5年に「学制」が発布されるまでの庶民の教育機関として寺小屋があった。

寺小屋は農商工等の庶民の子弟が文字通り寺へ通って僧侶から「よみ」「書き」「そろばん」の実用的な知識を授けられたのが始まりで、江戸末期になり僧侶のほかに武士、医師、神官、村の有識者なども寺小屋を開いて子弟の教育をするようになった。

わが六合村では、赤岩の湯本家（湯本明敬、その子の俊斉、彦斉、俊斉の子の省斉）が医者であるとともに寺小屋の師匠としてすぐれた指導者であった。

明治に入り「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんと期す」の学制が発布され本村では明治7年1月に日影小学校が最も古く開校された。

以後、大正、昭和の時代の流れの中で名称変更や統合がなされ、現在では小学校２校（分校２校）中学校２校となっている。

今回の調査入山地区は現在の入山小学校の前身である花鋪学校が明治９年８月24日に開校された。その後多くの移転を重ね現在に至っている。

7　民　　俗

六合村の民俗については「秋山紀行」において紹介されているが、群馬県内において特色ある民俗伝承をもつ地域であり、とくに今回の調査の世立地区は落人伝説等をもつ山村である。

昔から農業と曲げものが主産業であったため、それらにまつわる風習や信仰が多く見られた。しかし、高度経済成長により農山村の変貌は著しくそれまであった習慣や風習、年中行事も失われるものが多くなっている。

本村には、昔から民話、伝説が多く伝えつがれてきている。これらの継承は今なお続けられているところである。

年中行事としては、「どんどん焼」「鳥追い」「天神講」「盆行事」「十日夜」「えびす講」「屋敷稲荷」「十五夜」「春祈禱」等は各地で続けられている。

習慣で今でも伝え残されている入山世立、引沼には宵の山本、明の山本の区別がある。

山本の一家（いっけ）の先祖が戦いから帰ってきたが一方の山本は大晦日の宵のうちに着いて門松を立てることができた。しかし一方の山本は、元旦のあけ方に帰りついたので門松をたてることができなかった。

そこで宵の山本の方は門松をたてるが、明の山本の方は門松を立てないのだという。とくに、世立、引沼は明の山本が多く今でも門松をたてていない。

8　文　　化　　財

六合村の文化財は、県指定物件２件、村指定物件４件である。村内には今後指定すべき重要な文化財が数多くあるので調査をすすめているところである。

今回調査した世立地区には県指定天然記念物入山世立のしだれ栗がある。

目通り3.1m、根元廻り5.1m、高さ7.3m、枝張り東西5.9m南北7.7m、主幹、大枝、小枝は曲りくねって雷光形の奇形を呈し、太い枝は傘を開いたように広がり、末端は地上に向かってたれ下がり壮観を呈している。樹齢数百年、樹勢の旺盛なること、おどろくばかりである。

しだれ栗は、栗の原種が突然変異により分化新生した変種である。この栗は土地の人びとには「テントウグリ」と呼ばれ、テントウサマ（太陽）の休みの場として崇められて保存されてきた。

六合村世立の方言

中　條　　修

1　はじめに

県の北西部の山間地域に位置する吾妻郡六合村方言は、県内の他の諸方言と同様、全体的には音韻・アクセント・文法・語彙とも西関東的方言の特徴を有する。しかし、山間辺地の方言の多くがそうであるように、六合村方言も平野部の方言とは異なったいくつかの特徴をもっている。例えば、共通語の「撥音＋有声子音」の構造に、方言の「促音＋有声子音」の構造が対応するのがその一例であり、「ベー」が助動詞の「ダ」に接続する場合は、「ダッベー」のようになる。また、有名な助詞「ムシ」も健在で、自然談話にもよく現れる。

六合村はまた、その北側が長野県との県境いをなし、古くから山道越えに交流が行なわれており、言語的にも似通った点が認められる。

2　音声・音韻

六合村方言の音韻は、基本的には東京語と同じ表日本方言音韻の中性弁（ジとズのみを区別する「二つ仮名」）の体系である。その拍表を示せば、次の通りである。

表1

u	o	a	e	i	ju	jo	ja	(je)	wa	we
hu	ho	ha	he	hi	hju	hjo	hja	—	—	—
gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja	—	gwa	—
ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja	—	kwa	—
—	do	da	de	—	—	—	—	—	—	—
—	to	ta	te	—	—	—	—	—	—	—
cu	co	ca	ce	ci	cju	cjo	cja	—	—	—
zu	zo	za	ze	zi	zju	zjo	zja	(zje)	—	—
su	so	sa	se	si	sju	sjo	sja	(sje)	—	—
ru	ro	ra	re	ri	rju	rjo	rja	—	—	—
nu	no	na	ne	ni	nju	njo	nja	—	—	—
bu	bo	ba	be	bi	bju	bjo	bja	—	—	—
pu	po	pa	pe	pi	pju	pjo	pja	—	—	—
mu	mo	ma	me	mi	mju	mjo	mja	—	—	—
N	Q	R								

この音韻体系は、東京語に比べて次の点で異なる。

(1) いわゆるガ行鼻音 /ŋ/ ［ŋ］の拍に欠ける。

(2) 合拗音 /gwa/ グァ、/kwa/ クァの拍が認められる。

(3) /co/ ツォ、/ca/ ツァ、/ce/ ツェの拍がある。

(4) /zje/ ジェ、/sje/ シェのほかに /je/ イェ、/we/ ウェの拍が認められる。

以下、主な音韻上の特徴について述べる。

2-1 母　音

(1) /i/ と /e/

/i/ イは、東京語のイと同じかまたはそれより口の開きがやや広い音として実現される。また /e/ エは、概して東京語のエよりも口の開きがやや狭い。このため、方言のイとエはしばしば混同を起こす。特に単独の場合の語頭のイは顕著で、エと混同する傾向がきわめて強い。

イ→エ　エキ〈息〉、エッセン〈一銭〉、エツツ〈五つ〉、エリヤマ〈入山〉、エグ〈行く〉、エタム〈傷む〉、エバル〈威張る〉、エレル〈入れる〉、エッペー〈いっぱい〉

一方、エがイと混同する例は、イに比べて少ないが、概して母音ア・ウに接続する場合に起こる。

エ→イ　イライ〈偉い〉、ナマイ〈名前〉、ウイ〈上〉、ウライ〈裏へ〉

このイとエの混同は、単独の場合ばかりでなく、子音と結合した拍でも観察できる。

ネンジン〈人参〉、メッケル〈見つける〉、メメズ〈みみず〉、エベス〈恵比寿〉

東京語のエにあたるところに、半母音［j］を伴った［je～ʲe］イェが現れることがある。

イェンギ〈縁起〉、イェライ〈たくさん〉、イェーテ〈相手〉、イェー　コビキ〈良い木こり〉

(2) /u/ と /o/

/u/ ウと /o/ オの交替は、母音単独の場合ばかりでなく、子音と結合した拍でも盛んに行なわれ、当方言の特徴の一つに数えられる。

ウ→オ　オソ〈嘘〉、オボギ〈産着〉、オマ〈馬〉、ヨーハン〈夕飯〉、フヨ〈冬〉、ソソ〈裾〉、ノソム〈盗む〉、オンナショー〈女衆〉、ノグ〈脱ぐ〉、モジナ〈むじな〉

オ→ウ　ウラー〈俺は〉、ウヤ〈親〉、ユル〈夜〉、～クト〈～こと〉、アスブ〈遊ぶ〉、アスコンツケー〈あそこのところへ〉、チューット〈ちょっと〉、フシクサ〈乾し草〉、ブチ〈墓地〉、クダムン〈果物〉、フルシキ〈風呂敷〉

東京語のオにあたるところに、半母音［w］を伴った［wo～ʷo］ヲが現われることがある。特に助詞の「を」はヲとなる傾向が見られる。

ゴッツォーヲ　クッタ〈御馳走を食べた〉

(3) 母音の無声化

母音は本来有声音であり、声帯の振動つまり「こえ」を伴う。しかし、東京語などでは前後の無声子音等の影響で、母音はその口構えだけで「こえ」となって響かない場合がある。このように母音が声帯の振動を伴わず、無声音として発音される現象を、「母音の無声化」という。この母音の無声化は、近隣の諸方言と同様、盛んであり、次のような原則が認められる。

1) 狭い母音［i］イと［ɯ］ウが、無声子音にはさまれた場合。無声子音はカ、サ、タ、ハ、パの子音をさす。

キク［kiku̥ɯ］〈菊〉、クサ［ku̥ɯsa］〈草〉、アシタ［aʃita］〈明日〉、スソ［su̥ɯso］〈裾〉、チケー［tʃike:］〈近い〉、ツキ［tsu̥ɯki］〈月〉、フシ［Φɯʃi］〈節〉、イップク［ippu̥ɯkɯ］〈一服〉

2) 無声子音と結合して語末、文末に立ち、かつアクセントの山がこない時の［i］と［ɯ］。

アキ［aki̥］〈秋〉、ハシ［haʃi̥］〈箸〉、カツ［katsu̥ɯ］〈勝つ〉、〜デス［〜desu̥ɯ］〈〜です〉、〜マス［masu̥ɯ］〈〜ます〉

(注) ̥印は無声化することを示す。

2-2 連母音

連母音アイ［ai］、オイ［oi］、ウイ［ɯi］などが融合して長音化する現象は、きわめて盛んであり、東京語と規則的な対応を示す。この融合が起こるのは，1単語と認められる名詞、動詞、形容詞などで、主に生活語として使用頻度の高い語の内部に認められる連母音である。

アイ→［e:］エー　品詞や活用形およびそれが現れる位置などの違いに関係なく、原則として全て融合する。

エーダ〈間〉、ケーコ〈蚕〉、セーフ〈財布〉、デージ〈大事〉、ショーベー〈商売〉、ヘー〈灰〉、ミテー〈見たい〉、ヘール、ヒャール〈入る〉、アケー〈赤い〉、ナゲー〈長い〉、イッペー〈いっぱい〉

なお、ワイは［we:］ウェーまたは［e:］エーとなる。ヤイは［e:］エーのみで［je:］イェーとはならない。

イエーゴト〈祝い事〉、ウェータ〈沸いた〉、ユウェー、ユエー〈弱い〉；ハエー〈早い〉

［アエ→［e:］エー　アイと同様であるが、エ＞イの変化を経てエーと融合長音化する傾向が見られる。

ゲーロ〈蛙〉、メー〈前〉、ヘー〈蠅〉、ケール〈帰る〉、コセール、コシェール〈こしらえる〉

このエーは、一般にはガイロ、ハイ、カイルのようアイに回帰する。

オイ→［e:］エー　オイで終わる3拍以上の形容詞に見られるが、ときに［oø〜oy］のように実現されることがある。文字化文中ではこれを仮にオエ〜オイのように表記したが、［oe］、

[oi] と区別するために、そのつど注記した。

ホセー〈細い〉、フテー〈太い〉、ヒレー〈広い〉、ヤッコイ [jakkoý]〈柔らかい〉、シーッロエ [ʃi:rroø]〈白い〉、クルイ [kɯruɯy]〈黒い〉

オエ→[e:]エー　　主に4拍の一段活用動詞にこの融合が見られる。

キケール〈聞こえる〉、オベータ〈覚えた〉

ウイ→[i:]イー　　ウイで終わる3拍以上の形容詞に多く見られる。

ヒキー〈低い〉、サビー〈寒い〉、ワリー〈悪い〉

「結」（共同作業）はイーともエーとも発音される。また、「手拭」はテネゲーである。

エイ→ [e:]エー　　品詞やそれが現れる位置に関係なく原則としてすべて融合する。

エーセー〈衛生〉、ヘータイ〈兵隊〉、メージ〈明治〉

イエ→ [e:]エー　　エーと実現するのが一般だが、ときにイーとなることもある。

ケール〈消える〉、オセール〈教える〉、メータ〈見えた〉、ネータ〈煮えた〉、ヘーメシ〈稗めし〉、ヘーダンゴ〈稗だんご〉

アウ→ [o:]オー　　ワ行四段動詞にのみ現れる。

チゴー〈違う〉、ツコー〈使う〉、ナロー〈習う〉、モロー〈貰う〉

ただし、2拍の動詞はモー〈舞う〉のように融合するものと、カウ〈買う〉、ハウ〈這う〉のように融合しにくいものとに分かれる。

こうした融合現象は、単語の内部ばかりでなく、名詞に付属語が接続した場合にも起こる。

(1)　助詞「は」が接続した場合

wa〈は〉は半母音 [w] が脱落し、前接する名詞語末の母音と二次的結合をし、融合する。

(ア)　語末母音 [−u、−o、−a]＋ [wa]＞ [−a:]　　アイツァー [aitsa:]〈あいつは〉、コカー [koka:]〈ここは〉、コンダー [konda:]〈今度は〉、ヤマー [jama:]〈山は〉、サカナー [sakana:]〈魚は〉

(イ)　語末母音 [−e、−i]＋[wa]＞[−ja]　　ユッビャー[jɯbbja:]〈昨晩は〉、アリャー [arja:]〈あれは〉、アキャー [akja:]〈秋は〉、マチャー [matʃa:]〈町は〉

(2)　助詞「へ」が接続した場合

(ア)　語末母音 [−o、−a、−e]＋[e]＞[e:]　　アスケー [asüke:]〈あそこへ〉、ドケー [doke:]〈どこへ〉、ヤメー [jame:]〈山へ〉、ヤネー [jane:]〈屋根へ〉、コザメー [kodzame:]〈小雨へ〉

(イ)　語末母音 [−i]＋ [e]＞ [i:]

マチー [matʃi:]〈町へ〉、ヒガシー [çigaʃi]〈東へ〉

(3)　助詞「を」が接続した場合

(ア)　語末母音 [−u、−o、−a、−e] に接続する場合は、原則として助詞 [o] が脱落し、前

接する名詞語末の母音を長音化して、その長さを償う。

ミズー［midzüː］〈水を〉、マドー［mado:］〈窓を〉、クルマー［kuruma:］〈車を〉、ホネー［hone:］〈骨を〉

(イ) 語末母音［—i］に［o］が接続すると拗音化し、［—juː］と実現する。これは母音オ＞ウの変化を介したものであるが、この融合はきわめて盛んで耳立ち、当方言の特徴である。

キュー〈木を〉、ヒュー〈火を〉、ニュー〈荷を〉、イシュー〈石を〉、メシュー〈めしを〉、イェンギュー〈縁起を〉、マッチュー〈マッチを〉、スミュー〈炭を〉、ハオリュー〈羽織を〉

2-3 半母音

(1) /j/

/ju/ ユはイと混同されることがある。

イビ〈指〉、マイゲ〈眉毛〉、オツイ〈お汁〉、オユエー〈お祝い〉

シ、ジなどのイ段直音を、シュ、ジュと拗音化する傾向はきわめて顕著で、当方言の特徴といえる。

シュンボー〈辛抱〉、シュンペー〈心配〉、シュンシュー〈信州〉、シュンダ〈死んだ〉、フシュン〈普請〉、アサメシュ〈朝飯〉、ムシュ〈むし（助詞）〉、ジューサン〈じいさん〉、オヤジュ〈親父〉、ショージュ〈障子〉

このイ段拗音化の傾向は、その他のイ段音にもしばしば観察される。

ヘーキュン〈平均〉、デキュル〈出来る〉、モチュ〈餅〉、ニュンゲン〈人間〉、ニュ〈荷〉、ミュンナ〈みんな〉

一方、拗音シュ、ジュの直音化も他方言同様に認められる。

シッカ〈出荷〉、ゲシク〈下宿〉、ジクス〈熟す〉、シジツ〈手術〉

(2) /w/

前後を母音にはさまれた［w］音は脱落し、母音同士が融合長音化する傾向が強い。特にaにはさまれた［w］は脱落するのが普通である。

アーモチ〈粟餅〉、カーラ〈瓦、川原〉、サーギ〈騒ぎ〉、ターラ〈俵〉、ナートビ〈縄飛び〉、カーッタ〈変った〉、サール〈触る〉

オサール〈教わる〉、ヒチャー〈7羽〉、ムギャーラ〈麦わら〉

このような［w］音の脱落による母音の融合長音化は、名詞と助詞「は」の接続部分にも認められるが、これについては前節の連母音の項で述べた。

この方言には /we/ ウェの拍が認められる。これは連母音ワイが融合した結果生じたもののほかに、次のような例が挙げられる。

ウェータ〈沸いた〉、ユウェー〈弱い〉（以上、既出例）、カウェ〈買え〉、クーウェル〈食える〉、トウェー〈遠い〉

2-4　子　音

(1)　/g/ と /k/

ガ行子音は、語頭では破裂音［g］。語中では破裂音または摩擦音［g～ɣ］で鼻音［ŋ］はほとんど聞かれない。

ゴゴゴジ［gogogodʒi］〈午後5時〉、ショーガッコー［ʃoːɣakkoː］〈小学校〉

カ行子音が東北方言のように、語中で濁音化する傾向はないが、語的には認められる。

イグ〈行く〉、サンガショ〈3カ所〉、ゲーロ〈蛙〉

クァ、グァの合拗音の拍が認められ、次のような語に観察できる。

クァジ〈火事〉、クァシ〈菓子〉、クァンノンサン〈観音さま〉；グァンタン〈元旦〉、マングァ〈馬鍬〉

(2)　/z/ 、 /c/ 、 /s/

(ア)　セ、ゼの子音が口蓋化して、シェ［ʃe］、ジェ［dʒe］と実現される傾向が見られる。ただし、前者は主に連母音の融合の結果である。

コシェール〈こしらえる〉、ミラッシェー〈みなさい〉、ジェシ〈ぜひ〉、ジェニ〈銭〉

(イ)　サ、ザの子音が口蓋化して、シャ、ジャに転訛する現象も一般的である。

シャカン〈左官〉、シャジ〈さじ〉、ジャシキ〈座敷〉、キジャム〈刻む〉、

cf. ジョーリ〈草履〉もいう。

(ウ)　ザ、ゼ、ゾの子音は、ときにその摩擦的要素が弱まり、ダ、デ、ドと破裂音に近く響くことがある。

オーゼー～オーデー［oːdzeː~oːdᶻeː］〈大勢〉、ノドリ［nodᶻori］〈野反(湖)〉

(エ)　ツォ、ツァ、ツェの拍が認められ、次のように促音の後にのみ現れる。

ゴッツォー〈御馳走〉、イッツォーク〈一足〉；オトッツァン〈お父さん〉、ニワッツァキ〈庭先〉、アイツァー〈あいつは〉；ツッツェー〈小さい〉、カラッツェーフ〈空財布〉

(オ)　ヒをシと混同する傾向がある。

シト〈人〉、シトツ〈一つ〉、ジェシ〈ぜひ〉、オシガン〈お彼岸〉

また逆に、シをヒも混同することも近隣諸方言と同様、盛んである。

キョーヒツ〈教室〉、ヒチネン〈7年〉、ヒョーガツ〈正月〉、ヒク〈敷く〉、ハナヒ〈話〉

(3)　/r/

ラ行子音［r］は、しばしば弱まったり、脱落したりする傾向が見られる。

ヨーホー〈両方〉、コイ〈これ〉、ソイデモ〈それでも〉

また、ラ行音の撥音化および促音化が認められる。すなわち、後に「な」〈禁止〉、「ない」〈否定〉などナ行で始まる語が接続すると、一斉に撥音化し、「で」、「だ」などの有声子音で始まる拍が接続すると促音化する。

ツクンネー〈作らない〉、ミンナ〈見るな〉、クンナー〈来るのは〉、ソンナラ〈それなら〉ソッデ〈それで〉、コッデン〈これでも〉、アッベーヨ〈あるだろうよ〉、アッダッベー〈あるだろう〉

(4) /n/ 、 /m/ 、 /b/

語頭以外のノ、モは撥音化することが多い。

ソントキ〈その時〉、マゲモン〈曲げ物〉、ナカンジョー〈中之条（地名)〉；イクラデン〈いくらでも〉、トーテン〈とても〉、ドーデン〈どうでも〉

語頭以外でのマ行子音 /m/ と、バ行子音 /b/ の混同も活発である。

ケブ〈煙〉、ヒボ〈紐〉、アツベル〈集める〉、セベー〈狭い〉；キミ〈きび（植物)〉

2-5 拍音素—促音、撥音、長音

(1) 促音の挿入および促音化は、他の関東方言と同様盛んに行われる。まず促音の挿入の例を挙げる。

ニワットリ〈にわとり〉、シラカッバ〈白樺〉、ヒトッキリ〈ひときり〉、シーッロイ〈白い〉、ワルクッテ〈悪くて〉、ムカシッカラ〈昔から〉、ヤッパリ〈やはり〉

方言ではさまざまな拍が促音化する。上述したラ行音以外の語例を挙げる。

ショッダス〈背負い出す〉、ノゾッコム〈覗きこむ〉、コッカラ〈ここから〉、メッケル〈見つける〉、イッデン〈いつでも〉、オットシ〈おととし〉、フッゴンデ〈踏みこんで〉

(2) 撥音が促音化する現象が認められ、次の二種類が観察される。

(ア) 有声子音 /g、z、d、b/ の前に立つ撥音が促音化する。

サッゲン〈三軒〉、コッジョー〈根性〉、ヘッジ〈返事〉、テッデニ〈てんでに〉、トッデ〈飛んで〉、タッボ〈田んぼ〉、ショッベン〈小便〉

(イ) 有声子音 /z、d、b/ の前に立つ撥音が促音化し、有声子音は無声子音 /s(c)、t、p/ となる。

フッツブス〈踏みつぶす〉、アスッテ〈遊んで〉、サッペン〈三遍〉、ビッポー〈貧乏〉

ただし、(イ) は (ア) のようにも発音され、当方言では (ア) が優勢である。東京語などでは一般に、促音は無声子音の前にのみ立つが、方言ではこのように無声子音ばかりでなく、有声子音の前にも立つことができ、目立った特徴の一つである。

(3) 語末が撥音で終わる名詞に接続した助詞「は」と「を」は、その撥音との間にいわゆる連声現象を起こす。

オコサンナ　マダ　デネー〈蚕さんはまだ出ない〉、ムコドンナ〈婿どのは〉；
ヨーハンノ　クッタ〈夕飯を食った〉、ウドンノ　コシェータ〈うどんをこしらえた〉、
ホンノ　ヨム〈本を読む〉

3　アクセント

近隣の諸方言と同様、東京式アクセントが行われている。すなわち、名詞のアクセントでは、n拍の語にはn＋1個のアクセントの型があり、それぞれの型所属の語は若干の出入りを別にすれば、東京語などとほぼ同じである。いま、六合村高年層のアクセント体系を示せば、次の通りである。

（表2）

拍数	音韻論的解釈	型	所　属　語　例
1	/○/	○▶	柄、蚊、血…（1類）　名、葉、日…（2類）
	/○¬/	●▷	絵、木、火…（3類）
2	/○○/	○●、○●▶	飴、牛、鼻…（1類）　梨、北…（2類）　行く、買う、着る、する…（1類）
	/○○¬/	○●、○●▷	石、川、橋…（2類）　足、花、雲、山…（3類）
	/○¬○/	●○、●○▷	糸、肩、箸…（4類）　秋、雨、蜘蛛…（5類）　書く、取る、見る、来る…（2類）　無い、良い
3	/○○○/	○●● ○●●▶	あくび、田舎、魚…（1類）　桜、むかで（2類）　畑、仏（4類）　二十歳（3類）　油、たすき（5類）　兜、雀、ねずみ…（6類）　薬、鯨（7類）　遊ぶ、捜す、明ける、腫れる…（1類）　赤い、浅い…（1類）
	/○○○¬/	○●● ○●●▷	小豆、手抜き、とかげ…（2類）　力（3類）　頭、男、東…（4類）
	/○○¬○/	○●○ ○●○▷	小麦…（3類）　五つ、紅葉…（4類）　朝日、命、心、涙、枕…（5類）　動く、落とす…（2類）　歩く、隠す（3類）　起きる、落ちる、晴れる…（2類）　白い、高い…（2類）
	/○¬○○/	●○○ ●○○▷	えくぼ、緑（2類）　鮑、さざえ（3類）　嵐（4類）　姿、錦（5類）からす、狸（6類）苺、蚕、かぶと（7類）帰る、通る（2類）　入る、参る（3類）

（注）　類別語彙は平山輝男『日本語音調の研究』に従う。

4 文　　法

(1) 意志・勧誘表現

中高年層ではもっぱら「ベー」が用いられ、動詞に下接する。四段活用動詞には終止形に、一段活用動詞には未然形に接続する。

行グベー，読ンベー；見ベー、逃ゲベー

カ変およびサ変動詞には、未然形と終止形に接続する。

来ベー、来ルベー；シベー、シルベー

(2) 推量表現

意志・勧誘と同じ「ベー」が用いられる。この「ベー」は、動詞、形容詞の活用形に直接接続する他に、助動詞「ダ」〈断定〉、「タ」〈過去・完了〉を介した「ダッベー（ダッペー）」、「タッベー」が用いられる。

行グベー、行グダッベー、行ッタッベー、行ッタダベー、起キベー、起キルダッベー、起キタッベー、起キタダッベー、来ベー、来ルダッベー、キタッベー、キタダッベー、シベー、シルダッベー、シタッベー、シタダッベー

形容詞にはカリ活用の連体形に接続する。

赤カンベー～赤カッベー、重カンベー

また、名詞構文も次のように言う。

山ダッベー；ソーダッベー、ソーダッタッベー

(3) 過去表現

過去は東京語と同様「タ」〈過去・完了〉で表されるが、この他に「ケ」があり過去・回想を表す。この「ケ」は動詞に接続する場合は、「タ」を介して「タッケ」、「ダッケ」の形をとり、形容詞にはカリ活用の連用形に接続する。

言ッタッケ、読ンダッケ、見タッケ、来タッケ；白カッケナー、良カッケナー

また、「タッケ」とほぼ同じ意味用法で「タッタ」という形式もあり、盛んに用いられる。

行ッタッタ、有ッタッタ、見タッタ、来タッタ

「タッケ」と「タッタ」の違いは必ずしも明確ではないが、前者は不確かな回想、確認を表すのに対し、後者は詠嘆的な回想の意が強い。

(4) 可能表現

一般に主体の能力を問う能力可能は、読ミエル，読メール，見エール、来エールのように言い、状況可能は読メル、見ラレル、来ラレルとなる。

(5)　その他

(ア)　断定の助動詞「ダ」とその連用形「デ」は、助詞「ノ」を介さず直接動詞、形容詞、助動詞に下接する。

行クダ〈行くのだ〉、食ッタデ〈食べたので〉、痒(カユ)イダッタ〈痒かった〉

また、「ダ」を重複させた強調形式「ダダ」も併用される。

行クダダ〈行くのだ〉、アスンデルダダ〈遊んでいるのだ〉、ソーダダ〈そうなのだ〉

なお、「ダ」の仮定形は「ダラ」〈なら〉が優勢で、ふつう融合形「ダリャー」として実現する。

カマダリャー〈窯ならば〉、行グダリャー〈行くのならば〉

(イ)　尊敬の助動詞「シャル」、「サッシャル」、「ラッシャル」がある。四段活用動詞には「シャル」、その他の動詞には「サッシャル」、「ラッシャル」が接続するが、用いられるのはもっぱら命令形のみで、融合形シェ(ー)、サッシェ(ー)、ラッシェ(ー)で実現される。

書カッシェ〈書きなさい〉、行ガッシェ〈行きなさい〉、来ラッシェ〈来なさい〉、話シテミサッシェー〈話してみなさい〉

(ウ)　比況を表す「みたいだ」は、「ミタヨーナ」が用いられる。

富士山ミタヨーナ山、綿ミタヨーナ雲

(エ)　「ようだ」、「そうだ」の意味で「〜ゲダ」が盛んに使われる。

降ルゲダ〈降るようだ〉、買ッタゲダ〈買ったようだ〉、ソーゲデンネー〈そのようではない〉

(オ)　否定の助動詞「ナイ」の連用形は、「ナッタ」とカを脱落した形で実現される傾向が強い。

行ガナッタ、出来ナッタ、見ナッタ

(カ)　願望の意を表す補助動詞「ください」に相当する方言形は、「クダ(ー)レ」である。

イカークダーレ〈いかをください〉、投ゲテクダーレ、起キテクダーレ、来テクダーレ

(キ)　やさしさのこもった命令表現として、次のような言い方がある。

チャント　クワシ(ー)〈ちゃんと食べなさい〉、ダッシ　ヤラシ(ー)〈早くやらせなさい〉

(ク)　カ変動詞「来る」は、一段化の傾向が見られ、未然形は「コ」が現れることは少なく「キ」が優勢である。

キナイ〈来ない〉、コッチー　キサッシェー〈こっちへ来なさい〉、モッテキラレル〈持って来られる〉

また、その命令形は「コー」である。

オラノウチー　コー〈俺の家へ来い〉

(ケ)　助詞「ガ」、「ヲ」、「ニ」の脱落は、近隣諸方言と同様、盛んに行われるが、用例は省略に従う。

(6) 主な助詞

(ア) ガ　主格を表わすほかに次の二種の用法がある。

① 準体助詞「ノ」に対応するもの。

コリャー　ムコノガダ〈これは婿のものだ〉、オレガニャー　ワカラネー〈俺のにはわからない〉、イェーガ　ヤケタ〈良いのが焼けた〉、アルガジャ〈有るのだよ〉

② 格助詞の連体格用法。ただし、「ガ」の前には人称代名詞、人名など人間に関するもののみが立つ。

オラガウチ〈俺の家〉、オレガウヤデモ〈俺の親でも〉

(イ) ムシ　ムシェまたはムシュと発音されることが多い。共通語の「ねえ」にあたり、概して年長や目上の人に対して使う終助詞。

ソーダムシュ〈そうですねえ〉、寒カッタムシェ〈寒かったねえ〉

だが、ときには次のように間投詞的にも用いる。

オラガムシ　コドモノコラー〈俺がね子供の頃は〉

(ウ)ゲー　共通語の「に」にあたる意味で、「ノ」を介して「ノゲー」の形で接続することが多い。

オレゲーモ〈俺にも〉、ソレノゲー〈それに〉、ウマノゲー〈馬に〉、メンパノゲーサ〈めんぱにさ〉

(エ) グレー　「いうまでもなくもちろんだ」という気持を表す終助詞。「グレーカ」の形で用いられることが多い。

ソーダグレーカ〈そうどころではない〉、ウチャー　エタンダグレーカ〈家は傷んだどころではない〉

(オ) セー　共通語の「に」や「へ」にあたり、名詞について動作の向かって行われる方向を表す。

ニケーセー〈二階へ〉、エナリサンセー　オメーリスル〈お稲荷さんにお詣りする〉

(カ) ジャン　文末に現れて、「ではないか」の意味を表す。

センコー　タテルジャン〈線香を立てるねえ〉、キモンガ　ヤケタジャン〈着物が焼けたねえ〉

(キ) キャ　促音を伴って文末に現れ、「てよ」の意味を表す。「ダ」を介して「ダッキャ」、「ダッキャン」の形が多く聞かれる。

行ッタッキャン〈行ったってよ〉、アレダッキャン〈あれだってよ〉、トウェーダッキャン〈遠いんだってよ〉、ハタラカネーダッキャン〈働かないんだってよ〉

(7) ン　共通語の終助詞「ね」にあたり、盛んに用いられる。

タント　アッタン〈たくさんあったね〉、ダメダッタン〈だめだったね〉、行クカラン〈行くからね〉、ヌックイン〈暖かいね〉

(ケ)　イ　共通語の「ね」、「よ」にあたる。

ソーダイ〈そうだよ〉、ドケー　行グダイ〈どこへ行くんだね〉、オベーガ　アルイ〈覚えがあるよ〉

(コ)　ノとナ　共通語の間投詞「ね」、「ねえ」にあたるものに、「ノ」、「ノー」、「ナ」、「ナー」がある。「ノ」は丁寧な言い方で、普通年長者や目上の人に使われる。「ナ」は自分と同等か年下の人に対して使うが、方言の日常会話では「ナ」が目立って多い。

六合村入山字世立の会話

1　自然談話——炭焼きの話

話し手　A　山本　直義　(男)
　　B　山本　由平　(男)
　　C　山本　武男　(男)
　　D　山本　　栄　(男)

A　アノー　クブノ　イロガ　ダンダン　ダンダン　ソノー　ニガクナクッテ(1)　ニオイガ
あのう　煙の　色が　だんだん　だんだん　そのう　にがくなくって　匂いが

チガッテ　クルカラ　ソントキニ　オワ(2)　スコシ　ハナシテ　ヒトツ　アノー　ソノー
違って　来るから　その時に　尾穴は　少し　離して　一つ　あのう　そのう

ナカホドヨリカ　チョット　ウエダッタナ　ハジメト(3)　メワ。　[Bエー / ええ]　(咳払い)
中ほどよりも　ちょっと　上だったな　初めの　目は。

C　ッアー。
ああ

A　ソレー　フタッツ　リョーホーエ　アケテ　ソイデモ　マタ　ニジカングライ
穴を　二つ　両側へ　あけて　それでも　また　2時間ぐらい

オイタカナ　ソイジャー…
(間を) おいたかな　それじゃあ

B　メッ　メッチューノワ　ヨースルニ
　　メというのは　要するに

C　クーキアナダ。
空気穴だ。

A　クーキアナ。　ソノー　イママデ　ヤケタ　カベントケー　ソノー　チッチェー　アナー
　空気穴。　そのう　今まで　焼けた　壁の所へ　そのう　小さい　穴を

アケテク　ワケー　リョーホーエ。
あけておく　わけ　両側へ。

B　アッ　ドノックレー　カサノ　ヤツ　ハジメワ。(4)
あの

A　ウン。　ソエデ　ケブガ　ダンダン　ダンダン　イロガ　アオジロ　アオジロク　ナッテ
うん。　それで　煙が　だんだん　だんだん　色が　青白く　なって

クルカラ　コンダ　ニジカンモ　オイタラ　マタ　シタエー　マタ
来るから　今度は　2時間も (間を) おいたら　また　下へ　また

フタッツ　アケル。
二つ（穴を）あける。

C　アレガ　タノシミダッケガ　アノー　アノ…
あれが　楽しみだったが　あのう　あの…

A　アレガ　タノシミダ。
あれが　楽しみだ。

C　ノゾッテミールダ。
覗いてみるんだ。

A　ウー　ソリャー　ソレガ　ミテーダーナー　ナカー。　ドンノックレー
うん　そりゃー　それが　見たいんだなあ　中を。　どのくらい

ヘーッテルガダン。ソイデ　ソノー　チョット　ハヤケリャー　ソーリャー　ヨクミテヤ
入っているかをね。それで　そのう　ちょっと　早ければ　それは　よく見ては

アナエ　メオ　オッツケテ　ソイ　チョット　ハヤケリャー　（Bフン。／ふん。）
穴へ　目を　押しつけて　それで　ちょっと　早ければ

フッケーシチャー　クルデ　（笑）ハヤスギタカラ　マダ　ケブガ　ソノー　ナカニ
吹き返しては　くるよ　早すぎたから　まだ　煙が　その　（窯の）中に

ムユッテルカラ　ペーッチャー　フカシテ　（笑）　ヒトッキリ　カマッサキエ
けむっているから　プーッと　（息を）吹いて　一時（ひととき）　窯場の先へ

イッテバ　メー　コスッテキテ。　（笑）
行っては　目を　こすって来て。

D　ヨク　エーッ　（咳払い）　センパイノ　シューニャー　メッチブーエ(5)　サールホド
よく　ええ　先輩の　衆には　目打ち棒へ　さわるほど

イッペー　ヘーッテ　ヘーキダッチューヨーナ　ハナシオ　キクダッケドモ　（Aアー。／ああ。）
いっぱい　入っても　平気だというような　話を　聞くのだけれど

ソノ　アリヨーネーダッタガ　モリナザーイー　ヘーッテ　ヤクタケ(6)
そんな事は　ありえなかったが

ヤマホンショー(7)ガ　コンヤー　オレガ　メッチボー　サーッテ　（笑）　イッペー
山本の衆が　今夜は　俺が　目打ち棒へ　さわって　いっぱい

ヘーッタカラ　キテミロッチュー　ワケデ　（A笑）　イッテーヤ　コナ　デッケー
入ったから　来て見ろという　わけで　行って見れば　こんな　大きい

アノー　アポリッキ(8)ガ　コッチノホーエ　オッケーテ　キタデ　（笑）　イテーッテ。（笑）
あの　あぶり木が　こっちの方へ　倒れて　来たよ　痛いって。

A　ソイ　ヨクー　アノー　アタッタ　カマダリャン　（Cウン。／うん。）　ソリャー　キレイニ
それ　よく　あの　当たった　窯ならば　それは　きれいに

タタッタヨーダッタナー　（Dソーサー。／そうさあ。）　ナカデ。
（木が）立たったようだったなあ　（窯の）中で。

D　イーカマダリャー　サー　スミモ　イーガ　ヤケタダジャン。
いい窯ならば　さあ　炭も　いいのが　焼けたんだな。

A　スミモ　イーガ　デタダシ　エッペー　ヘーッテタダッタナー。
炭も　いいのが　出たし　いっぱい　入ってたんだなあ。

D　アー。　マー　クチモシュー　サンザシテ　ニジカンモシテ　ツキソーナトキ
ああ。　まあ　口燃しを　さんざんして　2時間もして　(火が) つきそうな時

コーッ　ケブダシーサー　ケブノウェー　テーダシャー　パッ　チュー　オトガ
こう　煙出しへさ　煙の上へ　手を出せば　ぱっ　という　音が

スルゲダ　カマダリャー　イージャガ　(Aソーサー。そうさあ。)　ニュードーグモガ
するような　窯なら　いいんだが　入道雲が

ノビテクルヨーニ　ニヤニヤ　ニヤニヤッテ　デテクル　カマー　ゼッタイ
のびて来るように　にやにや　にやにやって　出てくる　窯は　絶対

ダメダッタ。(Aアー。ああ。)
だめだった。

C　タダ　ソノー　クーキュー　エレルニュン(9)　ジョジョニ　イチジカン　ハジメワ
ただ　その　空気を　入れるには　徐々に　始めは

ニジカンオキ
2時間おき

A　アー。　ハジメワ　ニジカンメ　ダンダン　ジカンノ(10)　ミジカクシテ…。
ああ。　始めは　2時間め　だんだん　時間を　短かくして…。

C　ソレカラ　ダンダン　イチジカンオキ　サンジュップンオキッ　ツーヨーニ
それから　だんだん　1時間おき　30分おき　というように

ジョジョニ　デッケー　アナー　シテッテ　クーキオ　オクラネーッチュート
徐々に　大きい　穴に　していって　空気を　送らないというと

セッカク　ナカデ　ヨクデキタ　ソノ　スミガ　コッチカラ　クーキュー　アラ
せっかく　中で　よくできた　その　炭が　こっちから　空気を

アラクーキオ　イレテヤルチュート　コー　ヨコヘビッチューガ(11)　ヘーチモーッツート
新しい空気を　入れてやるというと　こう　横蛇というのが　入ってしまうというと

セッカク　ダシタ　スミガ　モー　キカクガ　オチルガタメニ　ソノ　クーキオ
せっかく　出した　炭が　もう　規格が　落ちるために　その　空気を

イレルニモ　ジョジョニ　アケテグ　ソノ　アナイ　マタ　ノゾッテミテ　ナカノ
入れるにも　徐々に　開けていく　その　穴へ　また　覗いてみて　中の

ヒュー　ミテ　アオイ　ヒガ　タッテリャー　カナラズ　イイヒガ　アノ　イイスミガ
火を　見て　青い　火が　たっていれば　必ず　あの　いい炭が

デルシ　アケー　ヒガ　ボボーッ　ボボット　ナカデ　アガルヨージャー　コノスミガ
出るし　赤い　火が　ぼぼーっ　ぼぼっと　中で　あがるようでは　この炭が

モー　ヨコヘビンナッテシモー。　ソレデ　オモテカラ　ミテン　ダイタイ　コッダー
もう　横蛇になってしまう。　それで　表から　見ても　だいたい　今度は

イイスミガ　デルゾト　オマーレタシ　コッダー　ドーモ　コリャー　イーガ
いい炭が　出るぞと　思われたし　今度は　どうも　これは　いいのが

デネーナーチュー　ダイタイ　ハンダンガ　ツイタワケ。　ソーシテ　エマノ
でないなあという　だいたいの　判断が　ついたわけだ。　そうして　今の

ハナヒデ　ソノ　イッペー　アルトキニャー　マー　ヒトカマデ　ハンビョー
話で　その　いっぱい　ある時には　まあ　ひと窯で　半俵

ハンビョーグレーワ　マー　ヨケー　アッタッタコトガ　アルガジャ。
半俵ぐらいは　まあ　余計　あったことが　あるのだ。

注

(1) ニガクナクッテと言っている。炭の煙りの色や匂いで炭の焼け具合を判断する。
(2) 窯の裏につける尾穴。
(3) ハシメノの言い間違い。
(4) 早口でごとばがすべり、音声、意味とも不明。
(5) メッチブー〈メウチボー（目打ち棒）窯に煙出しの穴をあける道具。
(6) 音声意味とも不明。
(7) 屋号か、山本。
(8) アボリッキ〈アブリッキ
(9) エレルニュン（入れるにも）
(10) 〔dʒikaɴ＋o〕を〔dʒikanno〕と言っている。名詞語末のNと助詞oの連声現象。
(11) ヨコヘビ（横蛇）横に入る亀裂。

2　場面設定の会話

話し手　A　山本　直義　（男）
　　B　山本　とく　（女）

見送り

A　ハテー　ケサー　ドコエ　エッテコベーナー。　ヨーツリニ　イッテクルカナー。
さて　今朝は　どこへ　行って来ようかなあ。　魚釣りに　行って来るかなあ。

B　ソーカイ。　コノ　アメノフルニ　スッジャー　イグダカイ。
そうかい。　この　雨の降る中　それじゃあ　行くのかい。

A　マー　クモッタフーガ　コノ　ッ（××）　サカナガ　ヨケー　トレルダナー。
まあ　曇った方が　この　魚が　余計　捕れるんだなあ。

B　アー　ソーカイ。　ソーダリャー　（Aアー。／ああ。）　ケデー　モタジャーナンメーヤン。
ああ　そうかい。　そうなら　けでを　持たなければなるまいよ。

A　ソーダナー　クモッテルカラ　モッタホー　　イーカシンネーナー。
そうだなあ　曇ってるから　持って行った方が　いいかもしれないなあ。

B　アー　ワラジモ　ソーダリャー。
ああ　わらじも　それなら。

A　ソーダー。　[Bムッ。×××]　ムシ　デン　スベリャーナー　アブネーカラ　[Bソーダヨ。そうだよ。]
そうだ。　もし　でも　滑べるとなあ　危ないから

モッテッカ。
持って行くか。

B　フンデ　ソーカイ。　ッジャー　フコニ　アッタカラ　ソッジャー　コノ
それで　そうかい。　じゃあ　ここに　あったから　それじゃあ　この

ケデー　モッテギャー　イー。
けでを　持って行けば　いい。

A　アー　ドーモ。　コリャー　マー　ジャー　コレー　モッテ　イガー。
ああ　どうも　これは　まあ　じゃあ　これを　持って　行くよ。

B　ハイ。　[Aアー。ああ。]　ジャー　キョーツイテ　イッテキサッシェー。
はい。　じゃあ　気を付けて　行って来なさい。

A　ンー　マー　ナレテルカラ　ソラ　エッコ　ダイジョーブダ。
うん　まあ　慣れてるから　それは　全く　大丈夫だ。

B　アッ　ソーカエ。　[Aアー。ああ。]　アチャー　ユワー　スベルカラ　キオツカッシェー。
あっ　そうかい。　それじゃあ　岩は　滑べるから　気をつけて下さい。

A　ンーン　ソリャー　アッジャーネー　ナレテルカラ。
うんうん　それは　案じることはない　慣れてるから。

B　アー　ソーカイ。　[Aハー。ああ。]　ソッジャ　キオツイテ　イッテクダサイ。
ああ　そうかい。　それじゃ　気を付けて　行って下さい。

A　ハイ　ジャー　マー　イッテクラー。　バンガタ　ハヤク　ケーッテクルカラナー。
はい　じゃあ　まあ　行って来るよ。　夕方　早く　帰って来るからなあ。

B　ハイ　アッ×××　アチャー　イッテゴザレ。
はい　それじゃあ　行ってらっしゃい。

迎　え

A　バーサン　エマ　ケーッテキタゾ。
婆さん　今　帰って来たぞ。

B　アー　ソーカイ。　[Aン。うん。]　ソリャー　ヨカッタ。
ああ　そうかい。　そりゃあ　良かった。

A　マー　アメガ　フッテサー　ヌレラー　ヌレタダガ　キョーワ　テンカー×××××××　ヨクッ×××××
まあ　雨が　降ってさあ　濡れるには　濡れたんだが　今日は

グアイガ　ヨクッテ　イライ　サカナガ　トレター。
具合が　良くって　随分　魚が　捕れたよ。

B　アー　ソリャー　ヨカッタ。　[^ンー。 / うん。]　ドーライ。
ああ　それは　良かった。　どーれ。

A　アチャー　ミテミロ。
それじゃ　見てみろ。

B　アンニャー　エライ　トッテキタムシ。
おやまあ　随分　捕って来たねえ。

A　ンー　キョーワ　モーケタダー。
うん　今日は　儲けたんだ。

B　ア　ソリャー　ヨカッター。
あ　そりゃあ　良かった。

A　ン。　コンヤー　マー　コレー　ヤイテ　ショーチューノ　サカナニ　シテ
うん。　今夜は　まあ　これを　焼いて　焼酎の　肴に　して

クッベーヤ
食おうよ。

B　アー　ソリャー　マー　ウマカッベー。
ああ　それは　まあ　うまいだろう。

A　（笑）

4　利根地方の方言

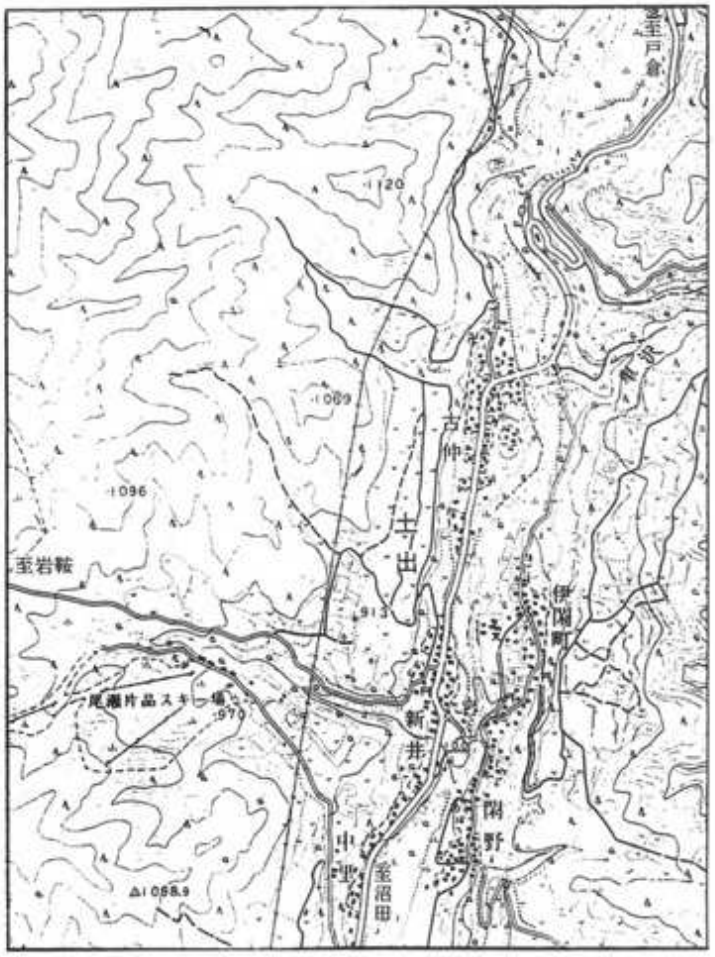
調査地点　利根郡片品村土出字古仲

調査員	篠木　れい子	
同補助	千明　英雄	
話　者	萩原　大次	男（昭和３年生）
	深見　泰司	男（大正12年生）
	星野　栄三郎	男（大正６年生）
	星野　準一	男（昭和25年生）
	星野　志ん	女（明治43年生）
	星野　関次	男（大正４年生）
	星野　タマノ	女（大正９年生）
	星野　晶	男（大正２年生）
	星野　ユキ子	男（大正５年生）
	星野　里可子	女（明治43年生）

片品村の概観

千　明　英　雄

1　地形・地質等



片品村は群馬県の東北端に位置し、東は栃木県に、北は福島県及び新潟県に接し、西は利根郡水上町及川場村、南は利根村と境をなし、東西平均24km、南北34kmで総面積391.50km²と県内でも村の中では一番広い面積を有している。また周囲を日光白根山(2,587m)、至仏山(2,577m)、武尊山(2,158m)等の高山に包まれた村であって、役場の所在する鎌田で標高813mある。土質はその殆どが火山岩類によって構成されていて、著しい火山地形の特徴を示し、顕著な山稜の大半は日光火山群に属している。平均気温は10°Cであるが、地形が複雑なため気温の変化が激しい。年間雨量は300mm程度で、冬季の積雪量は山間部で4m余りに達する。総面積の90%が林野で、耕地率は僅か3%である。集落は村の中央を北から南へ貫流する片品川と、その支流である大滝川及び塗川に沿って、標高700mから1,000mのところに形式されている。

片品村には世界的に有名な尾瀬、また丸沼、菅沼等の湖沼、さらに武尊山等の自然景観と、白根、土出、鎌田等の温泉や、村内に7カ所のスキー場があり、豊かな観光資源に恵まれている。

今回方言調査を実施した古仲地区は、中心地鎌田より北部に位置し、会津街道の道筋にあたり古くから栄えた所である。またいにしえの土井出の庄であって、土出は片品川を挟んで古仲、新井、対岸に伊閑町、閑野の四つの小字がある。

2 人　　口

人口は昭和60年10月に実施された国勢調査によると、6,132人である。片品村の人口推移をみると、昭和30年代前半は8,500人を超えていたが、後半より徐々に減りはじめ、昭和46年過疎地域に指定された。これは昭和30年代の前半には、村内に水力発電所の建設工事や、林業関係の仕事も多く人口の増をみたが、昭和35年以降国の高度経済成長政策により、第一次産業は第二次産業に吸収され、特に若年労働力の都市流出はかつてないものになったことに起因する。

しかし最近は観光産業の振興による若者の定着や、Uターン現象も起こり、くわえてペンション経営等で都市部からの転入者も増えており人口も横ばい状態となっている。

表1　片品村の人口推移

年　次	片品村	土　出	古　仲
	人	人	人
明治21年	3,308		
〃 36年	3,960		
大正元年	4,452		
〃 11年	5,228		
昭和元年	5,607		
〃 11年	6,579		
16年	7,700		
〃 21年	7,889		
〃 25年	8,117		
〃 30年	8,561		
〃 35年	8,491		
〃 40年	7,862		
〃 45年	7,011	863	280
〃 50年	6,515	801	256
〃 55年	6,343	808	261
〃 60年	6,132	816	268

古仲地区は昭和60年の調査で67世帯、268人であり、ここ20年間は世帯数も人口も大きな変化をみせていない。

3 沿　　革

片品村が古くはどのような領主の支配を受けたかさだかでない。平安期の終り頃から鎌倉時代の初めにかけて、利根四郎経家という人が、利根郡にいて支配していたと言う伝えがある。その後，平治年間（1159年）沼田氏の所領となり、のち天正18年（1590年）豊臣秀吉の全国統一がなると、利根郡は真田氏の領地となり、真田昌幸の長子信幸が利根郡一帯を統治した。以後真田氏が5代にわたり沼田城主となり利根郡を治める訳であるが、五代城主伊賀守信澄（信利）の時、藩財政が窮乏したうえ、江戸両国橋架替工事の材木請負などに手を出して損をし、その処置に無理な検地を行い、農民の反発をかって、結局天和元年（1681年）徳川幕府より改易を命ぜられ、代官所支配となるのである。その後文化9年(1812年)旗本領となり明治に至っている。明治元年岩鼻県管轄に属し、同年群馬県に、同6年には熊谷県に属し、同9年再び群

馬県に帰した。戸長制度の際においては、村内を数多く分けて、そこに各戸長を置いたが、廃合分離等の変遷を経て、明治22年４月市町村制施行の際合併して一村になった。片品村の成立以来町村合併促進法にも、又昭和31年10月に切り換えられた、新市町村建設促進法にも関係なく独立した自治体として現在に至っている。

4　産　　業

片品村はかつて、農業と林業に長い間支えられた村であった。参考までに昭和30年の産業別戸数、人口をみると、農業949戸、1,922人、林業629戸、929人、その他45戸、94人となっている。しかし昭和30年代後半より、尾瀬が一躍脚光を浴びたり、村内にスキー場が開発され、また昭和40年に金精道路の開通もあり、四季を通した観光産業が注目され、産業構造も大幅な変化をみせた。村内７カ所のスキー場周辺の民宿、旅館は300軒近くあり、温泉の掘削も各地で行われ、最近中心地の鎌田にも２カ所温泉が湧出し、今後益々観光産業が伸びていくものと思われる。

一方現金収入の少ない農業は、現金収入に頼る兼業農家が激増し、したがって農業経営も、かつて養蚕、米麦等の穀物及び薪炭等から野菜、果樹、畜産、きのこ等いわゆる換金作物への転換がなされている。

古仲地区でも、昔はその殆どが農林業であったが、村の傾向と似ており、戸倉スキー場、岩鞍スキー場等の開発で、民宿や関連産業が伸びてきている。したがって兼業農家も多く、観光産業に無関係の者は殆どいないと言う状況になってきている。

古仲地区

5　交　　通

片品村はかつて、自動車道については、行き止まりの村であり、鉄道にしても上越線沼田駅まで40km近くあり、交通の便にはあまり恵まれていなかった。

古くは会津街道、現在の沼田一田島線と、金精峠道と呼ばれた現在の国道120号線が、本村の主要幹道であった。沼田一田島線は沼田市より、白沢村、利根村、本村を経て福島県へ通ずる道で、古仲地区もこの街道筋にある。江戸時代より会津との主要道であったため、戸倉には関

所も設けられていた。また明治維新の慶応4年（1868年）5月に、官軍の東山道総督配下の一支隊と、会津兵が戸倉で戦っているが、両軍の戦略上でもこの道は、重要な役割を果していた。現在、尾瀬のふもと大清水まで車道が入っているが、奥鬼怒林道が建設中であり、福島県へ通ずるのもそう遠いことではない。

一方金精峠道は、栃木県の日光湯元に通ずる道である。これも明治維新の時のことであるが、米沢藩士雲井辰雄一行が、本村須賀川で官軍と一戦を交え、雲井辰雄一人この街道を、日光湯元へ逃げたという説がある。また明治22年4月には文豪幸田露伴が、日光湯元から金精峠を越えて本村に入り、菅沼・丸沼に遊び、その時の構想から小説「対どくろ」を書いている。歌人若山牧水もこの道を通り、白根温泉、丸沼を経て日光へ向っている。

現在は、金精峠トンネルの開通により、日光と上信越を結ぶ奥日光の観光道路として、観光客の往来も多く、東北道への基幹道路としても重要である。しかし冬期間は積雪が多いため閉鎖されるので、年間開通にむけての運動が展開されている。

6 教　　育

江戸時代には、各大名は子弟の教育のため、藩校を設けたり、町人は寺小屋や塾に通わせるなど、それぞれの教育体制を作っていた。農村でも支配階級に属する父兄は、次代の後継者たる子弟に勉強させたようである。片品村でも東小川の帰厚堂、菅沼の算学、幡谷の浄教学舎等を挙げることができる。学問の内容は今も話に残っていることから推測すると、「四書五経」、「庭訓往来」と言うような読みを主体としたもの、諸届等に必要な書道、計算に必要な和算等、いわゆる「読み、書き、そろばん」であったようである。明治に入り学制が発布され、本村でも明治6年から8年まで6校が設立された。以後、大正、昭和の時代の流れの中で、名称変更や統合があり、現在は4小学校（分校2校）、1中学校となっている。

今回調査の古仲地区にも、現在の片品北小学校の前身である学校が、明治7年3月地元の大円寺に開校された。以後いくたび改称されたり、伊閑町に移転されたが、昭和30年本校より独立し現在に至っている。

7 民　　俗

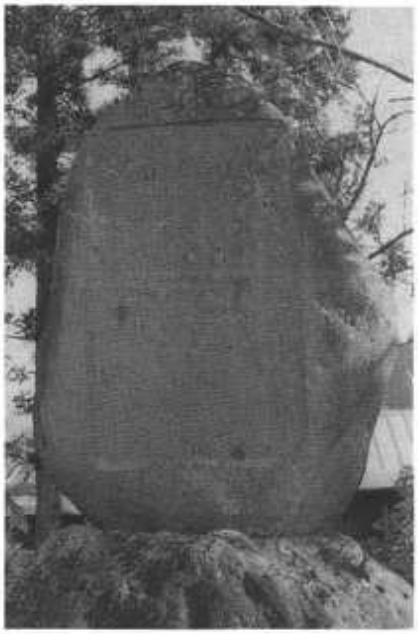
片品村には、農業や林業が主産業であったため、農林業に関する風習や信仰が多く、30年位前までは、伝統的にこれが受け継がれてきた。しかし産業構造の急激な変化や、価値観の多様化等により、それまであった習慣や、年中行事も失われるものが多くなってきている。

指定文化財の「猿追祭り」越本地区の「にぎりっくら」、「鉄砲まつり」それに夏祭りや、年中行事としての「どんど焼」、「盆踊り」、「十日夜」等は各地で続けられているが、冠婚葬祭の

中には、簡略化されたり、すでに消滅したものもある。婚姻関係もその殆どが村内の者との結婚が多かった。本村には「せっちんよりとまに出ろ」と言う言葉があったが、山より里に近い方へ嫁に行けと言うことであって、親は里に出ることを願った。これは山奥ほど作物が採れず、生活が大変なのでそう願ったのである。また婚礼の日まで一緒になる相手の、顔を見たこともないと言うのも多かったようで、三三九度の盃も、嫁と婿がするのではなく、親同志がすると言う奇妙な式が行われ、家と家のつながりを重視し、嫁は働き手が一人増えた位にしか思われなかったようである。

8　文　化　財　等

片品村の文化財は、次表のとおりであるが、今回調査した古仲地区にも、今後指定すべき文化財が数多くある。平安朝末期鳥羽法皇の設定された、安楽寿院の分院である大円寺に保存されている、間引きの絵馬、官軍の落書や観音立像、さらに治水の願いをこめて建立した、禹王塔や庚申塔等の石造文化財にも恵まれ、この地が古くから栄えていたことがうかがえる。



水害を治める神としてまつられた禹王塔

表2　片品村の文化財

指定物件	指定種別	指定物件名	指定年月日	所在地
尾瀬	国	特別天然記念物	昭35. 6. 1	戸倉
猿追い祭り	国	無形民俗文化財	昭56. 5. 6	花咲
武尊牧場レンゲツツジ群落	県	天然記念物	昭33. 3. 22	花咲
大御堂観音立像	県	彫刻	昭48. 12. 24	東小川
上而郷倉	村	建造物	昭50. 12. 17	越本
武尊神社本殿	村	〃	昭51. 7. 16	花咲

片品村古仲の方言

篠　木　れい子

1　は　じ　め　に

群馬県の東北端に位置する利根郡片品村古仲も、全体的には西北部方言、西関東方言の特色を有しているが、山間部にあることから、県下の平坦部の方言とは異なった点が認められる。例えば、連母音アイ・アエが［εæ~ε:］（アェー～エァー）で実現されることや語中・語尾のｒの脱落、有名な終助詞ムシの使用、ベーが助動詞ダに接続する場合にはダンベーとならずにダッベーとなることなどである。

また、新潟県北魚沼郡や栃木県塩谷郡、日光市と接しており、更にまた、古くは尾瀬を通って福島県との交流も盛んであったことから、東北部方言、東関東方言と似通った点が認められる。

しかし、近年、スキーやテニスでの観光化が進み、村の生活が急激に変化し、その変化に伴って、言語の変化、共通語化も著しいようである。

以下、当方言の老年層を中心に、その特色を述べる。

2　音　声・音　韻

片品村古仲方言の拍体系を示せば、次の通りである。

表１

u	o	a	ε	e	i	ju	jo	ja	jε	wa	wε	we
hu	ho	ha	hε	he	hi	hju	hjo	hja	—	—	—	—
gu	go	ga	gε	ge	gi	gju	gjo	gja	—	gwa	—	—
ku	ko	ka	kε	ke	ki	pju	pjo	kja	—	kwa	—	—
—	do	da	dε	de	—	—	—	—	—	—	—	—
—	to	ta	tε	te	—	—	—	—	—	—	—	—
cu	co	ca	(cε)	ce	ci	hju	hjo	cja	—	—	—	—
zu	zo	za	zε	ze	zi	zju	zjo	zja	—	—	—	—
su	so	sa	sε	se	si	sjz	sjo	sja	—	—	—	—
ru	ro	ra	rε	re	ri	rju	rjo	rja	—	—	—	—
nu	no	na	nε	ne	ni	nju	njo	nja	—	—	—	—
pu	po	pa	pε	pe	pi	pju	pjo	pja	—	—	—	—
bu	bo	ba	bε	be	bi	bju	gjo	bja	—	—	—	—
mu	mo	ma	mε	me	mi	(mju)	rjo	mja	—	—	—	—
N	Q	R										

この音韻体系は、共通語と比べて次の点で異なる。

① いわゆるガ行鼻濁音 /ŋ/ の拍に欠ける。

② /ε/ 軸の拍が認められる。

③ /jε/ 、 /wε/ の拍が認められる。

④ /we/ の拍が認められる。

⑤ 合拗音 /gwa/ 、 /kwa/ が認められる。

⑥ /co/ 、 /ca/ 、 /ce/ の拍が認められる。

以下、主な音韻上の特色について述べる。

2-1 母　音

(1) /i/ と /e/

/i/ イは共通語よりやや中舌化しているが、東北地方のそれに比べれば共通語に近い。

/e/ エは単独の場合も子音と結合して拍を成した場合も、共通語のエよりも口の開きが狭い。したがって、エはイと混同することがある。

イチゴ〈越後〉、ミシ〈飯〉、クイル〈くれる〉、クイネー〈食えない〉、ブッコイタ〈ぶっこわれた〉、カイル〈買える〉

イがエに混同する例は少ないが、次のような例が見られる。

エバラキ〈茨城〉、エッコー〈一向〉、メメズ〈蚯蚓〉

語例は少ないがイがウと交替する場合もある。

サムシー〈淋しい〉、ヤクモチ〈焼き餅〉、アケブッカリ〈野木瓜刈り〉

(2) /u/ と /o/

/u/ ウも /o/ オも、共通語と同じく［ɯ］、［o］で実現される。

ウとオの交替は単独の場合ばかりでなく、子音と結合した拍にも見られるが、六合村ほど盛んでない。

ウーオ

オボギ〈産着〉、ヨーハン〈夕飯〉、モジナ〈むじな〉、アコロヒ〈あくる日〉、ソソ〈裾〉、モコドン〈婿さん〉

オーウ

ウナジ〈同じ〉、アグ〈顎〉、ムグル〈潜る〉、マナク〈眼〉、ノブッテ〈登って〉、イナクト〈異な事〉

格助詞「を」もウとなることがある。

ウサギウ〈兎を〉、スシウ〈寿司を〉

(3) 母音の無声化

共通語と同じく、次の音環境にある狭母音の /i/ と /u/ は無声化する。

(ア) 無声子音に挟まった狭母音 /i、u/

クチ [kɯ̥tʃi] 〈口〉、チッチー [tʃi̥ttʃi:] 〈小さい〉、アリマシタ [arimaʃi̥ta] 〈有りました〉

(イ) 無声子音と結合した /i、u/ が語末にあって、かつアクセントの山がない場合

ハシ [ha͡ʃi̥] 〈箸〉、〜デス [desɯ̥] 〈〜です〉

(註) ○印は無声化を表わす。

2-2 連母音

連母音の融合は、当方言においても盛んである。

(1) アイ・アエ

品詞や活用形およびそれが現われる位置に関係なく融合し、[εæ] アェー、あるいは [ε:] エァーで実現される。これらは、時に短呼化されて [ε] エァ、[e] エにも発音されることがある。年齢が下がるに従って、この [εæ] や [ε:] の発音が少なくなり、[e:] が優勢となるが、老年層に於ては、今でも [εæ] や [ε:] の音声が優勢で、音韻論的にも [e:] と対立している。例えば、[kɯrε:] クレァー〈暗い〉と [kɯre:] クレー〈黒い〉のようである。前者を /kurεR/ 、後者を /kureR/ と解釈する。

拍体系に /ε/ 軸が立つのは、ひとえにこのアイ・アエの連母音の融合による。

アイ・アエが [εæ~ε:] の音声で現われたのは5調査地点の中では当方言だけであった。ちなみに、加藤正信氏によれば、東北地方の南部や新潟県では [ε:] で実現され、宮城県気仙沼市では [εæ]、岩手県盛岡市では [æ] の音声で実現されている。(1)

[joriεæ〜joriε:]ヨリアェー〜ヨリエァー〈寄り合い〉、[hεæ〜hε:]ハェー〜ヘァー〈灰〉、[kεæ〜kε:] カェー〜ケァー〈貝〉、[dεækɯ~dε:kɯ] ダェーク〜デァーク〈大工〉、[nεæ〜nε:] ナェー〜ネァー〈苗〉

アイは、時にアーと発音されることもある。

ハヤー〈早い〉、カーコサマ〈蚕様〉

(2) オイ・オエ

オイ・オエは [e:] エーと実現される。時に短呼化されて [e] と発音されることもある。

クレー〈黒い〉、ホセー〈細い〉、シレー〈白い〉、クリヒレー〈栗拾い〉、セーカゴ〈背負い籠〉、オベーテル〈覚えている〉、キケール〈聞こえる〉、ケーアーセ〈肥え合せ〉、ヒネーマタ〈檜枝岐〉、メーカス〈燃えかす〉

(3)　エイ

共通語と同じく、品詞や現われる位置に関係なく［eː］エーとなる。

エーガ〈映画〉、ケーサツ〈警察〉、ケート〈毛糸〉、ケーケン〈経験〉

(4)　アウ

ワ行四段動詞のアウは［oː］オーと実現される。

ツコー〈使う〉、カモー〈構う〉、チゴー〈違う〉、ナロー〈習う〉、モロー〈貰う〉

但し、「買う」はコーとはならずにカウと発音されている。

(5)　ウイ・ウエ

ウイ・ウエは［iː］イーと実現される。

ヤシー〈安い〉、サビー〈寒い〉、カリー〈軽い〉、アリーワ〈或は〉、イーノー　オサメ〈結納収め〉、シーフロ〈据え風呂〉

(6)　イエ

イエは［iː］イーと実現される場合と［eː］エーと実現される場合とがある。

ミータ〈見えた〉、ヒーミシ〈冷え飯〉、ネータ〈煮えた〉、ケーネァ〈消えない〉

以上のような融合現象は名詞に付属語が付いた場合にも盛んに生じる。

ヤメァー〈山へ〉、アスケー〈あそこへ〉、ムカシャー〈昔は〉、コンダー〈今度は〉、カキャーシネァー〈書きはしない〉

2-3　半母音

(1)　/j/

/ju/ ユはイと混同する場合がある。

イビ〈指〉、イーノー〈結納〉、クマノユ〈熊の胃〉

シュ、ジュの拗音は直音化してシ、ジと発音される。

オトコシ〈男衆〉、ウンテンシ〈運転手〉、シロナワ〈棕櫚縄〉、シジツ〈手術〉、ジッカン〈十貫〉、ニジーイチ〈二十一〉

連母音アイ・アエが［εæ～εː］と実現されることから /ju、jo、ja/ ユ、ヨ、ヤの他に /jε/ が認められる。

［jεæta～jεːta］ヤェータ～イァタ〈焼いた〉、ハヤェー～ハイァー〈早い〉

(2)　/w/

ア母音に挟まれた /w/ 音は脱落し、ア母音が長音化する傾向が著しい。

チャーン〈茶椀〉、カー〈川〉、アーミシ〈粟飯〉、ノザーナ〈野沢菜〉、アーテンボ〈あわてん坊〉、マーシテ〈回して〉、オイマーサレル〈追い回される〉

/we/ ウェの拍も認められる。

ツウェー〈強い〉

アイが融合して［εæ～ε:］となることから /wε/ こ拍が認められる。

［wεæta～wε:ta］ワェータ～ウァータ〈沸いた〉、オイワェー～オイウァー〈御祝い〉

2-4 子　音

(1) /g/ と /k/

ガ行子音は、語頭では破裂音の［g］で、語中、語尾は破裂音あるいは摩擦音［g～ɣ］で実現される。鼻音［ŋ］はほとんど聞かれない。

ガッコー〈学校〉、カンゴフ〈看護婦〉、イチゴ〈苺〉

/kwa/ クヮ、/gwa/ グヮの合拗音が認められる。但し、このクヮ、グヮは歴史的な合拗音に由来するものではなく、/ku+wa/、/gu+wa/ に由来するものである。

デックヮス〈出交す〉、ニグヮッツァー〈にぐわ沢（川の名前）〉

(2) /z/ 、/c/ 、/s/

(ア) ザ・ゾは、時に摩擦が弱まり、ダ・ドに聞こえる発音も現われる。

ザシキ～ダシキ〈座敷〉、サムシーゾ～サムシード〈淋しいぞ〉

(イ) サ・ザの子音が口蓋化して、シャ・ジャに発音される場合がある。

シャクキリ〈さく切り〉、アレシャ〈あれさ〉、シャカン〈左官〉、ジャシキ〈座敷〉、キジャム〈刻む〉

(ウ) /co/ ツォ、/ca/ ツァ、/ce/ ツェの拍が認められる。

ゴッツォー〈御馳走〉、カッツォ〈皮をむかない麻〉、イッツォク〈一足〉、オトッツァン〈お父さん〉、ショーッツァー〈塩沢（地名）〉、キタッツァー〈北沢（地名）〉、ツェーッポ〈杖〉

(3) /r/

ラ行子音［r］は、品詞に関係なく、語頭以外では脱落する傾向が顕著に認められ、当方言の特色の一つとなっている。

コイ〈これ〉、ダエ〈誰〉、マイ〈毬〉、カーシ〈辛子〉、イナイマツリ〈稲荷祭り〉、シウ〈為る〉、カエル〈枯れる〉、クイル〈呉れる〉、シナビウ〈萎る〉、コーガス〈転がす〉、アマイ〈余り〉、ヤマカー〈山から〉、ダカー〈だから〉、キラエル〈来られる〉、ヒトッキー〈一切り〉

また、ラ行音は促音化、撥音化の傾向が認められる。促音化は後にh・k・tの無声子音が接続する場合に生じ、撥音化は後にnやmの鼻音が接続する場合に生じる。

カッポシ〈刈り干し〉、ノッコンデ〈乗り込んで〉、ムスバッタ〈結ばれた〉、ツクンネァー〈作らない〉、ヘァーンネァー〈入らない〉、ナンメァー〈なるまい〉

(4)　/n/ 、 /m/ 、 /b/

語頭以外のノ・モは撥音化する場合が多い。

ソントキ〈その時〉、キモン〈着物〉、ウンタクテ〈重たくて〉

インノヒ〈戌の日〉、ようにヌも撥音化する例もある。

語頭以外でのマ行子音 /m/ はバ行子音 /b/ に発音されることが多い。

セベー〈狭い〉、アツバリ〈集まり〉、ヒボ〈紐〉、ツンボス〈燃す〉、ケブ〈煙〉、イネブリ〈居眠り〉

2-5　拍音素

(1)　促音 /Q/ の挿入が極めて盛んである。

ウルッチ〈梗〉、オットコシー〈男衆〉、サカナッツリ〈魚釣り〉、ヤマッカリ〈山刈り（山菜取り）〉、コナッチャ〈粉茶〉、イトッコアーセ〈いとこ合せ（いとこ同士の結婚）〉、オシアゲッパチマキ〈押し上げ鉢巻〉、ヤマッキ〈山着〉、ヌッケタ〈抜けた〉

(2)　促音化も極めて盛んで、いろいろな拍が促音化している。

ノゾッテ〈覗いて〉、ユッツケル〈結い付ける〉、ヌックナッタ〈ぬくくなった〉、ツッサス〈突き刺す〉、オットシ〈一昨年〉、オッテ〈落ちて〉、メッケタ〈見つけた〉、ヨコットク〈寄越しておく〉

(3)　撥音 /N/ が促音化する例も見られる。

オッパコ〈おんばこ（おおばこ）〉、フッタンニアル〈ふんだんに有る〉

以上の例は撥音が促音化し、それに伴ってその後の有声音が無声子音に変化した例である。

サッビョー〈3俵〉、テッデンデ〈てんでんで〉

以上の例は撥音が促音化しただけで、後の有声音は変化せず有声音のままの例である。その結果、共通語では促音は無声子音の前にしか立たないが、当方言では有声子音の前にも促音が現われている。

(4)　語末が撥音で終わる名詞に助詞「は」、「を」が接続する場合は、いわゆる連声現象が生じる。

ホンナカッタ〈本は買った〉、シャシンナトッタ〈写真は撮った〉、クメンノシウ〈工面をする〉、シケンノウケル〈試験を受ける〉

(5) 撥音 /N/ は［m］の前にのみ語頭に立ちうる。

ンマ〈馬〉、ンメァー〈美味しい〉

3 アクセント

当方言のアクセントは、群馬県の多くの地域と同様、東京式アクセントである。共通語と比べれば、各型に所属する語例に多少の出入りが認められるだけである。

表2

拍数	音韻論的解釈	型	所属語例
1	/○/	○▶	柄、蚊、血…(1類)　名、葉、日…(2類)
	/○˥/	●▷	絵、木、手…(3類)
2	/○○/	○●、○●▶	飴、口、鼻…(1類)　行グ、買う、シウ〈為る〉、煮る…(1類)
	/○○˥/	○●、○●▷	歌、橋、石…(2類)　足、犬、花…(3類)
	/○˥○/	●○、●○▷	アー〈粟〉、糸、笠…(4類)　秋、声、モコ〈婿〉…(5類)　書く、切る、来る、見る…(2類)
3	/○○○/	○●● ○●●▶	キモン〈着物〉、ケブリ〈煙〉、メメズ〈蚯蚓〉、狐…アスブ〈遊ぶ〉、運ぶ、借りる…(1類)　アケァー〈赤い〉、カリー〈軽い〉…(1類)
	/○○○˥/	○●● ○●●▷	モジナ〈むじな〉、頭、男、力…
	/○○˥○/	○●○ ○●○▷	蕨、茸、心、小麦…、シレー〈白い〉、クレー〈黒い〉…(2類)　イゴク〈動く〉、頼む、起きる…(2類)　歩く、隠す…(3類)
	/○˥○○/	●○○ ●○○▷	苺、狸、タンボ〈田〉、二回…、ケァール〈帰る〉、通る…(2類)　ヘァール〈入る〉…(3類)

3拍以上の名詞に、共通語では頭高型でない語が当方言では頭高型に発音される傾向が見られる。例えば表に示した「苺、たんぼ、二回」や、シャッキン〈借金〉、シンルイ〈親類〉、タケイサン〈竹井さん〉、ノビスギル〈伸び過ぎる〉。

一方、「蕨、茸」のように共通語で頭高型に発音される語の中で、当方言では中高型に発音される語もある。

また、4拍以上のアクセント節では、例えばスゲガサ〈菅笠〉、ヘビムコドン〈蛇婿どん〉のように、下がり目のある拍だけが高く発音される傾向も認められる。

4　文　　法

(1)　意志・勧誘表現

意志・勧誘表現には盛んに「ベー」が、時に短呼された「ベ」が用いられる。四段活用動詞にはその終止形に、一段活用動詞にはその未然形に接続する。サ変・カ変動詞には終止形及びその未然形に接続する。

イグベー〈行こう〉、ケァーンベー〈帰ろう〉、シベー〈見よう〉、ネベー〈寝よう〉、シベー～シウベー〈為よう〉、キベー～クルベー〈来よう〉

意志表現の「ベー」は［be:］で実現されるが、勧誘表現の「ベー」は［bεæ～bja:］で実現されれことが多い。これは「ベー」に終助詞「ヤ」が下接し、それが融合して発音されたものと考えられる。ちなみに、イグベーヤ〈行こうや〉の表現も頻繁に使用されている。

(2)　推量表現

推量表現には意志・勧誘表現と同じく「ベー」が用いられるが、その他に助動詞「ダ」を介した「ダッベー」（時き短呼化された「ダッベ」）も用いられる。

「ベー」が用いられる場合は、意志・勧誘表現の「ベー」とはイントネーションを異にしている。すなわち、意志・勧誘の「ベー」が下降調↘　で現われるのに対して、推量の「ベー」は波うった上昇調↗　で現われる。

イグベー～イグダッベー〈行くだろう〉、ヨロコンベー～ヨロコンダッベー〈喜ぶだろう〉、ミベー～ミウダッベー〈見るだろう〉、オチベー～オチウダッベー〈落ちるだろう〉、シベー～シウベー～シウダッベー〈為るだろう〉、キベー～クルベー～クルダッベー〈来るだろう〉

形容詞にはカリ活用の連体形に接続した形と終止形に接続した形が用いられている。

シロカッベー～シロイッベー〈白いだろう〉、アカカッベー～アカイッベー〈赤いだろう〉、ヨカッベー～イッベー〈良いだろう〉

年齢が高い人ほどカリ活用の連体形に接続させた形を多く使用し、逆に老年層でも比較的若い人は終止形に接続させた形を多く使用している。

この「ベー」も［pe:］の他に［ pε: ～pεæ～pja:］の音声が現われるが、「ベー」と同様、「ベー」に終助詞「ヤ」が接続した結果であろう。

群馬県の広い地域で意志・勧誘／推量が、ベー／ダンベーで言い分けられているのに対して、当方言では「ベー」がそのいずれの表現にも用いられているのが特徴的である。また、推量表現に使用される「ダ」を介した形が「ダンベー」とならずに「ダッベー」となることも当方言の特色である。

(3) 過去表現

過去表現は共通語と同じく「タ」で表わされてえるが、その他に「タッタ」も用いられている。この「タッタ」は回想のようにも思われるし、「〜していた」の意を表わしているようにも思われるが、明確ではない。「タ」と「タッタ」の相違については今後の課題の一つにしたい。

カイタ〜カイタッタ〈書いた〉、ヨンダ〜ヨンダッタ〈読んだ〉

(4) 可能表現

可能表現は、共通語のように助動詞「れる・られる」で表わされることは極めて少なく、可能動詞や「〜デキウ〈出来る〉」で表わされることが多い。

イゲル〈行ける〉、ヨメル〈読める〉、ミレル〈見れる〉、コレル〈来れる〉、オレモ　カククトガ　デキウ〈俺も書くことができる〉

不可能表現は、可能動詞＋打消の助動詞「ない」あるいは動詞の連用形＋係助詞「は」＋サレネァー（サレナェー）で表わされる。

イゲネァー〈行けない〉、ミレネー〈見れない〉、ヨミワ　サレネァー〈読めない（読みはされない）〉、シワ　サレネァー〈できない（為はされない）〉、イギャーサレネァー〈行けない（行きはされない）〉

(5) その他

(ア) 断定の助動詞「ダ」及びその連用形「デ」は、助詞「の」を介さずに、直接動詞や形容詞、助動詞に下接する。

ノミコムダヨ〈飲み込むのだよ〉、イッタダ〈行ったのだ〉、オラー　ワケァーダ〈俺は若いのだ〉

また、「ダ」の仮定形は「ナラ」とはならずに、「ダラ（バ）」あるいはrが脱落して「ダー（バ）」、更にそれが短呼化した「ダ（バ）」の形をとる。

コンターガ　イグダラバ〜イグダーバ〜イグダバ〈あなたが行くのならば〉

(イ) 尊敬の助動詞シャル、ラッシャルが認められる。四段活用動詞にはシャルが、その他の動詞にはラッシャルが接続する。但し、これらの命令形シャイ〜シェ、ラッシャイ〜ラッシェが専ら用いられている。

ノマッシャイ〜ノマッシェ〈飲みなさい〉、シマットカッシャイ〜シマトカシェ〈しまっておきなさい〉、ミラッシャイ〜ミラッシェ〈見なさい〉、キラッシャイ〜キラッシェ〈来なさい〉

(ウ) 願望を表わす補助動詞「下さい」に相当する形は「クイヤイ」あるいは「クダアイ」、またはアが脱落した「クダイ」で、盛んに用いられている。

ミテクイヤイ～ミテクダアイ～ミテクダイ〈見て下さい〉、キテクイヤイ～キテクダアイ～キテクダイ〈来て下さい〉

昔話の中には「泊メテ　クンナロ」のように「クンナロ」の形も用いられている。より古い形であろうと思われる。

(エ) 比況を表わす「みたいだ」に相当する形は「ミタヨーダ」である。青年層の人々は「ミチョーダ」のように発音している。

ゴミステバミタヨーナトコ〈ごみ捨て場みたいな所〉、ウミミタヨーダ〈海みたいだ〉

(オ) 比況の助動詞「ようだ」と様態の助動詞「そうだ」の意味を担っているのは「ゲダ」で、これも頻繁に用いられている。

トーッタトコロゲダ〈通った所のようだ〉、ソーゲダナ〈そのようだな〉、ヨイコダゲダイ〈良い子のようだ〉、イッタゲダ〈行ったようだ〉、ワルゲダカー〈悪そうだから〉、マチゲーナサゲダ〈間違いなさそうだ〉、フリゲダカー〈降りそうだから〉

ゲダは昔話の中にも「～ダッチューゲダ〈～だというそうだ〉」、「～ダゲダ〈～だそうだ〉」のようによく用いられ、「～だそうだ」という伝聞の意味ももっていると思われる。

(カ) サ変動詞「する」は、当方言では上一段化している。

終止形・連体形ーシル～シウ（時にシュー）〈する〉

仮定形ーシレバ～シェバ～シーバ〈すれば〉

(キ) カ変動詞「来る」も、上一段化の傾向が見られる。

未然形ーキネァー〈来ない〉

仮定形ーキレバ　〈来れば〉

(ク) サ行四段動詞の連用形はイ音便をとる。

トカイタ〈解かした〉、サイタ〈刺した〉

ちなみに、副詞「どうして」も「ドーイテ」となる。

(ケ) カ行四段動詞「行く」は、当方言でも「イグ」であり、ガ行に活用する。

(コ) 助詞「ガ」、「ヲ」、「ニ」の脱落は盛んである。

(6) 助　　詞

以下に主な助詞について述べる。

(ア) ガ

「ガ」は主格を表わす他に、オレガノダ〈おれのだ〉のように準体助詞「の」に相当する用法と、オラガウチ〈おれの家〉、オレガオヤジ〈おれの親父〉のように連体格を表わす「の」に相当する用法とがある。

(イ) キリ～キー

限定を表わす副助詞「きり」は、共通語では専ら打消を伴った述語をとるが、当方言で

は、例えばドクダミキー　アウゾ〈どくだみきり有るぞ〉のように、述語が打消を伴わない場合にも用いられる。

(ウ) ベー

限定を表わす共通語の副助詞「ばかり」に相当する。

ホンベー　ヨンダ〈本ばかり読んだ〉、ナイテベー　イネァーデ〈泣いてばかりいないで〉、ユーベーダ〈言うばかりだ〉

(エ) ガン

共通語の並立助詞「か」に相当し、対等の関係に立つ語を受ける。

ニゲベーガン　ニゲネァーベガン〈逃げようか逃げまいか〉

(オ) ケオン〜ケオ

共通語の接続助詞「けれど」に相当し、逆接の意を表わす。

シゴト　シベーケオン〈仕事をするだろうけれど〉、カタッテイッタケオ〈附いて行ったけれども〉

(カ) ドモ

専ら過去の助動詞「タ」に接続して確実の逆接を表わす。

ヤッテルヨーダッタドモ〈やっているようだったけれども〉

(キ) ムシ〜ミシ

目上の人に対して用いられる敬意を含んだ終助詞で、共通語の「ね」に相当する。また、間投助詞としても用いられる。

ソーダムシ〈そうだね〉、オーカッタミシ〈多かったね〉、オイネァーミシ〈すまないね〉

(ク) ン

共通語の終助詞「の」に相当する。

キノー　イッタン〈昨日行ったの〉

(ケ) オン

共通語の終助詞「もの」に相当する。

オラー　ソー　イッタオン〈俺はそう言ったもの〉

(コ) イ

共通語の終助詞「よ」に相当する。

ソーダイ〈そうだよ〉、ヨカッタイ〈よかったよ〉、クライ〈来るよ〉、ケァータゾイ〈帰ったよ〉

(サ) ナ

共通語の間接助詞「ね」に相当し、盛んに用いられている。

ソレデナ　オッサエタン〈それでね叱られたの〉

(シ) チャ

促音を伴って文末に現われ、共通語の「とさ」「よ」に相当する意味を表わす。

イッタッチャ〈言ったとさ、言ったよ〉、ソーダッチャ〈そうだとさ、そうだよ〉

5 そ　の　他

(1) 呼称

当方言では、同年以上の話し相手を、例えば「エーアニー〈栄兄（栄三郎さん）〉」、ユキアンネー〈ユキ姉（ユキ子さん）〉」のように、名前の前部に、男性であれば「アニー」を、女性であれば「アンネー」を付けて呼ぶのが一般的である。名前の前部の最後の拍がア母音やウ母音の場合は、「アニー・アンネー」のアが脱落したり、名前の部分のウが脱落して、「ミカンネー〈みか子さん〉」や「カンサカニー〈勘作さん〉」のように発音される。

かなりの高齢者に対しては名前あるいはその前部に「ドン」をつけて呼んでいる。例えば「ウメゴロードン〈梅五郎さん〉」や「フクドン〈福蔵さん〉」のようである。

(2) 人称代名詞

自称には、男性も女性も「オレ～オイ」が用いられている。

対称には、目上の場合には「コンタ」（複数は「コンタラ」）[(2)]が、同等及び目下に対しては「ニシ」（複数は「ニシラ」）が用いられている。

「コンタ」が用いられる場合の文末にはムシ～ミシが現われる。

(3) ズラネァー

「そんな程度ではない」、「それどころではない」の意を表わす場合、「ズラネァー」が用いられる。

サンネンズラネァー〈3年程度ではない〉、クーズラネァー〈食うどころではない〉

6 お　わ　り　に

30時間の録音資料によって、片品村古仲の方言の特色をまとめたので、音声・音韻についてはかなり体系的に記述できたが、文法はやや手薄になった。また、語彙についても、『全国方言辞典』[(3)]に掲載されていない語（例えば「ステンニ　ヤラレタ〈最初にやられた〉」や「ステンのシゴト〈最初の仕事〉」というように用いられる「ステン」や「少しずつ」の意を表わす「ダンコダンコ」、「もらい子をした後にできた子」を示す「ネッチョッコ」など）や、共通語と同り語形でも使用のされ方が異なる語（例えば、「カタル〈附いて行く〉」、「ハゲシク　アル〈たく

さん有る〉」「イッコー　イソガシイ〈とても忙しい〉」など。）や、珍しい表現（例えば「ヒトニ　ナル〈結婚する〉」、「ヒトットシ〈同じ年〉」など。）などなど続出しているが、残念ながら体系的な把握はできなかった。

この30時間の貴重な資料に、調査表による調査資料を加えて、今後、体系的な研究を推し進めて行きたい。

注

(1) 加藤正信「方言の音声とアクセント」（『方言と標準語―日本語方言学概説』筑摩書房、1975年）参照。

(2) 大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図』第三巻（桜楓社、1976年）によると、関東地方で「コンタ」を用いている地点は、群馬県下では次の5地点のみである。利根郡水上町藤原湯の小屋、利根郡片品村戸倉、利根郡新治村字永井、利根郡片品村大字須賀川、吾妻郡六合村入山引沼。利根郡と吾妻郡の六合村のみに「コンタ」が認められるのである。
この「コンタ」は古語「こなた」に由来する語であろう。

(3) 東条操編『全国方言辞典』（東京堂、1951年）

片品村土出字古仲の会話

1　自然談話——昔の衣類の話

話し手　A　星野　関次　（男）
B　星野　晶　（男）
C　星野栄三郎　（男）
D　星野ユキ子　（女）
E　星野タマノ　（女）

D　ムカシャー　オカシーヤイナー。　アノ　コンノ　ハー　ハカマオサー　ヌッタッテ
昔は　おかしいよな。　あの　紺の　はあ　袴をさ　縫ったって

イッカイ(1)　ヨソイギノ　ヤツッチューワ　イチネンジュー　シマッテ　オイテ　ソーシテ
一回　外行きの　やつというのは　一年中　仕舞って　置いて　そうして

アレダッペヤイ　ハカマー　ドッカ　イグニ　ハイテッテ　クルト　ドゾーニ　マタ
あれだろうよ　袴(を)　どこか(に)　行く(の)に　はいてって　来ると　土蔵に　また

シマイコンデ　（E笑）　アンナ　ヨイジャー　ネァー　テマー　シテナー
仕舞い込んで　あんな　容易では　ない　手間(を)　してなあ

（Eンー。ソーダミシ(2)。／うん。そうだねえ。）　ナンデ　アンナ　コト　シタカーワ　シラネ(3)……
なんで　あんな　事(を)　したかは　知らない

B　ナンタッテ　アノ　コンノ　ハカマー　ジョートーノ　アレダッタモノ。
なん(ていっ)たって　あの　紺の　袴は　上等の　あれだったもの。

D　アー。
ああ。

B　フツー　オリイロ(4)ダッペ。
普通(は)　織り色だろう。

D　ンー。　ソーサ。
うん。　そうさ。

E　イチネンニ　イッツォクト(5)　（Dソーサ。／そうさ。）　マェーオ　（Dマェーッテ。ン。／前って。　うん。）
一年に　一足と　前を

トリカエテ　モラエバ　ハ　ソレコソムシ
取り替えて　もらえば　もう　それこそねえ

D　アソコノ　ウチジャー　ヨメゴガ　モ　メンドーミガ　イーナンテ　（Eアー。／ああ。）
あそこの　家では　嫁が　もう　面倒見が　いいなんて

ホメラレルックレァーデナー。
褒められる位でなあ。

E アテツギナンテ　シテミシ。
当て接ぎなんて　してねえ。

B オリイロノ　ハカマガ　フツーダモンナー。
織り色の　　袴が　　普通だものあ。

A ソーダッタッペナー。
そうだったろうなあ。

B コンバカマ　コンバカマチェバ　ジョートーノ…　(時計の音)
紺袴　　紺袴といえば　　上等の

D ヤマッキ[6]ダッテ　ジジマ[7]デナー　コセーテ　モラッテ
山着だって　　地縞でな　　作って　　もらって

E ヤマッキ[8]。　カスリデモ　アレバ　イーケオムシ。　(笑)
山着。　　飛白でも　　あれば　いいけれどねえ。

D ンー。
うん。

E ジジマデ。
地縞で。

B イチネンニ　イッチャクサーナー。
一年に　　一着さなあ。

D イチネンニ　イッチャク。　([B]笑)　マーズ　ダェージニ　シタカー　イチネンニ
一年に　　一着。　　まず　　大事に　　したから　　一年に

アレダッペー　ジジマノ　ヤマッキオ　イチメァート　ハカマ　コンバカマ。
あれだろう　　地縞の　　山着を　　一枚と　　袴　　紺袴。

オリイロデー　マー　オリイロ[9]。　コンバカマガ　ツクッテ　モレァーバ
織り色で　　まあ　織り色。　　紺袴が　　作って　　もらえば

ジョートーダケオン　オリイロデ　アレダッペ。
上等だけれど　　織り色で　　あれだろう。

イチネンダケッチャー　ヨソイギニ　シマットイタモンナ。
一年だけっては　　外行きに　　仕舞っておいたものな。

E ソーダムシ。
そうだねえ。

D イマ　アンナ　モノ　ミニ　ツケロッナンチェバ　([B]笑)
今　　あんな　物(を)　身に　着けろなんていえば

ヤガッテ　　ミニ　ツケヤ　シネーナー。
いやがって　身に　着けは　しないなあ。

E アリャー　シネーカ　イマデモ。
ありは　　しないか　今でも。

D　ネァーナェー。
　ないなあ。

E　シマッテ　ネーカイ。
　仕舞って　ないかい。

D　ンー。　シマッテ　ナェー。
　うん。　仕舞って　ない。

B　フンゴミ(10)ャ　アル。　（笑）
　ふんごみは　ある。

D　ンー。　オラモ　フンゴミャー　アル。
　うん。　おれも　ふんごみは　ある。

E　オラモ　アルヨ。
　おれも　あるよ。

D　フンゴミャー　アルケオン
　ふんごみは　あるけれど

B　フユー　ナニモ　シンネー(11)　ウチニ　イルニャー　アノ　アレ…　アレダイナ
　冬　何も　しない(で)　家に　居るには　あの　あれ…　あれだよな
　ノノコ(12)オ　キテモ　ナンデモ　フンゴミ　ハイタ　ホーガ　ラクダイナー。
　ののこを　着ても　なんでも　ふんごみ(を)　はいた　方が　楽だよなあ。

D　アー。
　ああ。

A　ンー。
　うん。

B　アノー　スボンナンゾ　ハイテルヨリナ。
　あの　ズボンなんぞ　はいてるよりな。

A　ソーダ　ソーダ。　オラー　フンゴミ　ニソッグレ　アルゾ。
　そうだ　そうだ。　おれは　ふんごみ　二足位　あるぞ。

D　マー　トシオ　トッテ　ウチニ　イルッターバ　フユワ　ノノコニ　フンゴミガ
　まあ　年を　とって　家に　居るならば　冬は　ののこに　ふんごみが
　サイコーダッペ　ヌククッテ　ラクデ。
　最高だろう　温くて　楽で。

E　トシヨリワミシ。　ウゴカットモ　イー　ヒト
　年寄りはねえ。　動かなくとも　いい　人

D　ンー。　ダカー　トシトッターバ　キルヨーニ　ノノコモ
　うん。　だから　年とったならば　着るように　ののこも
　コセァートイタ　ホーガ　イーナー。
　作っておいた　方が　いいな。

E　コセートケバ　イー。
　作っておけば　いい。

A　ダケ　スッポー[13]ヨリャー　イマノ　アノ　ドテラミタイノガ　ラクダイ。
　だけど　スッポーよりは　今の　あの　どてらみたいのが　楽だよ。

B　ラクダ　ラクダ。　カタ　ハンナェーシ。
　楽だ　楽だ。　肩(が)　はらないし。

D　[14]　ンー。
　うん。

A　アラェーノ　トシヨリワ　ヨク　スッポー　ノノコー　キテルケオンサー。
　荒井の　年寄りは　よく　すっぽう　ののこを　着てるけれどさ。

D　ヘー。　ンー　ソー　ユーバ　シンショーアニー[15]ダナンテ　コ　スッポー
　へえ。　うん　そう　言えば　真勝兄なんて　こ(の)　スッポー(を)
　キテタイナー。
　着てたよなあ。

A　ンー。　ンー。　ショータデン[16]ナンザ　イマデン　キテベー。
　うん。　うん。　塩沢(の)田なんぞは　今でも　着てるだろう。

D　アー　ショーッツァーデンナゾ　イマダッテ　キテル。
　ああ　塩沢(の)田などは　今だって　着てる。

E　ワラグツガ　ツクレルカイ。
　藁沓が　作れるかい。

C　ワスレタイ。
　忘れたよ。

E　ユーフニ　シター。　ミツアニーワ　ツクッテ　ミタ
　こういう風に　した。　晶兄は　作って　みた

B　カンゲァー　カンゲァーダー　ツクレベー。
　考え　考えなら　作れるだろう。

E　エッ？
　えっ？

B　カンゲァー　カンゲァーダー　ツクレルヨ。
　考え　考えなら　作れるよ。

（注）

(1)　二段下の行の「ハイテッテ　クルト」にかかる。

(2)　目上に対して用いられる文末助詞。ナーより待遇価値が高い。ミシともムシとも発音される。

(3)　シラネケオンと続くべきところ。Bの話が始まったのでシラネで止まってしまった。

(4)　「織り色」は普通濃い浅黄色を言うが、当方言では薄い紺色を言う。

(5)　袴一足。袴も「一足、二足、…」と数える。

(6)　仕事着。

(7)　木綿の縞文様。

(8)　発音・意味不明。

(9)　「紺袴と言っても普通はまあ織り色の袴だ」という意。

(10)　フンゴミはもんぺ。

(11)　シンネーと聞こえるがシネー（デ）と言うべきところ。

(12)　綿入れ。

(13)　筒袖。

(14)　発音・意味不明。

(15)　年上の男性につける敬称。かなりの年上になるとドンをつけて呼ぶ。

(16)　塩沢（地名）の田作さん。ショーッツァーデンと言うべきところ。

2　場面設定の会話

話し手　A　萩原　大次　（男）
　　B　星野ユキ子　（女）

見 送 り

A　オイ　キョーワ　テンキガ　ワルゲダカラ　イオツリ　イッテ　クラー。
　おい　今日は　天気が　悪そうだから　魚釣りに　行って　来るよ。

B　コンナ　テンキノ　ワリーニ　イオツリ　イクンカイ。
　こんな　天気の　悪いのに　魚釣りに　行くのかい。

A　テンキノ　ワリーヒガ　ツレルダッチューニー。
　天気の　悪い日が　釣れるのだというのに。

B　へー。　ジャ　ドコニ　ハケゴナンテ　ミンナ　オイテ　アルダイ。
　へえ。　じゃ　どこに　はけごなんて　皆　置いて　あるんだい。

A　セッチンモノキニ　ミノト　カサト　ハケゴガ　アルカー　モッテ　コイヤイ。
　雪隠物置に　蓑と　笠と　はけごが　あるから　持って　来いやい。

B　アイ。　ヨーツリザオワイ。　イッショカエ。
　はい。　魚釣り竿は。　一緒かい。

A　ヨーツリザオモ　イッショダ。
　魚釣り竿も　一緒だ。

B　ソイジャー　ミンナ　イッショニ　モッテ　クライ。
　それじゃあ　皆　一緒に　持って　来るよ。

A　ンー。
　うん。

B ハイ。 オトッツァン ミンナ モッテ キタヨ。
はい。 お父さん 皆 持って 来たよ。

A アー ソーダ。 ソイジャ ビクエ ヤキモチノ フタッツモ マー イレテ クイヤイ。
ああ そうだ。 それじゃ びくへ 焼き餅の 二つも まあ 入れて くれやい。

B ハイ。 ソイジャー アイ ブチウ イレタヨ。
はい。 それじゃあ はい ぶちを 入れたよ。

A ソイジャー サー カサダナエ モノオキノ カサダナエ カサノ ブッコレガ
それじゃあ さあ 傘棚へ 物置の 傘棚へ 傘の ぶっこれが

アルカー クシノ ゴジッポンモ ケズットケヤイ。
あるから 串の 50本も 削っとけやい。

B アイヨ。 ソイジャー クシ ウーント ケズッテ オクカー ユーハンノ オセーニ
はいよ。 それじゃあ 串(を) ううんと 削って おくから 夕飯の お菜に

クーヨーニ ハヤク ナルベク キラッシャイ。 イシワ アノ カワン ナカノ
食うように 早く なるべく 来なさい。 石は あの 川の 中の

イシャー ノメルカー スベンナェーヨーニ キオツケテ イッテ キラッシャイ。
石は のめるから すべらないように 気をつけて 行って 来なさい。

A ソリャー セワネ ナレテルカー。 ソイジャ イッテ クラー。
それは 世話ない 慣れてるから。 それじゃ 行って 来るよ。

B ソイジャー キオツケテ イッテ キラッシャイ。
それじゃあ 気をつけて 行って 来なさい。

迎 え

A オイ カェーッタゾイ。
おい 帰ったぞ。

B マー キタムシー。 ヨカッタヨー。 ドラ ハケゴー ミシテ ミラッシャイ。
まあ 来たねえ。 よかったよ。 どら はけごを 見せて みなさい。

ドンナニ タ サカナガ トレタガナ。
どんなに 魚が とれたかな。

A コンナニ ツッテ キタヨ。 コレオ。
こんなに 釣って 来たよ。 これを。

B ドーラエ。 マー ヤマメニ イワナモ イルダゲダイ。
どら。 まあ 山女に 岩魚も 居るようだよ。

A キョーワ ミズガ ニゴッタモンデ マーサカ ツレガ ヨカッタイ。 コンナ デッケー
今日は 水が 濁ったもんで とても 釣れが 良かったよ。 こんな 大きい

イワナガ コンナニ イルトワ オモワナカッタイ。
岩魚が こんなに 居るとは 思わなかったよ。

B　マー　ソイジャー　ヨカッタムシー。
まあ　それじゃあ　良かったねえ。

A　ターダ　アメガ　フッタモンデ　ビショタレダ。　コリャ　サーブクッテ
ただ　雨が　降ったもんで　びしょ濡れだ。　これは　寒くって

ドーショモネ。　フロ　ワイテルカー。
どう仕様もない。　風呂　沸いてるか。

B　アー。　ユワ　ワカシテタヨ。　シューフロエ　ハヤク　ヘーラッシャイ。
ああ。　湯は　沸かしてたよ。　据え風呂へ　早く　入りなさい。

A　ソイト　クシウ　ゴジッポングレー　ケズットイタカー。
それと　串を　50本位　削っといたか。

B　ケーズッテ　オイタヨ。
削って　おいたよ。

A　ソイジャー　マー　イーケオ　ソイジャー　オラ　マー　ユー　ハイッテ　クラー。
それじゃあ　まあ　いいけど　それじゃあ　おれは　まあ　湯へ　入って　来るよ。

B　ソイジャー　ハヤク　シューフロエ　ヘァーラッシャイ。　ソーシーバ　ソノ　マニ
それじゃあ　早く　据え風呂へ　入りなさい。　そうすれば　その　間に

オイガ　シオヤキガ　イーカイ。
おれが　塩焼きが　良いかい。

A　ソーダナー　シオヤキニ　シベーヤ。
そうだなあ　塩焼きに　しようや。

B　ソイジャー　シオヤキン　シテ　ユーハンノ　オセーン　ナルヨーニ　シトクカー
それじゃあ　塩焼きに　して　夕飯の　お菜に　なるように　しとくから

ハヤク　シューフロエ　ヘァーラッシャイ。
早く　据え風呂へ　入りなさい。

A　アー　サビ。ソイジャー　ユエ　ハイッテ　クラー。
ああ　寒い。それじゃあ　湯へ　入って　来るよ。

B　アイ。
はい。

5　邑楽地方の方言

調査地点　邑楽郡大泉町下小泉字松原

調査員	飯塚英夫	
同補助	菅谷　勘	
話　者	井桁モト	女（明治40年生）
	小此木泰助	男（明治39年生）
	金子定一	男（大正14年生）
	金子虎吉	男（明治33年生）
	窪田隆一	男（昭和17年生）
	栗原音吉	男（明治39年生）
	栗原宇太郎	男（大正８年生）
	栗原ふく	女（大正３年生）
	山口あさ	女（明治31年生）
	山口恵司	男（大正５年生）

大泉町の概観

菅　谷　　勘

1　位置・地形・地質

大泉町は群馬県の南東部に位置し、町の南部には利根川が流下している。太田市南部から大泉町・千代田町を経て板倉町に至る利根川の北岸地帯は、邑楽台地と呼ばれる洪積台地が、利根の流れに沿うように並行して東西方向に発達している。この台地は西から東に向かって、僅かな傾斜が認められる。

町はこの邑楽台地のほぼ西端部に位置し、そのあたりの標高はおよそ30mを計る。市街地のほとんどはこの台地上に形成され、市街地の北・東・南東部には沖積地が開らけている。この台地の北方には渡良瀬川が長時間かけて造った扇状地が展開している。これらの沖積台地・扇状地には桑が植栽され、近年までは養蚕がさかんであった。

大泉町松原

今回方言調査を実施した松原地区は、町の中央部からやや北に位置し、太平洋戦争中に開発された地域で、最近は商店街・住宅地となっている。

2　人　口・面　積

町の面積は18.41㎢、県内市町村中4番目に狭い町であるが、人口は昭和60年10月に実施された国勢調査によると、35,925人で町村では最も多い。大泉町の人口推移を「表1」で見ると、昭和15年から昭和20年にかけて、人口の急増が認められる。また、昭和35年以後もかなりの増加が認められる。前者の急増の大きな要因は、太平洋戦争に伴った中島飛行機株式会社小泉製作所の拡充により、従業員が町外から大量に流入したためであると考えられる。後者の増加には東京三洋電機株式会社の順調な発展と従業員採用の結果であることが指摘できる。

表1

年　次	小　泉　地　区		大　川　地　区	
明治5年	下小泉村	896人		
〃 22年	小　泉　村	2,571人	大　川　村	3,526人
〃 35年	小　泉　町	3,097人		3,225人
〃 44年		3,480人		4,171人
〃 44年		3,591人		4,197人
大正3年		3,572人		3,999人
〃 9年		4,186人		4,440人
大正14年		4,260人		4,460人
昭和5年		4,388人		4,440人
〃 10年		4,473人		4,564人
〃 15年		6,090人		5,969人
〃 20年		12,562人		8,483人
〃 25年		9,704人		8,693人
〃 30年		10,293人		8,726人
昭和35年	大　泉　町			19,128人
〃 40年				21,078人
〃 45人				24,692人
〃 50年				28,306人
〃 55年				31,195人
〃 60年				34,862人

松原地区は、行政区画では大泉町大字下小泉字松原で面積は約28haである。人口は昭和61年10月1日現在1,152人である。この地区内には中島飛行機株式会社関係の社宅が多数建築され、昭和15年から20年にかけて町外から移住して来た人も多く見られる。

3　沿　　革

町の大部分は戦国時代の末期、天正18年（1590）に徳川四天王と称された榊原康政が館林城を賜い、邑楽・新田等十万石に封ぜられたのを皮切りに、天和2年（1682）まで館林領となっていた。しかし、同年徳川五代将軍綱吉の長子徳川徳松丸が館林城主になった時に、町の大部分は旗本知行の入会領となった。ちなみに、この時点での本町の総石高は約7,204

街の様子　公園

石であった。

慶応4年（1868）に「五ケ条の誓文」が官政化し「政体書」が公布され、地方行政は府・藩・県の三治制となり、この時本町は岩鼻県の所管となった。その後、館林藩の所管に移り、明治4年の「廃藩置県」によって館林藩から館林県に、さらに、山田・邑楽・新田郡の東毛三郡は栃木県に移管され、明治9年に熊谷県に一時所属して、群馬県の管制下に置かれることになった。

明治政府による地方自治制度確立の波は、県段階の統合改廃が一段落すると、今度は町村にも及び、松原地区を含む下小泉村は、明治22年に上小泉村と合併して小泉村となり、明治35年には町制が施行されて小泉町となった。そして、昭和32年大川村と合併し今日の大泉町が誕生した。

4　産　　業

江戸時代を通して主要産業が農業であったことは本町でも例外ではない。松原地区を含む下小泉村の天和2年(1682)の稲作生産高は、1,896石であり、13名の旗本により分割されていた。その他の産業としては小泉焼、利根水運を利用した古海河岸問屋業などがあげられる。このうち小泉焼は江戸時代の初期から生産が始まり寛政年間（1789～1800）に渡辺利助と言う人が植木鉢と火鉢を造り始め、享保年間（1716～1735）には「十能瓦」の生産を開始し、大正時代には60軒の生産者を数えたと言う。古海河岸問屋については寛保2年（1742）の古記録があり、大麦・小麦・大豆・米等が積み出され、塩・肥料が入ってきた。

明治・大正時代になると養蚕、織物業が注目されてくる。ことに後者は邑楽の「中野絣」の賃機が古海地区で盛んになった。

昭和13年には中島飛行機株式会社が進出し、昭和34年に入ると東京三洋電気株式会社が誘致され、昭和44年には大利根工業団地が造成され、近年では富士重工業群馬製作所大泉工場の進出により、工業都市として繁栄している。

5　交　　通

古代の幹線道路である東山道が本町の北方を、西から東（太田から足利）方面に貫通していた。「延喜式」には「上毛野国」から「五箇」を経て「武蔵国」に至るルートも記されてる。これに関しては古くから、「東山道」が太田から千代田町五箇を通って武蔵に入り、武蔵から足利に向うという説と、太田から枝分れして武蔵に入るルートがあるという2説がある。後者の説を支持するとすれば、太田から本町古氷を経、仙石・古海を経て五箇に向うルートが想定でき、古代、大泉が交通の要所を占めていたことが知れる。

江戸時代に入ると利根水運の発達により、古海河岸が活況を呈していったが、当時の官道からははずれていた。明治に入り西洋文化が大泉にも影響を及ぼし、明治から大正時代にかけては阪東鉄道、中原(チュウゲン)鉄道等が計画され、大正6年には中原鉄道が開通し、昭和12年には名も新たにして東武小泉線が誕生した。

また、道路が整備されるに従いバス交通も急速に発達し、大正時代の末には、館林・小泉・伊勢崎、足利・小泉、太田・小泉間の3本のバス路線が通っていたというが、今日ではマイカーの普及により本町でもほとんど姿を消している。

6 教　　育

町内において教育についての記録が最初に現れるのは、江戸時代に入ってからのことである。上・下小泉及び寄木戸等で寺小屋教育が行われていた。寺小屋の指導者には僧や神官等があたり、時には年長者が代りに授業を行うこともあった。この時代は男尊女卑思想が強く、町内の寺小屋でも、上座を男が占めたりする場所もあった。また、儒教思想の影響のためか、男女別室で授業を行うところもあった。授業内容は、「読み・書き・算盤」が主であったが、下小泉村の寺小屋では和算や儒教も教えていたという。このような状態は、明治6年の学制発布まで続いた。

7 民　　俗

昭和13年から昭和20年にかけて中島飛行機株式会社、昭和34年以後の東京三洋電機株式会社、大利根工業団地の造成等により、全国から多くの労働人口が流入し、生産形態・消費形態の変容を招いた。また、多量の人口流入は地域の地縁的結合関係をくずし、それに伴い風俗、習慣、信仰等も変化した。

昭和10年代までは松原地区を含む小泉町の東部地域は、邑楽町と婚姻圏を形成していたが、生活圏の拡大、家族制度の変容により婚姻圏は解消していった。また、農業生産と密接に関連していた春・夏・秋祭り、庚申講、十五夜、女正月、盆などの年中行事、民俗信仰も、生活様式の変化に伴い、消滅したり形骸化して本質が失なわれてしまっているものも

正法院

多い。

民俗芸能面では、小泉地区と吉田東・西に神楽があったが、吉田東地区は消滅し、小泉地区の「社日神社の太々神楽」も消滅寸前である。また、仙石地区では獅子舞いが「仙石のささら舞い」として現存している。

民間信仰面では小泉神社に「盟深探湯（くがたち）」神事と呼ばれる県内でもめずらしい神事があるが、これは江戸時代に始められたもので、神社の客寄せ的な意味も含まれている。

本町では、戦前、戦後を通じて２度の大きな人口流入を経験し、町外ばかりでなく日本全国から労働人口が入ってきた。このようなことからも、また、交通機関の整備拡大、マスコミュニケーション等の発達により、昔からの風俗、習慣等はほとんど失われている。

大泉町下小泉(松原)の方言

飯塚英夫

1 はじめに

邑楽郡地方は、群馬県では唯一東関東方言に属する地域である。東関東方言は、邑楽地区を西限として、それより東と北に広がって分布している。つまり、福島県南部（檜枝岐地区を除く）・茨城・千葉・栃木（足利地区を除く）・埼玉県東部に行なわれている方言である。西関東方言は、邑楽地区を除く群馬県・福島県檜枝岐地区・栃木県足利地区・埼玉県西部・東京都下・神奈川県・山梨県郡内地区に行なわれている方言である。

大泉町は東関東方言として分類されてはいるが、西関東方言地帯と接しているという地理的条件から、経済的・文化的交流はむしろ西側との方が密である。当然の結果として、言語的にも西関東方言の特徴を多く持っている。邑楽郡の東端板倉町と比べてみると、板倉方言がより東関東方言的であるのに対して、大泉町方言は西関東方言に入れた方がよいと思われるくらいである。板倉方言の無アクセントに対して、大泉方言は東京式アクセントを持っている。しかしながら、音韻・文法・語彙においては、東関東方言的様相を呈していることもまた事実である。

要するに、大泉方言は、東関東方言と西関東方言の特徴をあわせ持った中間的な方言と考えるべきであろう。

2 音声・音韻

2-1 音韻体系

大泉町下小泉の拍体系は次の通りである。(音声記号は［　］で示し、音韻記号は、／／で示す。)

表1

u	o	a	e	i	ju	jo	ja	wa
hu	ho	ha	he	hi	hju	hjo	hja	—
gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja	—
ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja	—
—	do	da	de	—	—	—	—	—
—	to	ta	te	—	—	—	—	—
cu	co	ca	(ce)	ci	cju	cjo	cja	—

zu	zo	za	ze	zi	zju	zjo	zja	–
su	so	sa	se	si	sju	sjo	sja	–
ru	ro	ra	re	ri	rju	rjo	rja	–
nu	no	na	ne	ni	nju	njo	nja	–
bu	bo	ba	be	bi	bju	bjo	bja	–
pu	po	pa	pe	pi	pju	pjo	pja	–
mu	mo	ma	me	mi	mju	mjo	mja	–
N	Q	R						

この拍体系と共通語のそれと比べると次の点で異なる。

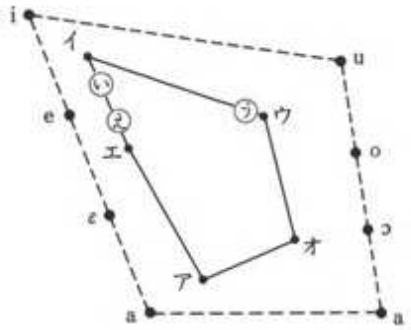
(ア)　いわゆるガ行鼻音　［ŋ］に欠ける。

(イ)　/co/ ツォ、/ca/ ツァ、/ce/ ツェの拍がある。/ce/ の拍を認めるのには少し問題があるかも知れないが、50歳代の話者が［tsepperiɲ］（人名からきた飛行機名）という発音をした。また、板倉方言には、［nakattse］（ナカッツェ３人兄弟のまん中）という語形もあるので、大泉方言にもかっこ付きで /ce/ の拍を認めることにした。/co/ 、/ca/ の例として、［gottsosama］（ゴッツォサマ、ごちそうさま）、［otottsaɲ］（オトッツァン、お父さん）などがある。

2-2　母　音

(1)　東関東方言の特徴の一つである母音「イ」と「エ」の混同がみられる。大泉の「イ」は共通語の「イ」と比べると、やや口の開きが大きく、［è］で示され、大泉の「エ」は、共通語の「エ」よりやや口の開きが狭くなり、基本母音の［e］に近いところで発音されている。次の図に示されているように、両者の調査点が互いに接近しているために、この二つの母音はしばしば混同するのである。特に語頭に用いられる単独の「イ」は「エ」（［e］）と表記した方がよいくらいである。ただし、「エ」が「イ」になることはほとんど見られない。

イッパイ→エッパイ［eppaè］、ヒガシコイズミ→ヘガシコエズミ［hegaʃikoezumi］（地名）、オイッコ→オエッコ［oèkko～oekko］（甥）



（図１）基本母音

i. e. ɛ. a. a . ɔ. o. u

（D. ジョーンズの基本母音）

イ、エ、ア、オ、ウ

（共通語の母音）

い、え、ア、オ、う

（大泉方言の母音）

(2) 「ア」と「オ」は共通語のそれと同じとみてよい。大泉の「ウ」は共通語よりほんの少しだけ中舌化しているが、共通語と同じと考えてもよいくらいである。

(3) 母音間の転訛が、語彙的であるが少なからず見られる。次にその例をあげてみよう。

イ→エ　エネカリ（稲刈り）、メメズ（蚯蚓）
イ→ア　スマッコ（隅）、マザル（混じる）
イ→ウ　スク（敷）、ヌゲル（逃げる）
イ→ユ　ユワ（岩）、ユワシ（鰯）

オ→ア　マット（もっと）
オ→ウ　アグ（あご）、スル（剃）

ウ→イ　イゴク（動く）、チミタエ（冷たい）
ウ→ア　アラク（歩く）
ウ→オ　モコー（向こう）、モコサン（婿）

「エ」と「ア」は他の母音に転訛する例を探すのが難かしい。西関東方言においては、「エ」が「イ」に変わる例を多数見つけることができるが、この大泉方言においてはきわめて少ないのである。

(4) 連母音［ai、ae、oi、oe、ie］は［e:］になる。ただし語尾にあっては［e］と短かく発音される傾向がある。

ハイリグチ→ヘーリグチ、コズカイ→コズケ〜コツケ(小遣い)；ヒックリカエス→ヒックリケ(ー)ス、ナエトリ→ネートリ(苗取り)；ヒドイメニアッタ→ヒデーメニアッタ(ひどいめに合った) オボエテイル→オベーテル（憶えている） ミエル→メール（見える）

連母音［ɯi］はふつう［i:］となり、［aɯ］は［a:］となる。

サムイ→サミー〜サミ、アカルイ→アカリ(ー)；カウベー→カーベ(ー)(買いましょう・買うつもりだ・買うだろう)

(5) 母音の「イ」と「ウ」の無声化が目だつ。母音の無声化現象は、茨城・栃木などの東関東方言よりも、西関東方言においての方が顕著である。大泉方言では、次の場合に無声化する。

㋐ 無声子音に挟まれた場合、とりわけ次の音節に広母音のある場合。

キタ［ki̥ta］(北、来た)、クサ［ku̥sa］(草)、アシタ［aʃi̥ta］(明日)

㋑ 無声子音に伴われて語尾にきた場合。

アキ［aki̥］(秋)、マツ［matsu̥］(松)

2-3 半母音

(1) /j/ は脱落したり、添加されたりする。

ユデル /juderu/ →ウデル /uderu/ ；ヨナベ /jonabe/ →オナベ /onabe/ ；

ハヤ /haja/ →ハー /haʀ/ （早くも）；ザシキ /zasiki/ →ジャシキ /zjasiki/ ；

サジ /sazi/ →シャジ /sjazi/（スプーン）；ゾーリ /zoRri/ →ジョーリ /zjoRri/ ；
サケ /sake/ →シャケ /sjake/ （鮭）；

(2) 「直前に母音または長母音がくるとき、 /ju/ が /i/ となる傾向がある。特に「ア」に続く場合に著しい。」（杉村孝夫：「群馬の方言」p. 144）

マユ /maju/ →マイ /mai/ ；ショーユ /sjoRju /→ショイ /sjoi/ ；
オカユ /okaju/ →オカイ /okai/ →オケー /okeR / （お粥）

(3) /—jai/ 、 /—jui/ 、 /—joi/ が /—eR/ 、 /—iR/ になる。

ハヤイ /hajai/ →ハエー /haeR/ （早い・速い）；カユイ /kajui/ →カイ（—） /kai(R)/ （痒い）； ツヨイ /cujoi/ →ツエ（—） /cue(R)/

(4) /w/ は語中・語尾で脱落し、語頭にあっても脱落するものも少しある。特に「ア」の直後ではその傾向が著しい。

カワラ /kawara/ →カーラ /kaRra/ （瓦・河原）；ウチワ /uciwa/ →ウチア /ucia/ ～ウチヤ /ucija/ ；タワラ /tawara/ →ターラ /taRra/ ；ワタシ /watasi/ →アタシ/atasi/

(5) /wa/ の直前に /i/ があると、 /wa/ は /ja/ となる。

イワイ /iwai/ →イヤイ /ijai/ ；イワシ /iwasi/ イヤシ /ijasi/ ；
イワセル /iwaseru/ →イヤセル /ijaseru/ （言わせる）

(6) /—wai/ の /w/ が脱落して融合長音化する。

ヨワイ /jowai/ →ヨエー /joeR/ ；グワイ /guwai/ →グエー /gueR/ （具合）

2-4 子　音

大泉方言の子音は、共通語とほぼ同じとみてよい。ただし、語中・語尾のガ行子音は、共通語の場合のように［ŋ］にはならず、破裂音［g］を用いている。

次に語彙的に見られる音韻転訛の例をあげる。

(1) /z/ ⇄ /d/

ワリーゾ /wariRzo/ →ワリ（—）ド /wari(R)do/ （悪いぞ）；ナゼ /naze/ →ナデ /nade/ ナンデ /naNde/ ；ナデル /naderu/ →ナゼル /nazeru/ ；クマデ /kumade/ →クマゼ /kumaze/ （熊手）

(2) /b/ ⇄ /m/

サビシー /sabisiR / →サミシー /samisiR / ；ケブリ /keburi/ →ケムリ /kemuri/ （煙）；ヒモ /himo/ →ヒボ /hibo/ ～ヒボッコ /hiboQko/ ；キミガワルイ /kimigawarui/ →キビガワリ（—） /kibigawari(R)/ （気味が悪い）

(3) /s/ ⇄ /c/

マッスグ /maQsugu/ →マッツグ /maQcugu/ （まっすぐ）；スクム /sukumu/ →ツグム /cugumu/ （小さくなる、身をかがめる）；ツガイ /cugai/ →スガエ /sugae/

(4) /ko/ → /ho/ 、 /so/ → /ho/（但し、語頭にあらわれる /ko/ と /ho/ に限られる。）

ココ /koko/ →ホコ /hoko/ ；ソレデ /sorede/ →ホレデ /horede/ ；ソーシタラ /soRsitara/ →ホシタラ /hositara/

(5) /hi/ → /si/

ヒト /hito/ →シト /sito/ ；ヒッパル /hiQparu/ →シッパル /siQparu/ ；ニヒキ /nihiki/ →ニシキ /nisiki/

/hi/ が次に無声子音（[p•t•k•s•ts•t •tʃ]）を伴うとき、 /hi/ は /si/ になるという一般的傾向がある。しかし、反対に /si/が /hi/ になることはきわめてまれである。

(6) /r/ → /n/ 、 /ri/ → /si/

カクレル /kakureru/ →カクネル /kakuneru/ ；ハリガネ /harigane/ →ハネガネ /hanegane/ ；ヤッパリ /jaQpari/ →ヤッパシ /jaQpasi/ ；アカリ /akari/ →アカシ /akasi/

(7) /n/ → /d/

アメナラ /amenara/ →アメダラ /amedara/ （雨ならば）；ノク /noku/ →ドク /doku/ （退く）

(8) /ta/ → /ha/

タタク /tataku/ →ハタク /hataku/

(9) /k/ → /g/

イク /iku/ →イグ /igu/ ；カバン /kabaN/ →ガバン /gabaN/ ；カニ /kani/ →ガニ /gani/ ；カサバル /kasabaru/ →ガサバル /gasabaru/

(10) /zu/ → /cu/

アズキ /azuki/ →アツキ /acuki/ ；シズカ /sizuka/ →シツカ /sicuka/

(11) 撥音•促音が多く、語気の荒い言葉という印象を与える。撥音化するのは、ラ行音、 /ki/ 、 /si/ 、 /ci/ 、 /ni/ 、 /mi/ が [n•t•d•tʃ•m•b•z•g] などの直前におかれる場合である。

/toranai/ → /toNnai/ （取らない）； /surubeR/ → /suNbe(R)/ （しよう、するだろう）； /norina/ →noNna/ （乗りなさい）； /aredake/ → /aNdake/ （あれだけ） /kakimawasu/ → /kaNmasu/ （かきまわす）； /osidasu/ → /oNdasu/ （追し出す•追いだす）； /ucimakeru/ → /uNmakeru/ （容器の中の液体をこぼす・空にする） /icinici/ → /iciNci/ （１日）； /humitobasu/ → /huNdobasu/ （ふんどばす）

促音はｐ・ｔ・ｋの長音化で、関東地方全般に認められる現象である。大泉方言にも数多く

の例を発見することができる。これも語気を強めるのに一役かっていることは言うまでもない。

/oicuku/ → /oQcugu/（追いつく）；/hikinuku/ → /hiQkonuku/（引き抜く）；/hukikakeru/ → /huQkakeru/（吹きかける）；/ucitobasu/ → /buQtobasu/（強くなぐる）；/osikabuseru/ → /oQkabuseru/（かぶせる）；/cukitoRsu/ → /cuQtosu/（つき刺す）

(12) 同化や連声現象などが盛んに行われている。

/hajaku koi/ → /haQkoi/（早く来い）；/hikikaesite iku/ → /siQkeQtegu/（引き返して行く）；/sibeno uci/ → /sibeNci/（志部の家）；/oretaci wa/ → /oretacja(R)/（おれたちは）；/bakudaN o/ → /bakudaNno/（爆弾を）/bakudaN wa/ → /bakudaNna/（爆弾は）；/asobito juQtaQte/ → /asobiQtaQte/ 又は /asobiQcuQtaQte/（遊びとは言っても）；/kio kiQte kite kure/ → /kiR kiQcite kure/（木を切って来てくれ）；/kuwa o cukuranaku naQte simaQte wa/ → /kua cukuNnaku naQcjaQcjaR/（桑を作らなくなってしまっては）；/taisjoR hacineN to juRnoga/ → /taisjoR hacineNteNga/（大正8年というのが）；/zika N ga tatanakereba/ → /zikaNga tatanakera/（時間がたたなければ）；/hitocu guraisika/ → /sitocu gureka/（一つぐらいしか）；/niho N zucu → /nihoNcu/（2本ずつ）

3　アクセント

邑楽郡では唯一の東京式アクセントを持つところである。大泉方言はアクセントからみれば西関東方言に入れた方がよい。

4　文　　法

(1) 意志・勧誘表現

中高年層の間では、「ベ(ー)」が最も一般的に用いられている。それはふつう動詞の終止形に接続するのであるが、下一段動詞においては未然形に接続する方が多い。また、動詞の終止形が「ル」で終る場合には、撥音化した形も使われる。

おれが仲人シテヤルベ（してあげよう）。田んぼヘエグベ（行こう）。また後でクンベヤ（クルベヤ）（来よう）。まだ時間があるから新聞ノミルベ（ミンベ）（～を見よう）。早く仕事スンベ（スルベ）（しよう）。どっかへ行ってカリテキテクレベヤー（借りてきてあげ

よう)。おかずはこれからカンガエベヤ（考えよう)。

上の例に示されているように、「ベ」のこの用法には後に終助詞「ヤ」が添えられることが多い。

(2) 推量表現

意志・勧誘と同様に「ベ」を用いる。動詞の後に続ける場合には、終止形に直接「ベ」をつけたり、「ダンベ」(「ンダンベ」) をつける。形容詞の場合には、「カンベ」か「ダンベ」をつけ、名詞の場合には、「ダンベ」をつけて表わす。さらに、過去の推量を表わすためには、「タンダンベ・ダンダンベ」(動詞の場合)、「カッタンベ〜カッタンダンベ」(形容詞の場合)、「ダッタンベ〜ダッタンダンベ」(名詞の場合) を添える。

電車はもうすぐクルベ (来るだろう)。何も言わなくったって掃除ぐれースルダンベ (するだろう)。誰が医者にカカルンダンベ (かかるのだろう)。あの川はフカカンベ (深いだろう)。田舎の空気はキレーダンベ (澄んでいるだろう)。そんなに高くっちゃ　でっかいテレビダンベ (テレビだろう)。ユンベワ　ゼーブン　クッタンダンベ (昨夜はずいぶん食べたのだろう)。この本ナ　ハー　ヨンダンダンベ(〜はもう読んだのでしょう)。あのときは　オッカナカッタンベ〜オッカナカッタンダンベ(恐しかったろう)。昔はこの川も　キレーダッタンベ〜キレーダッタンダンベ(澄んでいたでしょう)。きのう　アスクニ　オッコッテタナー　サイフダッタンベ。〜サイフダッタンダンベ (あそこに落ちていたのは財布だったでしょう。)

次は、否定語＋「ベ」を取り上げてみよう。

動詞の未然形＋ ｛「ネーベ」／「ナカンベ」／「ネンダンベ」｝

形容詞の未然形＋ ｛「ネーベ」／「ナカンベ」／「ネンダンベ」｝

形容詞の連体形＋「ン」＋ ｛「ジャネーベ」／「ジャナカンベ」／「ジャネンダンベ」｝

名詞＋ ｛「ジャネーベ」／「ジャナカンベ」／「ジャネンダンベ」｝

ヨマナカンベ、ヨマネンダンベ、ヨマネーベ(読まないだろう)。キナカンベ、キネンダンベ、キネーベ(来ないだろう)。フリーンジャナカンベ、フリーンジャネンダンベ、フリーンジャネーベ（古いものではないだろう)。ウレシクナカンベ（ウレシカナカンベとも)、ウレシクネンダンベ（ウレシカネンダンベとも)、ウレシクネーベ（ウレシカネーベとも）（うれしく(は)ないだろう)。コショージャナカンベ、コショージャネンダンベ、コショージャネーベ（故障ではないだろう)。

以上の各例の文末に助詞「ナ」をつけて用いられることが多い。そうすると、軽い詠嘆や念を押す気持が込められることになる。

もう一つ否定的推量を表わすものに「メー」がある。助動詞「まい」がもとの形である。

ソーデモ　アルメー（アンメー)。(そうでもあるまい)

(3)　過去表現

共通語の「タ」・「ダ」の他に「タッタ」「ダッタ」という形を用いる。ただしこれは形容詞には付けられない。

この間あの人がキタッタヨ。子犬を10びきもウンダッタヨ。

「タッタ」(「ダッタ」) はニュアンスとしては、忘れかけていたものを思い出したときに使われる。「来た」ということが「あったなあ」という軽い詠嘆の気持ちを含むこともある。

過去の習慣を回想して述べるときに、「～タモンダニ」、「～ダモンダニ」を用いる。

オヤガ　ヨーク　ユッタモンダニ(親がよく言ったものだなあ)。

(4)　疑問表現

大泉方言には疑問の形式として次のようなものがある。

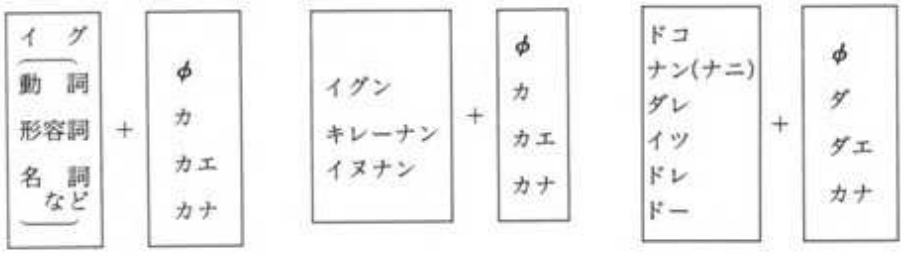
① 話文末を上昇調で発音する。

② 話文末に「カ」「カエ」「カナ」を添えて上昇調で発音する。

③ 話文末に「ン」「ンカ」「ンカエ」「ンカナ」を添えて上昇調で発音する。ただし、話文末が名詞の場合には、「ン」ではなく「ナン」となる。

④ 「どこ」「なに」「だれ」「いつ」「どれ」「どう」などの疑問詞については、単独で上昇調に発音する形式と「ダ」「ダエ」や「カナ」を添えて上昇調に発音する形式がある。

どの形式を用いるかは、相手との親疎の程度により、その場の状況により微妙な使いわけがなされているようである。以上をまとめると次のようになる。



(5) 格助詞「ゲ」について

大泉の「ゲ」は格助詞「に」と「へ」の用法のうちその一部分を担う用法である。

田中章夫氏の『助詞（3）』(『岩波講座・日本語7・文法II』) の中の例文について「ゲ」と入れ換え可能か否かを検討し、次のような結果が得られた。田中氏があげた「に」と「へ」の例文56のうち、「ゲ」と入れ換えられるのは次の6例だけである。

① 子供に留守番を頼む。

② 隣の娘に思いをかける。

③ 妹に看病をさせる。

④ 子供に不似合な服。

⑤ 政府筋へ働きかける。

⑥ 兄へ話を通す。

共通語においては、本来「へ」が用いられていたところにも「に」を使う傾向がある。しかし、「に」と「へ」が基本的に持っている性格があるので、ニュワンスに少し差がでてくることはある。「に」は存在の場や帰着点、あるいは比較の基準などを静的に定位するものであるのに対して、「へ」は、基本的な性格として、動的な指向性や経過性をもっている。(田中、1977)

さて、上の①〜⑥の例の「に」「へ」に共通していることは、「動作の向けられる対象、作用の及んでいく対象」ということである。

更に「ゲ」がもっとも自然に使われるような例文をあげてみよう。

⑦ 馬ゲ早く水クレロ。

⑧ コレ　オメゲ　ヤルヨ。

⑨ アンタゲ　メセテモンガアル。

⑩ この子は　オヤジゲ　ヨクニテラー。

⑪ 植木ゲ　水ヤレ。

⑫ メメズゲ　ションベン　シッカケンナ。

⑬ 仏様ゲ　花をアゲル。

⑭ 人形ゲ　玉がアタッタ。

⑮ バスゲ　イシッコ　ブツケタ。

⑯　馬ゲ　ノッテゲ。(「車ゲノッテゲ」は不可)

「○○ゲ」+（「△△△（オ）」）+動詞

（「△△△（オ）」）+「○○○ゲ」+動詞

上のような形で使われ、動詞は「対象に働きかけるという意味を持つ動詞」であることが多いから、他動詞がふつうである。しかし、⑩⑭⑯のように自動詞といっしょに用いられることもある。「○○○」のところには、「人」や「動物」が最も自然に入りやすい。話し手が容易に影響を及ぼすことができる程度の対象である方がよいからだ。

東京の話しことばでは、これらをすべて「に」でもって済ましているのに対して、大泉方言では、「に」と「へ」を東京以上に使い分けているだけでなく、この「ゲ」にもそれ固有の守備範囲を与えていると考えることができる。

話者の「ゲ」を使う意識としては、見知らぬ人に対しては失礼のような気がするそうだから、ふだんのことばであり、親しい間柄でないと使わないことばであろう。若年層は「ゲ」を使うことはない。

(6)　その他

㋐　助詞「ばかり」に相当する「ベー」

意志・勧誘・推量を表わす「ベ(ー)」のほかに、助詞「ばかり」も大泉方言では「ベー」となるのであるから、他地方の人から見ると「ベーベー言葉の本家本元」と思われるかも知れない。

「ばかり」がなぜ「ベー」になるかというと次のような音韻変化をとげて「ベー」になったのである。

bakari→bahari→bahai→baai→bai→bee

群馬県の他の地方でも「バイ」という語形が使われている（杉村、1984）が大泉では更に変化して「ベー」となったのである。

サケベーノンデルト体こわすぞ。エマ　ツイタベーダ(今着いたばかりだ)。カラダベーデカクテモ　チカラガ　ネード（体ばかり大きくても力がないぞ)。

但し、「ばかりか」、「ばかりに」は、「ベーカ」、「ベーニ」とはならないようである。

「ちょっと油断したばかりに」は「……シタベーニ」とはならない。

㋑　条件・仮定を表わすのに「ダラ」が用いられる。否定の場合は、「ネンダラ、ナケラ、ネケラ」を用いる。

オメガ　エグンダラ　オレモ　エグベ(君が行くのであれば俺も行こう)。ヨマネンダラ　オレゲ　メセロヨ(読まないのなら、俺に見せてくれ)。アシタ　アメガ　フラナケラ　エグヨ（明日雨が降らなければ行くよ)。

㋒　許容を表わすのに「ナンボ～ダッテ（タッテ）」「エックラ～ダッテ（タッテ）」を用いる。

オメガ　ナンボ　スキダッテ　ダメダ(おまえがいくら好きでもだめだ)。エックラ　オゾクッタッテ、ヨワクッチャ　ナンニモナンネ（いくら頭が良くても体が弱くてはなにもならない)。カネナンカ　エックラ　ネクッタッテ　ヘッチャラダー(金なんかどんなになくても平気だ)。

㋓ 所有・所属の格助詞「の」の代わりに「ガ」が用いられる。特に前接する名詞が人称代名詞の場合にあらわれる。

コンダ　オレガバンダ(今度は俺の番だ)。オラガチエ　キネーカ（俺の家に来ないか)。

㋔ 共通語の「とても、大変、非常に」の代わりに「エラー」「マ(ー)サカ」「マッサカ」を頻繁に使う。昔はあまりしばしば「エラー」と言ったので、県内の他地方の人から「オーラ郡」ではなく「エーラ郡」だとからかわれたとか。

エラー　デッケンジャネン(とても大きいですね)。コラー　マーサカ　ベンリダ(これは大変便利だ)。

㋕ 「もう」とか「すでに」と同じ意味で「ハー」という表現をよく使う。しかし、ときには単に間つなぎの「ハー」もある。

ハー　キタン（もう来たのか)。アサ　ハー　ヨジオキダ（朝、4時起きだ)。ハー　オワッチャッタンダッテドー（すでに終ってしまったのだそうだよ)。

㋖ 接頭語が多い。

ブンマサレル(目が回る程こき使われること)。フングルケース(足などを踏みちがえる)。オッタッタ（建てた)。ブックラセル（なぐる)。カックラセル（なぐる)。ツッペル（川や水たまりなどに入ってしまう)。ドグラセル（なぐる)。

㋗ 接尾語は接頭語ほど多くはないが、かなりある。

オンナッコ(女の子)；スマッコ(スミッコ)(角)；ホリッコ(堀)；。ノメッチョ(とがった先端)；バンガタシ（晩方)；キレッコ（布)

㋘ 文末詞の特徴的なものを少しあげると次のようなものがある。

○～ベヤ

オレガ　オセテ　ヤンベヤ(私が教えてあげましょう)。コノイタズラ　オメダンベヤ(このいたずらはお前だろう)。カイモンニ　イッテンベヤ（買い物に行こう)。

○～ガネ(ー)

ホダンベガネー（そうでしょうよ)

ソダンベガネー（　〃　）

ンダンベガネー（　〃　）

㋙ 敬語法

オハヨー　ゴザンス(お早うございます)。マゴガ　デキテ　ホントニ　ヨガンシタネ(孫が生まれて本当によかったですね)。ドーゾ　オアガンナンショ(どうぞお上り下さい)。

ジャシキエ　アガラッセ（座敷へあがって下さい）。アガッテ　クラッセ（上がって下さい）。シンブンノ　トッテクンナ（新聞を取って下さい）。

㋚　老年層は男女とも親しい間柄で話すとき自分のことを「オレ」といい、自分たちのことを「オレラ」「オランド」という。

トシトッテタッテ　オランドヨリ　ゲンキダガネ（年を取っていても私たちよりも元気ですよ）。

㋛　相手を「苗字＋チ」や「居住地＋チ」で呼ぶことができる。「チ」は「ウチ（家）」を意味し、近親感を感じさせる呼び方である。親戚同志は後者で呼び合うことが多い。

カネコンチモ　エガネカエ（金子さんも行きましょうよ）。

キョー　イーノンチガ　キタヨ（今日飯野の家の人が来たよ）。

5　お　わ　り　に

この小論をまとめるにあたっては、群馬県立女子大学の篠木れい子先生をはじめ静岡大学の中條修先生、恩師の森下喜一先生から数多くのご教示をいただきました。また幸運にも、大泉町に講演に来られた柴田武先生からは貴重なご意見をいただきました。教育委員会の今井英雄先生、よき相談相手の菅谷勘さん、大泉町の話者の方々には大変お世話になりました。この場をかりて厚くお礼申し上げます。

参考文献

○　天沼寧ほか『日本語音声学』1978　くろしお出版

○　大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語』1975　筑摩書房

○　田中章夫「助詞（3）」（大野・柴田『岩波講座・日本語7・文法II』）岩波 1977

○　杉村孝夫「群馬県の方言」（飯豊・日野・佐藤『講座方言学』）国書刊行会　1984

○　板倉町史編さん委員会『利根川中流域・板倉町周辺の言語（方言）』1979

○　川上　蓁『日本語音声概説』1977　桜楓社

大泉町下小泉字松原の会話

話し手　A　栗原　音吉
　　B　金子　定市
　　C　栗原宇太郎

1　自然談話——庚申様

A　ソレデネ　ソノー　（鳥の鳴き声）　ナンテーカ　コーシンサマノ　ウーント
　それでね　そのう　（　　）　なんていうか　庚申様の　うーんと

コーシンコーッテ　ユンガ　ミンナ　ドコノ　コーチニモ　アッタンミテーネ。
　庚申講と　いうのが　みんな　どこの　部落　にも　あったようだね。

（Bハー　ハー　ハー。）　ウン。　ソイデ　ソノ　コーシンサマッテヒニャー　アラ
（はー　はー　はー。）　うん。　それで　その　庚申様という日には　あれは

ムカシダカラ　イユッ　アノー　ヨッチャー　オマツリシタワケナンダナ。
　昔だから　××××　あのう　寄っては　お祭りしたわけなんだな。

（Bンー。）　（咳ばらい）　ンデー　コーシンサマデ　アト　ユーメーナンガ　ホラ
（ん）　（　　）　それで　庚申様で　あと　有名なのが　ほら

ムロン　コッ　オーイズミチョーシナンカモ　アルケド　アー　キタムキノ　オー
無論　大泉町史などにも　あるけれども　あー　北向きの　おー

ジゾーサマッテナー　ホラ　アノー　コーシンサマッテノワ　ホレ　ショーコク　オー
地蔵様というのは　ほら　あの　庚申様というのは　ほれ　×××××××　おー

ナン　ショ　ショーコー(1)ジャーネーヤ　アソコワ
×××　×××　商工会　ではないや　あそこは

B　アソコノ　ライフ(2)　ノ　ソバカイ。
　あそこの　ライフ　の　そばかい。

A　ウン　アノー　エビスサマノ　（Bエビスサマノソバノ。）　ウン　アスコノ　スマッコニ(3)
　うん　あのう　恵比須様の　（恵比須様のそばの　）　うん　あそこの　片角に

イマデモ　アルガネ(4)　（Bン　イマデモアル。）　ネッ　アレ　キタムキノ。
　今でも（ほら）あるだろうよ　（ん　今でもある。）　ねっ　あれ　北向きの。

B　アレト　アスクニモ(5)　アルンダヨ　カミチョーニモ(6)。　（子供の声）
　あれと　あそこにも　あるんだよ　上町にも　（　　）

A　ソ　ソ　カミチョーニモ　アルン(7)。
　そう　そう　上町にも　ある。

B　アスコノー　ハシノ　タモトニネー。
　あそこの　橋の　たもとにねー。

A　ソ　ソッ　ソッ　ソッ　ンー　アレナンカモ　ズイブン　フルインミテーヨ。
　そう　そっ　そっ　そっ　ん　あれなども　随分　古いみたいよ。

[C ウーン。／うーん。] [B アレモ　コーシンサマダヨネー。／あれも　庚申様だよねー。]　ン　ソレデネー。／ん　それでねー。

B　アレガ　ダッテ　ハナシノ　ヨースジャー　ムカシノー　トミオカジョーノ　アノ
あれが　だって　話の　様子では　昔の　富岡城の　あの

ナンテカナー　ンー　ツーヨーモンテユーカサー　[A ン。／ん]　アノー　カイド(8)ーノ
なんというのかなー　ん　通用門というかねー　あのう　街道の

フチニ　ミンナ　コーシンサマガ　アッタンダッ　テユー　[A ンー。／ん。]　ハナシオ
縁に　みんな　庚申様が　あったんだ　という　話を

キータコトガ　アルンダケドサー　ムカシノ　[笑]　シトニ。　ソレガ
聞いたことが　あるのだけれどねー　昔の　人に。　それが

ケッキョクー　イッペ　イッ　イッカショニ　マトマッタノガ　[A ンー。／ん。]　イマ　ユー
結局　××××　×××　一箇所に　まとまったのが　今　言う

ヒャッコジ(9)ンノ　アスケー(10)　モッテッタンダガナサー　[子供の声]
百庚申の　あそこへ　持って行ったのだかねー

A　アノネー　オレタチガ　トショリニ　キーテル　ハナシャーネー　[A ンー。／ん]
あのねー　俺達が　年寄りに　聞いている　話はねー

コーシンサマッテナネー　[B ンー。／ん]　アノ　コーシンテナー　トキダネ　ヨースルニ
庚申様というのはねー　あの　庚申というのは　時だね　要するに

[B ハー　ハー。／はー　はー]　ネ　ヒノエウマダトカ　ア　ナントカッテユー　ソーユー　ウー
ね　丙午だとか　あ　なんとかという　そうゆう　うー

[子供の声]　キセツオ　マツッタンダケドモ　アリャー　サルダヒコダイジンダッテ
季節を　祀ったんだけれども　あれは　猿田彦大神だって

[B サルタヒコダイジン。／猿田彦大神。]　ネッ。／ねっ。

B　ソレデ　アノー　カミチョーニ　アルヤツァーサー　[A ン。／ん]　オサルガ　ホッテ
それで　あのう　上町に　あるものはねー　お猿が　彫って

アルンダヨ。　[A ホッテアー　ンー　ンー　ンー。／彫ってある　ん　ん　ん。]　ソレガ　メザル　ミザル(11)
あるんだよ。　それが　見ざる　見ざる

キカザルダ　[A ンー　ンー　ンー。／ん　ん　ん。]　ネー　ミッツノサルガネ　ホッテアルヨ。
聞かざるだ　ねー　三つの猿がね　彫ってあるよ。

[A ン　アル　アル。／ん　ある　ある。]　アレワ　ダカラ　モット　マエダヨネ。
あれは　だから　もっと　前だよね。

A　ンー　アレワ　フリーン(12)ミテーヨ。　[B アレワ　フルイヨ。／あれは　古いよ。]　アレワ　フリーンミテー
ん　あれは　古いみたいよ。　あれは　古いみたい

[B フルイヨ。／古いよ。]　ン　[B マエダヨ。／前だよ。]　ン　ヒャッコジンダノヨリ　フリーンミテー。
ん　ん　百庚申などより　古いみたい。

[B ン。
ん]

C コナイダモ　ソレー　ミタラサー　[B ン。
この間も　それを　見たらねー　ん]　ソノ　カッコーシテルンダヨ
その　かっこうをしているんだよ

サルガネ　[B ン。
猿がね　ん]　ミマイ　キクマイ　ハナスマイッテサー　[B ソー　ソー。
見まい　聞くまい　話すまいとねー　そう　そう。]

メオ　カクシテネ　[B メオカクシテ　ミミヤッテンノ。
目を　隠してね　目を隠して　耳をやってるの。]

キクマイッテ　ミミオ　カクスンデネ　[B ソー　ソー。
聞くまいと　耳を　隠すのだよね　そう　そう]　デ　ハナスマイット
で　話すまいと

イヤー　コー　ヨーク　デキテルナートモッテ　[B アルン　アル。
いやー　こう　よく　できているなーと思って　ある　ある。]　コー　ゼンブ
こう　全部

ソックリ　ホッテアルンネー。
そっくり　彫っているのねー。

B アル　[A ソレデネー。
ある　それでねー。]　カミチョーニ　アルンガ　ソーフーニ
上町に　あるのが　そういうふうに

ナッテルガネ　ンー　ンー。
なっているでしょうよ　ん　ん。

A ソッデー　ソノー　コーシンサマッテノワ　ホラ　イマ　イッタトーリ
それで　そのー　庚申様というのは　ほら　今　言った通り

サルダヒコダイジンツッタ　ジダイモ　アルラシーンダナ。
猿田彦大神といった　時代も　あるらしいんだな。

[B ハー　ハー　ハー　ハー。
はー　はー　はー　はー。]　デ　サルダヒコダイジンテナネー　マー　イマノ
で　猿田彦大神というのはねー　まー　今の

ノーリトノ　コトバデ　ユート　アノー　アマツカミ　クニツカミッテユー　コトバガ
祝詞の　言葉で　いうと　あのう　天津神　国津神という　言葉が

アルダンベー　ノリトニ。[B ンー　ンー　ンー。　C アー　アー。
あるだろう　祝詞に。ん　ん　ん。　あー　あー。]　スルト　アノー
すると　あのう

クニツカミノホーダッタンダッテネ。[B ハ　ハー。
国津神の方だったんだそうだね。は　はー。]　ダカラ　ドチャクノ
だから　土着の

[B アー　ハー。
あー　はー。]　ドチャクノ　カミサマダッタンダッテナエ。
土着の　神様だったそうだね。

[B アー　ハー　ハー。　C ンー。
あー　はー　はー。　ん。]　ソレデ　ソノー　ア　アマクダッテキタ
それで　そのー　天下って来た

カミサマオ　ミチアンナイヤク　シタンダッテナー。　[Bアー　アー　アー。／あー　あー　あー。]　[Cンー。／ん。]
神様を　道案内役　したんだってなー。

ダカラ　アー　ドチャクノ　カミサマダッタンダカシンネナー。
だから　あー　土着の　神様　だったのかも知れないねー。

B　ダカラー　ソコノー　[Aンー。／ん]　トチノー　ヨースルニ　シゴジンミテーナ
だから　そこの　土地の　要するに　守護神みたいな

[Aソ　シゴジンダネー。／そう　守護神だねー。]　アー　[Cソーダヨナー。／そうだよなー。]

A　ソーユーコト　ユーナー。　ンダカラ　オレタチガ　キーテルナー　チッチェー
そういうことを　言うなー。　だから　俺たちが　聞いているのは　小さい

カンノン　コーシンサマー　キット　エクツモ　ミッケラー　アルカネンケド
観音　庚申様は　きっと　いくつも　見つければ　あるかもしれないけれど

デ　ダイタエ　アノ　マツバラノ　オテラニモ　コーシンサマーガ　ヤッパリ
で　大体　あの　松原の　お寺にも　庚申様が　やっぱり

アルダー　[Bハー　ハー。／はー　はー]　[Cン　ン　ン。／ん　ん　ん。]　アノ　シカクナ　ヤツガネ。
あるだろう。　あの　四角の　やつがね。

[Bハー／はー]

注

(1)　「ショーコク……ショーコー」は、「商工会」というつもりであったが、その言葉が出なかった為の言いよどみと思われる。

(2)　「ライフ」とはその当時あったスーパーマーケットの名前。

(3)　「スマッコ」は「角」という意味。「スマ」とも言う。

(4)　「～ガネ」は話相手が誤解をしていたり、忘れかけているような場合に、注意をうながしたり、念を押したり、思い出させたりする強調の文末詞。「～ガナ」も同じ意味。ただし同等もしくは目下に対して使う。

(5)　「アソコ」は「アスコ」と発音されることが多い。

(6)　地名。

(7)　動詞や形容詞の終止形につき、当地方ではよく用いられる表現形式である。共通語の「～のだ」（あるのだ）にあたる用法であるが、当方言ではもう少し軽く、共通語の「～の」（あるの）と同じくらいの言い方である。「アルン」の「ン」を平板もしくは下降調に発音せれば、「あるのだ」の意味になり、上昇調に発音すれば「あるのか」の意味となる。

(8)　「カイドー」には、①「日光街道」などのような主要国道、②県町村道、③大通りから家に通ずる私道、という意味が含まれてえる。この場合には①もしくは②の意味である。③の意味で使う場合には、多少音声を違えているという。すなわち［keːdo］とか［kɛːdo］と発音すると③のことを指し、［kaedoː］と言えば①か②と解されている。尚、②は［oːkaɲ］ともいう。

(9) 庚申様（猿田彦大神）をたくさん一カ所に集めて祀ってあるところ。1974年に城之内公園内に遷座。

(10) 「アスケー」の音声は［asukɛː］。

(11) 「メザル　ミザル」はどちらかが「イワザル」になるべきもの。

(12) ［Φɯɾiː］と発音されている。

(13) 「シトツグレッツ」は「一つぐらいずつ」の意味。

(14) 「タサヤンチ」は「多三郎さんの家」の意味。「ヤン」は「～さん」にあたり、「チ」は「家」のこと。金子多三郎氏のこと。

2　場面設定の会話

見送り

話し手　A　小此木　泰　助（男）
　　B　井　桁　モ　ト（女）

B　アー　キョーワ　アメガ　フリソーダケンド
　　あ　今日は　雨が　降りそうだけれど

A　ンー　アー　ボーシガ　［Bダエジョブカエ。／大丈夫かい。］　アルダロ　ドコニカ。　アッ
　　ん　あー　帽子が　　あるだろう　どこにか。　あっ

［Bア／あ］　カッパ　ダシテクレ　カッパ。
　　合羽　出してくれ　合羽。

B　アー　モノオキノー　タナノ　ウエニ　アルカラ。
　　あー　物置きの　棚の　上に　あるから。

A　ンー　ソーカ。　［Bアー／あー］　アー　アッタ。　アッタ。　ンジャ　コレデー　ンジャ
　　ん　そうか。　　あー　あった。　あった。　それでは　これで　では

コレキテ　マー　イッテクルカラ。　ンダケドーサー　ホレナー　ナンドモ
これを着て　まー　行ってくるから。　だけどねー　ほらね　何度も

ユーヨーダケドサー　［Bアー／あー］　オヒルノ　シタクグレー　シテクレヨー。
言うようだけどねー　　昼食の　支度ぐらい　してくれよー。

B　オ　オベントー　ヨーイシテ　オクカラ。　［Aアー／あー］　モッテ　ワスレズ
　　××　お弁当を　用意して　おくから。　　持って　忘れずに

モッテッテー。
持って行って。

A　アエヨー。　ンー　アッタッタ。　ンジャー　イッテクルカラナー
　　あい。　ん　あった。　それでは　行ってくるからなー。

B　アッ　キ　キオツケテ。
　　あー　××　気をつけて。

A　キオツケテクレー。
　気をつけてくれ

B　キオツケテ　エッテキヤッセ。
　気をつけて　行って来て下さい。

A　アイヨー　ンジャ　イッテクルカラネー。
　あい　では　行ってくるからね。

迎　え

A　バーサン　イマ　カエッタゾ。
　ばあさん　今　帰ったぞ。

B　オカエンナサエ。
　おかえりなさい。

A　キョーワ　ツレタヨ。　イヤンベニ。
　今日は　釣れたよ。　いい具合に。

B　アー　タイヘン　ツッテキタネー。
　あー　いっぱい　釣ってきたねー。

A　ンー。　コレー　サッソクー　ドーダー　コレ　テンプラダナー。
　ん。　これ　さっそく　どうだ　これ　天ぷらだなー。

B　ア　ンジャ　シコーシテー　テンプラ　ツクルカラー。　オフロエ　デモ　ハ
　あ　それでは　支度して　天ぷら　あげるから。　お風呂へ　でも

　ハエラッセ。
　入って下さい。

A　ハイヨー。　ンジャー　ハイルカラナエ。
　はいよ。　では　入るからな。

III　方言と昔話

方言と昔話

篠木 れい子

方言調査の3年目（昭和60年度）には、各地点に語り継がれている昔話（地点によっては伝説も含む）を、話者の方々に語っていただいた。

各地点で、以下に示すような昔話が収録できた。

(1) 前橋市富田町

No.	話題	話者
1	桃太郎	有間とく
2	花咲か爺さん	吉田たき
3	うさぎとかめ	有間とく
4	浦島太郎	吉田たき
5	馬鹿聟どんの話	松本久作
6	きつねの嫁入り	〃
7	狐の呪いの話	〃
8	狐に化かされた話(1)	〃
9	〃 (2)	〃
10	狐の仕返しの話	大沢忠男
11	少将塚の話	森村伊勢雄
12	女堀	〃

(2) 下仁田町青倉土谷沢

1	埋蔵金伝説(1)	赤岡悟
2	〃 (2)	赤岡猪三郎
3	おみやばあの話	赤岡量平
4	人を見たら蛙と思え	赤岡あさの
5	豆腐が病気になった話	〃
6	桃太郎	〃
7	〃	赤岡しな
8	トビの湯	赤岡ひな
9	桃太郎	赤岡しな
10	〃	赤岡あさの

(3) 六合村入山世立

1	ねずみの嫁入り	山本直義
2	おちゃぴんちゃん	山本とく
3	しろいねこ	山本つう
4	山あいのお寺	山本武男
5	ぬかぼここめぼこ	山本とく
6	へっぴりよめご	山本直義
7	ぬかぼここめぼこ	〃
8	今日はおもしろかった	山本とく
9	おしゅんだら	〃
10	きゅうねえ渕	山本武男
11	びっぽう神と嫁どん	〃
12	やまいぬの話	山本つう
13	あかしぼの一軒家	山本つう
14	さるむこどん	山本とく
15	うりひめ	〃
16	桃太郎	〃

(4) 片品村土出古仲

1	さるどんとかにどん	星野里可子
2	桃太郎	星野志ん
3	猿聟どん	星野ユキ子
4	カワウソどんとオトーカどん	〃
5	ヘッピリジーゴ	星野里可子
6	化け猫の話	〃
7	イージーサンとワリージーサン	星野タマノ
8	花咲か爺さん	〃

9	桃太郎	星野ユキ子
10	オムラ	〃
11	グツとバタ	星野タマノ
12	舌切り雀	星野里可子
13	ウサギとカメさん	〃
14	浦島太郎	星野タマノ
15	ホンゴロシとハンゴロシ	〃
16	カチカチ山	星野ユキ子
17	三枚の守り札	星野タマノ
18	笠地蔵	星野里可子
19	チャックリガキ	星野タマノ
20	ホトトギス	星野ユキ子
21	ツルの恩返し	星野里可子
22	とうふとこんにゃく	〃
23	熊の恩返し	星野ユキ子
24	へびむこどん	〃

(5) 大泉町下小泉松原

1	狐憑きの話	山口あさ
2	桃太郎	井桁モト
3	かさ屋の話	栗原音吉
4	どうろくじんの話	栗原宇太郎
5	白蛇の話	〃
6	火の玉の話	栗原音吉
7	富岡城落城	〃

上に示した一覧表からもすでに知られるように、平坦部の下仁田、前橋、大泉では、全国で語られている有名な昔話と伝説が主にあって、その数も極めて少ない。それに対して、山間部の片品・六合には、多くの昔話が語り継がれている。特に、片品村の数は群を抜いている。また、片品村では、昔話を「ムカシ」と呼び、以下に示すような「語りの型」が保存されているのが注目される。

導入部

語り手への呼びかけ　例　オバー

語り手の返事　例　アー

昔話の催促　例　今夜モ昔ヲ語ッテ｛クダアイ／聞カセラッシャイ｝

引き受けの返事・昔話の題の提示

例　ソイジャー「(題)」デモ｛語ルベーカナー／ヤッテンベー｝

語りの発端の表現

昔、昔（オバートオジーガ）｛アッタチゲダー／アッタチゲデー／アッタッチャー／アッタッツァー｝

中間の表現

～ゲダー、～ゲデー、～ダッチャー、～ダッツァーで一文が終わる。

一文が語り終わると、聞き手は必ず「フントコサ」と相槌を打つ。

結末の表現

○イチガ酒カッテコータローガ
- ヒン飲ンダッチャー
- ヒン飲ンダッツァー
- ヒン飲ンダー

○ムカシャー　ムクレテ
- トーヤガ
- トーヤエ
  - ハジケタッチャー
  - ハジケタッツァー
  - ハジケタッター
  - ハジケタ

○オシマイ

○ソレッキリ

結末の表現は、当方言では採集できなかったが、『日本昔話通観８、栃木・群馬』（同朋舎、1986）の解説によると

「いちがさかえ」系は、栃木では県北部の塩谷郡で「いちがさきおい申した」「いざさけおいました」「いっちゃさっちゃおわりました」「いじゃさぎおわった」「さあっといちがおわった」など転訛の目立つ句がみられる。これに対し群馬では北部の利根郡を中心に「いちがさかえた」と正統な句を保存し、さらに「いちがさけた（とさ）」「いちがさけえ申す（申した）」などがあり、転訛傾向にあるものに「いちがさかった」「いちがさかったっちゃ」「いちがさけえかった」「いちがさけえかって、のんでまったっちゃ」「いちがさけえかって、おと（おとうどん・くま・けいたろう・さんたろう）がひんのんだ」「いちがさけえただのんだ」「いちがさかってとうやがはじけた」「いちがさかってむかしはむくれろ」などが聞かれる。

とあることから「いちがさかえた」の発音が変化するとともに、その意味が不明になり、「いちが酒買って…」のようになったものと思われる。話者の話によれば、当村には大酒飲みの兄弟、「いち」、と「こうたろう」という人が居たそうである。「酒買って」から、この兄弟「いち」と「こうたろう」が連想されて、「いちが酒買ってこうたろうがひん飲んだ」が生まれたのであろう。

結末の表現の一つであるコレッキリは上記の書によれば群馬県だけで見られるものであるという。

一文一文に挿入される聞き手の相槌「フントコサ」は、オバーやオジーの話を囲炉裏端で瞳をキラキラさせて聞き入る子供の姿を彷彿とさせる。この「フントコサ」の声が次第に小さくなっていくと、子供は夢の世界へ入り、オバーとオジーは孫の安らいだ顔を幸せに確認すると、「イチガ酒買ッテ…」「ムカシャームクレテ…」と唱え、大急ぎで「ムカシ」を終わらせるのである。

昔話には、日常生活では用いられなくなった語や表現が出てくる場合が多い。一時代前の村のことばの様子を知る上でも極めて有意義である。

群馬県下の昔話の採集・研究は柾谷明氏などによってかなり綿密に実施されている。今後、貴重なそれらの研究を参考にしながら、言語研究の立場から昔話に取り組んでみたいと思っている。

以下、五地点の昔話を一つずつ紹介しよう。

兎　と　亀　（前橋市富田町）

話し手　有間　とく　（女）明治41年生まれ

ア　ムカシ　アル　トコニ　ウサギト　カメガ　アソンデイマシタ。
昔　ある　所に　兎と　亀が　遊んでいました。

ア　ウサギノ　ホーア　カケリッコノ　ハナシオ　カメサンニ　シタラ　ジャー　アノー
兎の　方は　かけっこの　話しを　亀さんに　したら　じゃあ　あのう

カケリッコ　シヨー　ト　ユー　ハナシン　ナリマシタガ　ア　ア　ウサギサンガ　カメサン
かけっこ　しよう　と　いう　話に　なりましたが　兎さんが　亀さん

アンマリ　ノロインデ　バカニ　シタ　サレタンデ　カメノ　ホーワ　ンッ　オ　ソレア
あんまり　のろいので　馬鹿に　されたので　亀の　方は　それは

ソレア　オコッテシマイマシタ。
それは　怒ってしまいました。

ソシテ　ウサ　アノ　ンジャー　ムコーノ　ヤママデ　アノー　ドッチガ　ハヤイカ
そして　じゃあ　向うの　山まで　あのう　どっちが　早いか

カケリッコ　シヨージャナイカ　ト　ソーダンオ　シマシタラ　ジャ　ヤッテミヨー　ト
かけっこ　しようじゃないか　と　相談を　しましたら　じゃ　やってみよう　と

イーマシタ。
言いました。

ウサギノ　ホーワ　ア　ハヤクック　トントン　ヤマエ　ノボッテ　イッテ　チュートデ　ウ
兎の　方は　早くって　とんとん　山へ　登って　行って　中途で

フリカイッテ　ミルト　カメア　マダ　アン　デ　デカケター　バイデ　ロクニ　ヤマイ
振り返って　見ると　亀は　まだ　出掛けた　ばかりで　ろくに　山へ

ノボッテキマセンデシタ。　スルト　ウサギノ　ホーワ　アンシンシテ　アー　アンナニ
登ってきませんでした。　すると　兎の　方は　安心して　ああ　あんなに

ノロインジャ　ホコラデ　シトネムリ　シヨーカナ　ト　ユッテ　ミチノ　ハタデ　グーグー
のろいのじゃ　ここらで　一眠り　しようかな　と　言って　道の　端で　グーグー

ネコンデシマイマシタ。　カメノ　ホーワ　シンケン　アル　アルイテ　ソノ　ヒルネオ
寝こんでしまいました。　亀の　方は　真剣に　歩いて　その　昼寝を

シテル　ウサギサンノ　トコロー　（舌打ち）　ダマッテ　トーッテ　イキマシタ。　ソシテ
してる　兎さんの　所を　黙って　通って　行きました。　そして

カメサンノ　ホーワ　イッ　ヤマノ　チョージョーマデ　ウサギガ　キナイ　ウチニ
亀さんの　方は　山の　頂上まで　兎が　来ない　うちに

ノボッテシマイマシタ。　ウ　ウサギガ　ビックリシテ　メオ　サマスト　モー　カメサンワ
登ってしまいました。　兎が　びっくりして　目を　覚ますと　もう　亀さんは

ア　ヤマノ　ウエノ　ホーマデ　ノボッテ　イッテ　アワテテ　カケッテ　イッタケレド
山の　上の　方まで　登って　行って　あわてて　かけて　行ったけれど

モー　マニヤワズ　カメサンノ　ホーガ　カチマシタ。　ア　オワリデッ……（笑）
もう　間に合わず　亀さんの　方が　勝ちました。　ああ　終わりです。

病気になった豆腐（下仁田町青倉字土谷沢）

話し手　赤岡あさの　（女）大正10年生まれ

アルトキー　トーフガ　ビョーキニ　ナッチャッテー　ヤサイノ　ナカマガ　オトーフガ
或る時　豆腐が　病気に　なってしまって　野菜の　仲間が　お豆腐が

ビョーキニ　ナッタカラ　オミマイニ　イクベーヤ　チュー　コトニ　ナッタンデ　マーズ
病気に　なったから　お見舞に　行こうや　という　ことに　なったので　まず

ダイイチニ　ダイコンワ　マッシロニー　オシロイオ　ツケテ　ゴボーノ　ウチー　サソイー
第一に　大根は　真白に　白粉を　付けて　ごぼうの　家に　誘いに

イッタンダト。　ソーシタトコロガ　ゴボーワ　イマー　ススハライオ　シテ　イルノデ
行ったのだって。　そうしたところが　ごぼうは　今　煤払いを　して　いるので

カラダガ　マックロナンデ　オフロニ　ハイッテカラ　キレーニ　ナッテ　イグヨト
身体が　真黒なので　お風呂に　入ってから　きれいに　なって　行くよと

イッタンデ　ダイコンサン　コンドワ　ニンジンノ　ウチエ　イッテ　オトーフサンノ
言ったので　大根さん　今度は　人参の　家へ　行って　お豆腐さんの

ウチエ　オミマイニ　イコート　サソウト　マッテ　イタンダケド　ナカナカ　コナイカラ
家へ　お見舞に　行こうと　誘うと　待って　いたのだけど　なかなか　来ないから

サケオ　ノンデ　カオガ　マッカニ　ナッチャッテ　ハズカシーカラ　スコシ　ヨイー
酒を　飲んで　顔が　真赤に　なってしまって　はずかしいから　少し　酔を

サマシテー　イグヨ　ト　コトワラレ　シトリデ　ダイコンサン　イグノワ　ヤダカラ
醒まして　行くよ　と　断られ　一人で　大根さん　行くのは　いやだから

マタ　ナスノ　ウチエ　イッテ　トーフサンガ　ビョーキニ　ナッタチューカラ　オイ
また　茄子の　家へ　行って　豆腐さんが　病気に　なったというから

オミマイニ　イッテ　クベーヤ　ッテ　ソーニ　　ユッタトコロガ　イマ　オハグロー
お見舞に　行って　来ようや　と　そのように　言ったところが　今　御歯黒を

ツケテ　シマッタンデ　サキニ　イッテ　クレヤーッテ　ナスニモ　コトワラレ
付けて　しまったので　先に　行って　くれやと　茄子にも　断られ

ダイコンサンワ　シトーリデ　オトーフノ　トコロエ　イッテ　ミンナー　ヤ　ミンーナシテ
大根さんは　一人で　お豆腐の　所へ　行って　皆は　　皆で

サソッテ　オメーオ　ビョーキ　ミマイニ　キヨート　オモッタンダケド　ミンーナ
誘って　お前を　病気　見舞に　来ようと　思ったのだけど　皆

コトワラレテ　ミンナ　ソーユー　ジョータイダカラ　オレガ　シトリデ　キタ
断られて　皆　そういう　状態だから　俺が　一人で　来た

ドーダヤッテ　ソーニ　ダイコンサンガ　ユート　ミンナワ　ゲンキデ　イーナー
どうだいと　そのように　大根さんが　言うと　皆は　元気で　いいなあ

ソーヤッテ　ゲンキニ　スハライモ　デキタリ　サケモ　ノメタリ　オハグロツケタリ　シテ
そうやって　元気に　煤払いも　できたり　酒も　飲めたり　御歯黒付けたり　して

オラー　モー　コーニ　ナッチャッテ　モトノ　マメニワ　モドレナイッテ　トーフガ
俺は　もう　このように　なってしまって　元の　豆には　もどれないと　豆腐が

ナイタト。　ソーユー　ハナシナンダヨ。　トシー　トッテカラ　オトーフー　トルト
泣いたって。　そういう　話なのだよ。　年を　取ってから　お豆腐を　摂ると

ゴハンノ　タベナクモ　オトーフー　イッチョー　タベリャー　イーッチューグライニ
ご飯を　食べなくても　お豆腐を　一丁　食べれば　いいというぐらいに

ヨノナカノ　タメニ　ツクシテンダケド　オトーフサンノ　ミン　ナレバ　マメデ
世の中の　ために　つくしているのだけど　お豆腐さんの　身に　なれば　豆で

イタカッタンジャ　ネンカヤ。　（笑）　ソー　ユッテ　マー　キカシタ
いたかったのでは　ないかね。　そう　言って　まあ　（孫達に）聞かせた

トコナンデス。　トーフワ　カワイソーダッツーカラネー　トーフワ　トーフデ
ところなのです。　豆腐は　かわいそうだと（孫が）言うからねえ、　豆腐は　豆腐で

イチニンヤクデ　マメニ　ナラナクモ　マメオ　コナニ　シタ　モンガ　オトーフナンダカラ
一人役で　豆に　ならなくも　豆を　粉に　した　ものが　お豆腐なのだから

ソー　ヤッテ　ツトメ　アノー　ジブンノ　シ　アレダー　ミオ　ミンナニ　ニンゲンニ
そう　して　　あの　自分の　　あれだ　身を　皆に

アノー　ニンゲンノ　タメン　ナッテンダカラ　オトーフサンワ
あの　人間の　ために　なっているのだから　お豆腐さんは

リッパナンダヨッタラ　フーン　ダイコンサンガ　マッシロニ　ナラーネー　アラヤー
立派なのだよと言ったら、　ふう　大根さんが　真白に　なるよねえ　洗えば、

ダカラ　ソーユーンツッテ。　ソーデ　オバーチャン　ニンジンサンワ　オサケノンデ
だから　そう言うのといって。　それで　お婆ちゃん　人参さんは　お酒を飲んで

アカク　ナッタノーツッテンダカラ　ハー　チーサイモンダカラ。　(笑)
赤く　なったのと言っているのだから、　もう　(孫は) 小さいものだから。

オチャピンチャーン (六合村入山字世立)

語り手　山本　とく　(女)　明治41年生まれ

マー　ムカシ　アルッツァ。　ボデ　オジューサンガ　ハタケフミュエ　イッタソーダ。
まあ　昔　あるとき。　それで　お爺さんが　畑踏みに　行ったそうだ。

ベントーニ　ボタモチュオ　モッテイッテ　ソノ　ハタケフミー　イッタカラ　エンガノ
弁当に　ぼた餅を　持って行って　その　畑踏みに　行ったから　鍬の

イェーノーゲー　トリガ　ツイテ　ソノ　ボタモチュオ　ナゲタリャ　トリガ　ソレ
柄に　鳥が　付いて　その　ぼた餅を　投げたら　鳥が　それ

ボタモチデ　トレタソーダー。　ア　ソレデ　ソノ　オジューサンガ　トリオ
ぼた餅で　捕れたそうだよ。　あ　それで　その　お爺さんが　鳥を

ツカメーテキテ　ノンダリャー　ヘソエ　アシオ　ダシテ　ア　ソレデ　マー
捕まえて来て　飲んだら　へそへ　足を　出して　あ　それで　まあ

シェイテミタリャー　ゴヨーノ　サカズキ　オチャピンチャーンテ　ソーイッタソーダ。
引いてみたら　ゴヨーノ　サカズキ　オチャピンチャーンて　そう言ったそうだ。

ハー　ソレデ　ウチイ　キテ　マー　コリャー　マー　ヨカッタト　オモッテ　ネ
もう　それで　家へ　来て　まあ　これは　まあ　良かったと　思って

ヤクニュンサンノ　トール　ミチエ　イッテテ　ヤッテミセタリャー　ヤクニュンサンガ
役人さんの　通る　道へ　行っていて　やってみせたら　役人さんが

エライ　カネー　クレタソーダー。(笑)
沢山　金を　呉れたそうだよ。

ソレデ　マー　ウチエ　キテ　エライ　ヨロコンデ　エクドモ　エクドモ　オジューサンガ
それで　まあ　家へ　来て　とても　喜んで　幾度も　幾度も　お爺さんが

ソレニ　デタソーダー。
それに　出掛けたそうだよ。

桃　太　郎（片品村土出字古仲）

語り手　星野ユキ子　（女）大正5年生まれ
聞き手　星野タマノ　（女）大正9年生まれ

（オバー　ムカシオ　カタッテ　クライ。
おばあさん　昔を　語って　下さい。）

ンー。　ソイジャー　モモタローデモ　カタルベーカナー。
うん。　それじゃあ　桃太郎でも　語ろうかなあ。

ムカシ　ムカシ　アッタッチャー。　（フントコサ。）　オジート　オバーガ
昔　昔　あったとさ。　おじいさんと　おばあさんが

フタイデ　スンデ　イテ　オジーワ　ヤマエ　シバカリ　イッタッチャー。
二人で　住んで　居て　おじいさんは　山へ　柴刈りに　行ったとさ。

（フントコサ。）　オバーワ　カーラエ　センタクニ　イッタッチューゲダー。
おばあさんは　川原へ　洗濯に　行ったというそうだ。

（フントコサ。）　ソーシターバ　オキノ　ホーカー　オーキナ　アカェー　モモト　シレー
そうしたらば　沖の　方から　大きな　赤い　桃と　白い

モモガ　ドンブラコー　ドンブラコッテ　ナガイテ　キタッチューゲダー。（フントコサ。）
桃が　ドンブラコー　ドンブラコって　流れて　来たというそうだ。

ホーシターバ　オバーワ　アカェー　モマー　コッチー　コー　シレー　モマー
そうしたらば　おばあさんは　赤い　桃は　こっちへ　来い　白い　桃は

アッチーゲッターバ　シレー　モマー　ナキナキ　アッチー　イッタシ　アカェー
あっちへ行け（と言）ったらば　白い　桃は　泣き泣き　あっちへ　行ったし　赤い

モマー　ワラェーナガラ　オバーノ　ホーエ　キタッチューゲダー。（フントコサ。）
桃は　笑いながら　おばあさんの　方へ　来たというそうだ。

ホーシターバ　オバーワ　オーヨロコビデ　ソノ　モモオ　ヒロッテ　ウチー　モッテ
そうしたらば　おばあさんは　大喜びで　その　桃を　拾って　家に　持って

キテ　オジーガ　ヤマカー　キターバ　フタイデ　コノ　モモ　ワッテ
来て　おじいさんが　山から　来たらば　二人で　この　桃を　割って

クーベートモッテ　トダナエ　シマッテ　オイタッチューゲダー。（フントコサ。）
食おうと思って　戸棚へ　しまって　おいたというそうだ。

ホシターバ　オジーガ　ヤマカー　シバー　ウントコ　ウントコ　ショッテ
そしたらば　おじいさんが　山から　柴を　ウントコ　ウントコ　背負って

キタッチューゲダー。 〔フントコサ。〕 オジー オジー キョーワ マー
来たというそうだ。 おじいさん おじいさん 今日は まあ

エラェー ヒレーモンノ シテ オジーガ キターバ クーベートモッテ ドダナエ
えらい 拾い物を して おじいさんが 来たらば 食おうと思って 戸棚へ

シマッテ オイタヨッテ ユッタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕 ドラヤイ ソイジャー
しまって おいたよって 言ったというそうだ。 どれどれ それじゃあ

ハヤク モッテコーヤイナンテ ソイジャーナンテ オバーガ モッテ キテ パンノ
早く 持って来いやなんて それじゃあなんて おばあさんが 持って 来て まな板の

ウエー ノセタッチューゲダー。 〔フントコサ。〕 ソーイデ デッカェー ホーチョー
上へ のせたというそうだ。 それで 大きい 庖丁を

モッテ キテ フタッツニ ワルベートモッターバ モモガ ポント ワレタッチュゲダー。
持って 来て 二つに 割ろうと思ったらば 桃が ポンと 割れたというそうだ。

〔フントコサ。〕 コーリャー マー モモカラ オーキナ アカッコガ ウマイタモンデ
これは まあ 桃から 大きな 赤子が 生まれたもんで

オジート オバー ブッタマゲタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕 ソイジャー
おじいさんと おばあさんが ぶったまげたというそうだ。 それじゃあ

マー モモカー ウマイタカー モモタローッテ ナオ ツケベーカイッテ フタイデ
まあ 桃から 生まれたから 桃太郎って 名を 付けようかいって 二人で

モモタローッテ ナオ ツケタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕 ソーシターバ ソノ
桃太郎って 名を 付けたというそうだ。 そうしたらば その

アカッコガ グンーグン デカク ナッタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕 ホーシターバ
赤子が グングン 大きく なったというそうだ。 そうしたらば

アルヒ デカク ナッテ オジーサント オバーサンニ オラー オニガシマエ
ある日 大きく なって おじいさんと おばあさんに おれは 鬼が島へ

オニタイジニ イギテァーカー ニッポンイチノ キビダンゴオ ツクッテ クダイッテ
鬼退治に 行きたいから 日本一の 黍団子を 作って 下さいって

ユッタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕 ホエダモンデ ソイジャー マー
言ったというそうだ。 それだもんで それじゃあ まあ

ニッポンイチノ キビダンゴオ ツクッテ クイベーッチューデ オバーガ
日本一の 黍団子を 作って くれようというので おばあさんが

イッショーケンメー キビダンゴオ ツクッタッチュゲダー。 〔フントコサ。〕
一生懸命 黍団子を 作ったというそうだ。

ソーシター オジーワ ソイジャー マー ニッポンイチノ ハタオ ツクッテ
そうしたら おじいさんは それじゃあ まあ 日本一の 旗を 作って

クイベーッテ　ニッポンイチノ　ハタオ　ツクッテ　クイタッチュゲダー。（フントコサ。）
くれようって　日本一の　旗を　作って　くれたというそうだ。

ホイダモンデ　モモタローワ　イサンデ　ソノ　ダンゴオ　コシー　ユッツケテ
それだもんで　桃太郎は　勇んで　その　団子を　腰に　結い付けて

ニッポンイチノ　ハター　カツイデ　オニガシマノ　ホーエ　ダンダン　シカッ　シタクオ
日本一の　旗(を)　担いで　鬼が島の　方へ　段々　×××××　仕度を

シテ　デカケタッチュゲダー。（フントコサ。）　ホーシテ　ダンーダン　イグト　ムコーノ
して　出かけたというそうだ。　そうして　段々　行くと　向うの

ヤマノ　ホーカラ　ガサガサッチュー　オトガ　シウートモッターバ　イヌガ
山の　方から　ガサガサという　音が　すると思ったらば　犬が

ワンワンワンナンテ　キタッチュゲダー。（フントコサ。）　ソーシテ　モモタローサン
ワンワンワンなんて　来たというそうだ。　そうして　桃太郎さん

モモタローサン　ドチラエ　オイデン　ナリマスカッテ　イヌガ　ユッタッチュゲダー。
桃太郎さん　どちらへ　おいでに　なりますかって　犬が　言ったというそうだ。

（フントコサ。）　オラー　オニガシマエ　オニタイジニ　イグッテ　ユッタッチュゲダー。
おれは　鬼が島へ　鬼退治に　行くって　言ったというそうだ。

（フントコサ。）　ホーシター　オコシニ　ツケル　モノワ　ナンデスカッテ　ユッタモンデ
そうしたら　お腰に　付ける　物は　何ですかって　言ったもんで

コレワ　ニッポンイチノ　キビダンゴダッテ　ユッタッチュゲダー。（フントコサ。）
これは　日本一の　黍団子だって　言ったというそうだ。

ヒトツ　クダサイ　オトモシマスッテ　ユッタッチュゲダー。（フントコサ。）
一つ　下さい　御供しますって　言ったというそうだ。

ホイダモンデ　ソイジャー　キビダンゴオ　クイルカー　オニガシマエ　イグニ
それだもんで　それじゃあ　黍団子を　くれるから　鬼が島へ　行くのに

ケライン　ナッテ　ツイテコーナンテ　ユッテ　ソーイデ　イヌオ　ツレテ　ダンダン
家来に　なって　ついて来いなんて　言って　それで　犬を　連れて　段々

イッタッチュゲダー。（フントコサ。）　ソーシターバ　コンダ　マタ　ガサガサ　ヤマノ
行ったというそうだ。　そうしたらば　今度は　また　ガサガサ　山の

ホーガ　オトガ　シタトモッターバ　サルドンガ　キタッチュゲダー。（フントコサ。）
方が　音が　したと思ったらば　猿ドンが　来たというそうだ。

モモタローサン　モモタローサン　ドチラエ　オイデン　ナリマスカッテ
桃太郎さん　桃太郎さん　どちらへ　おいでに　なりますかって

ユッタッチュゲダー。（フントコサ。）　オラー　オニガシマエ　オニタイジニ　イグッテ
言ったというそうだ。　おれは　鬼が島へ　鬼退治に　行くって

ユッターバ　オサル　サルガ　オコシニ　ツケテル　モノワ　ナンデスカッテ
言ったらば　　猿が　お腰に　付けてる　物は　何ですかって

ユッタッチュゲター。　（フントコサ。）
言ったというそうだ。

コレワ　ニッポンイチノ　キビダンゴ。　ヒトツ
これは　日本一の　黍団子。　一つ

クダサイ　オトモオ　シマスッテ　ユッタッチュゲダー。　（フントコサ。）　ソレジャー
下さい　御供を　しますって　言ったというそうだ。　　それじゃあ

オトモニ　ツイテ　クルダーバ　キビダンゴオ　クレベーッテ　サルドンニモ
御供に　付いて　来るのならば　黍団子を　くれようって　猿ドンにも

キビダンゴオ　クイタッチュゲダー。　（フントコサ。）　ソーイデ　マタ　ダンダン
黍団子を　くれたというそうだ。　　それで　また　段々

イグト　コンダー　ウエノ　ホーデ　バタバタッ　ケーンケーンッテ　オトガ
行くと　今度は　上の　方で　バタバタッ　ケーンケーンって　音が

シルッチュゲダー。　（フントコサ。）　ミターバ　キジドンガ　ケンケン　ナキナガラ
するというそうだ。　　見たらば　雉ドンが　ケンケン　鳴きながら

トンデ　キタッチュゲダー。
飛んで　来たというそうだ。

（フントコサ。）　モモタローサン　モモタローサン　ドチラエ　オイデン　ナリマスカッテ
　　桃太郎さん　桃太郎さん　どちらへ　おいでに　なりますかって

ユッタッチュゲダー。　（フントコサ。）　オラー　オニガシマエ　オニタイジニッテ
言ったというそうだ。　　おれは　鬼が島へ　鬼退治にって

ユッタッチュゲダー。　（フントコサ。）　オコシノ　モノワ　ナンデスカッ…ター
言ったというそうだ。　　お腰の　物は　何ですかっ…たら

ニッポンイチノ　キビダンゴッテ　ユッタッチューゲダー。　（フントコサ。）　サー
日本一の　黍団子って　言ったというそうだ。　　さあ

ヒトツ　クダサイ　オトモ　シマスッテ　ユッタモンデ　ソレジャー　キビダンゴー
一つ　下さい　御供　しますって　言ったもんで　それじゃあ　黍団子を

クイルカー　オトモニ　ツイテコーッテ　ユッタッチュゲダー。　（フントコサ。）
くれるから　御供に　付いて来いって　言ったというそうだ。

ソーイデ　イヌト　サルト　キジト　ツレテ　ダンダン　ダンダン　オニガシマノ　ホーエ
それで　犬と　猿と　雉と　連れて　段々　段々　鬼が島の　方へ

イグト　トークノ　ウミノ　ムコーノ　ホーニ　オニガシマガ　メータッチュゲダー。
行くと　遠くの　海の　向うの　方に　鬼が島が　見えたというそうだ。

（フントコサ。）　ソイダモンデ　ソノ　オニガシマエ　イッテ　モンオ　アケロッテ
それだもんで　その　鬼が島へ　行って　門を　開けろって

ユッタケオ　モンオ　アケネァーッチュゲダー。　（フントコサ。）　ソイダモンデ
言ったけど　門を　開けないというそうだ。　それだもんで

ショーガナェー　キジドンガ　タカテノ　ホーノ　マドノ　アイテルカー　トコカラ
仕様がない　雉ドンが　高手の　方の　窓の　開いてる　所から

トビコンデ　ホーシテ　ナカカラ　カギオ　アケタッチュゲダー。　（フントコサ。）
飛び込んで　そうして　中から　鍵を　開けたというそうだ。

ソーイダモンデ　モモタロート　イヌト　ミンナデ　ナカエ　トビコンデ　イヌワ　ワンワン
それだもんで　桃太郎と　犬と　皆で　中へ　飛び込んで　犬は　ワンワン

オニノ　アシー　カジリッツクシ　サルワ　キャッキャッテ　ムシリツイテ　キジワ
鬼の　足に　かじりつくし　猿は　キャッキャって　むしりついて　雉は

メダマダノ　ソコネージュー　ヤタラ　ツッツキマーシタッチュゲダー。　（フントコサ。）
目玉の　そこらじゅう　やたら　つっつきまわしたというそうだ。

ソイダモンデ　オニガ　トッテモ　コイジャー　カナーナェートモッテ　コーサンシテ
それだもんで　鬼が　とても　これじゃあ　かなわないと思って　降参して

イマッカラ　ワリー　クトワ　シナェーカラ　カンベンシテ　クダサイ　コレッカラ　ワリー
今から　悪い　事は　しないから　勘弁して　下さい　これから　悪い

クトワ　ゼッタイ　シマセンッテ　ユッタッチュゲダー。　（フントコサ。）　ソーイデ
事は　絶対　しませんって　言ったというそうだ。　それで

ココデ　ミンーナ　ムラカラ　ヌスンダリ　ワリー　クトー　シテ　アツペタ　タカラモンノ
ここで　皆　村から　盗んだり　悪い　事を　して　集めた　宝物を

ミンナ　モモタローサンニ　カェースカー　カンベンシテ　クダイッテ　ダイハチグルマノ
皆　桃太郎さんに　返すから　勘弁して　下さいって　大八車の

デッカェー　クルマエ　タカラモンノ　ミンーナ　ツンデ　コレオ　モッテッテ
大きい　車へ　宝物を　皆　積んで　これを　持ってって

クダサイッテ　エッタッチュゲダー。　（フントコサ。）　ソイダモンデ　ソイジャー
下さいって　言ったというそうだ。　それだもんで　それじゃあ

イヌガ　ダイハチグルマ　ヒキダシタゲダー。　（フントコサ。）　ホーシター　キジガ
犬が　大八車(を)　引き出したそうだ。　そうしたら　雉が

ツナー　ツケテ　ヒクゲダー。　（フントコサ。）　シター　オサルガ　アトオシオ　シテ
綱　つけて　引くそうだ。　そしたら　お猿が　後押しを　して

ソーシテ　ニッポンイチノ　ハタオ　カツイデ　キジガ　ツナ　ヒク　エンヤラヤ　サルガ
そうして　日本一の　旗を　担いで　雉が　綱　引く　エンヤラヤ　猿が

アト　オス　エンヤラヤッテ　ユイナガラ　カケゴエ　カケテ　ウチノ　ホーエ　カェーッテ
後　押す　エンヤラヤって　言いながら　かけ声　かけて　家の　方へ　帰って

キタゲダー。　（フントコサ。）　オジーサント　オバーサンワ　ハー　モモタローガ
来たそうだ。　　おじいさんと　おばあさんは　もう　桃太郎が

オニオ　タイジシテ　カェーッテ　（咳）　クルガントモッテ　ハー　カェードエ　デテ　アッテ
鬼を　退治して　帰って　来るかなと思って　もう　街道へ　出て　あって

イタゲダー。　（フントコサ。）　ソーシターバ　ソコエ　オーイセーデ　ニッポンイチノ
いたそうだ。　　そうしたらば　そこへ　大威勢で　日本一の

ハター　カツイデ　ダイハチグルマエ　タカラモンノ　ツンデ　バンザーイ　バンザーイッテ
旗(を)　担いで　大八車へ　宝物を　積んで　バンザーイ　バンザーイって

カェーッテ　キタッチャ。　（フントコサ。）　ムカシャー　ムクレテ　トーヤガ
帰って　来たとさ。　　昔は　むくれて　とうやが

ハジケタッチャ。　（二人笑）
はじけたとさ。

桃太郎の話（大泉町下小泉字松原）

語り手　井桁　モト　（女）　明治40年生まれ

ムカシ　アルトコロニ　オジーサント　オバーサンガ　イマシタ。　オバーサンワ　ヤマエ
昔　あるところに　おじいさんと　おばあさんが　いました。　おばあさんは　山へ

シバカリニ　イッテ　オカー　オバーサンワ　カワエ　センタクニ　イッテ　センタクオ
薪とりに　行って　おばあさんは　川へ　洗濯に　行って　洗濯を

シテイルト　ヤマカラ　ア　カ　オシ　カミ　カミノ　ホーカラ　ン　モモガ　ナガレテ
していると　山から　あ　上の　方から　ん　桃が　流れて

キマシタ。　オバーサンワ　ヨロコンデ　モモオ　ヒロッテ　カエッテキテ　ン　モモオ
きました。　おばあさんは　喜んで　桃を　拾って　帰ってきて　ん　桃を

ワッテミルト　オト　オーキナ　オトコノコガ　ウマレタンダッテ。　ソノ　ソノコオ
割ってみると　大きな　男の子が　生まれたんだって。　その子を

ダイジニ　ソダッテルウチニ　（息つぎ）　ム　オニ　オニタイジニ　イ　イコーット
大事に　育ててるうちに　　ん　鬼退治に　行くと

ユッタノデ　オ　オ　オ　オバーサンワ　キミダンゴオツクッテ　ヤッテ　オ　オ
言ったので　おばあさんは　黍だんごを　作って　やって

オジーサンワ　ハタオ　ツクッテ　ンモ　オニタイジニ　デカケルト　キ　キジガ　キテ
おじいさんは　旗を　作って　鬼退治に　出かけると　雉子が　来て

オコシニ　ツケタ　キミダンゴ　クダサイッテ　ユッタノデ　ヒトツ　ヤッテ　オトモ
腰に　つけた　黍だんごを　下さいと　言ったので　一つ　やって

オトモ　サセテ　マタ　エグト　コン　イ　コンダー　イ　イヌガ　キマシタ　キタノデ
お供を　させて　また　行くと　今度は　犬が　来ました。　来たので

マタ　キ　ソノ　キミダンゴー　クダサイッテ　ユッタノデ　ソノ　キミダンゴー　ヤッテ
また　その　黍だんごを　下さいと　言ったので　その　黍だんごを　やって

マタ　オトモーニ　シテ　サ　ソノウチニ　マタ　イグト　サルモ　キテ　サ　サルモ
また　お供に　して　そのうちに　また　行くと　猿も　来て　猿も

オトモシマス。　キミダンゴー　ヤッテ　オトモシテ　ン　ンートー　サン　サン　アイ
お供します。　黍だんごを　やって　お供して　ん　えーと

イヌト　サルト　キジト　ミンナデ　オニオ　タイジニ　イキ　イッテ　マタ　（話が中断）
犬と　猿と　雉子と　みんなで　鬼を　退治に　行き　行って　また

群馬の方言

昭和62年3月15日　印刷
昭和62年3月31日　発行

編集・発行　群馬県教育委員会
印　　刷　朝日印刷工業株式会社